外に睿智の作用あるを知ることは至難の事なり。此の見解によれば所謂本能的作用なるものは、單に受造物の周圍に對する非常に複雜なる順應の結果と稱すべきものならん。斯く觀ずる時は本能其物は空漠のものたるべし。

凡て豐富なる思想は、理解せらるべき言葉を以てすべきものなるを悟るほどに、發達し居らざる心に取りては、此の言は極めて獨斷的なるが如く思はれざるべからず。誰か能く宇宙間に『有り得べき事』の限界を定め得んや。之れが答は吾人の問題は少しも世に『有り得べき事物』に關するものにあらず、唯だ吾人をして最も明に宇宙を理解せしむべき、世界原由の概念を發見せんと欲する更に謙遜なる問題たるに過ぎざるなり。此の如く健全なる心を以て之れを見れば、睿智及び理性は目的によりて導かるゝものなり。目的によりて導かるゝことは、目的が理想的の目的として意識中に現存するにあらずんば無意義たる語なり。然らざれば此に理性若しくは睿智ありといふこと能はず、唯だ合理的作用を模倣する必然的動作ありといふべきのみ。

あらゆる存在の原由にして、終に有限なる心靈に至りて意識に到達せる無人格的心靈といふ總念を以て、如上數說の歸着する意義となす者あらん。然れどもこれ言ひ易くして解し難き說なり。事實は別名を被りたる無神論に過ぎざるなり。無神論者が永存的勢力、若しくは根本的實有と稱するものを、こゝには無人格的心靈と名くるものにして、其の意味は兩者とも同一なり。兩者の等しく

解するところは、凡ての現象の根源にして、且つ其の必然的開發により生と死とを起すところの、かの盲目にして必然なる實有なりとす。然れどもこは名のみ新にして實は吾人が既に評論したる舊說に過ぎざれば、之れを改めて論ずる要なかるべし。吾人は結論を下さんと欲す。曰く『世界の原由にして睿智あり且つ合理的のものならば、又た意識あり且つ人格的のものたらざるべからず』と。

此の說はかの有神思想の二律背反に到らしむるもの也。意識睿智及び人格等の有神論的實位は、思索家の主張する世界原由の絕對無限と、一見兩立し難きものありと。前者は有限と他のものといふ觀念を含み、之れを後者と結ぶときは相互自滅に終らざることなし。

斯かる困難に際しては、吾人はまづ自らの使用する言葉を定義する必要あり。從來の定義によれば、睿智とは內的關係の外的關係に對する調整にして、發展し行く所の有限なる物となしたり。此の意味によれば無論睿智は無限絕對の實在となすこと能はざるべし。さりながら此の事の實際の要點　精髓とも稱すべき睿智を以て、知る力と解するときは、之れを無限絕對の實在に附するも敢て妨げなかるべし。此の知る力は制限にあらずして完全なり。されば世界の原由は絕對なるが故に睿智存すべからずと否定せんか、若しくは哲學者一派の僻說たる睿智を以て內的關係と外的關係との調整なりと解せんか、必ずや吾人は此の否定を贊せざるべからず。されど若し睿智を以て單に知る

力なりと解せんか此の否定に反對せざるべからざるなり。

又た人格を肯定するに當りても、吾人は人格を有體性、若しくは凡て有形物と混同すべきものにあらず。通俗の宗教思想は常に此の概念を畫かんとせり。而して又た通俗の宗教的言語は多く之を言ひ顯はすに空間的、有形的の要素を以てするものなり。されば批評的ならざる思想の過多なる擬人觀を制せんが爲めには、常に聰明なる教育上の注意を要するものなり。批評家と雖も亦た此の要全く無用なりと言ひ難し。何となれば彼等の反對の大部は肝要なる意義に透徹するものにあらずして多くは粗野なる擬人觀の言葉に反對したるものなればなり。『思索的の家畜は神を以て己れに類するものゝ如く推論するならん』とはゼノファネス以來の批評なれども、こは人格と有體性とを混同するより生じたるものなり。此の深玄なる反對論の例證として牛、水牛、或は時計までも引き出されたり。然れども若し此の思索的時計にして、自からの原由を發條、槓杆、操縱機等に歸せずして其の製作者には睿智ありと結論するならんか、吾人は其の結論は至當ならじと稱し難きを知らん。されば人格とは、自識（セルフナレッジ）と自治（セルフコントロール）との謂にして、此の二要素の存せんか、即ちこれを人格と稱すべきも、若し此等にして存せざらんか、即ち無人格の實有となるものなり。自我（セーフフット）、自識（セルフナレッジ）、自導（セルフディレクション）等は人格の精髓にして些の有體性なく又た依存的制限をも有せざるものなり。

絶對無限といふ言葉も同じく定義を要するものなり。哲學史上緊要なる言辭上の議論は、此等の

言葉によりて爲されたり。世界の原由は決して思想の對象となるものにあらず。されば人格的とも無人格的とも亦た睿智的とも無睿智的とも考ふる能はず。其の理由は根本的實在の必然的屬性間に存在すとせられたる相互の矛盾にありと。斯く吾人は根本的實在を以て自己中心となす、故に之れを絶對と認めざるべからず。己れ以外のものによりて制限せられず、故に無限ならざるべからず。世界の原由なり故に第一原因なり。さりながら吾人は思想の順序として如上の說を承認せざるべからざるが如しと雖も亦た等しく其の相互の矛盾によりて之れを否定せざるべからず、何となれば第一原因は、唯だ結果と關係して存するものなるが故に、結果なかりせば原因は存せざるべし。されば第一原因は必然的に結果と相關係するものなり、既に關係を有すとせんかそは絶對と稱し難し、何となれば絶對は凡ての關係を離れたるものなればなり。絶對は原因たること能はず、原因は絶對たることを得ず。又た時間の觀念よりするも之れを維持すること難し。世界の原由は先づ絶對者として存在し、次に原因となりたりとすれば、無限者といふ總念此の思想を許さゞるものあり。凡て新なる存在の樣態を取るものは、其の物以上に昇るか將た以下に降るか二者の中一を取らざるべからず然かもかくありては何れにても無限者たること能はず。何となれば無限者は常に有らゆる存在の樣態を包有せざるべからざればなり。されば此等の屬性中には凡て吾人の知識と考へしものをも破碎せしむる、憂ふべく悲しむべき矛盾を有するものなりと。これその反論也。

此論にして若し從來重きを爲さゞりしものならばこは評論するほどの價値あるものにあらず。されど世往々にして之れに惑はさるゝものあるを以て、吾人は玆に聊か之れを辯明し置くことゝすべし。此の議論は專ら言辭を弄するものなり。字義上よりいへば此の如き意味を絶對無限等の言葉より絞り出すことを得べし。無限者を以て數量的の總計と見做し、又た絶對者とは關係なきものを指すとすれば、上の如き結論は自然に生じ來るべし。蓋し數量的の無限者は固より萬物を包有せざるべからず。其の外には物の存在すべき樣なきなり。而して萬物とは凡ての時にあらゆる存在の樣態を包有するものとせば變化といふものゝ存せざるや明なり。されば宇宙はかのエリア派の如く嚴正なる單調に陷らざるを得ず。若し絶對者なる語を定義して關係なきものとせば、絶對者には關係の存せざるべきは論ずるまでもなし。然れども吾人若し此等の言葉の哲學上の意味を記憶せば此の似て非なる道理は自ら雲散霧消するものあらん。絶對無限とは唯だ萬物の獨立なる原由を意味するものにして、相對的存在とは唯だ他のものに關して存在するを得べきものを云ふ。其の存在の原由も形狀も兩つながら其の關係の中に拘束せらるゝものなり、斯かる關係は制限にして他を所依とするものなるを含意す。されど絶對は此の制限と所依とを否定するものなり。されば其の關係若し己れの自由に設くるところにして外部より强ふるところにあらずんば、絶對者もなほ其の關係の狀態に於て存在することを得ん、又た無限者とは數量的の總計をいふものにあらず。此の『總計』といふ語は

吾人の思想を離るれば、何事をも表示せざる心理的の所產なり。世界の原由を無限なりと稱するは有限者及び其の諸の制限の獨立なる根源にして、然かも論理上の整合の意味以外には少しも之れが爲めに拘束せらるゝものなりと信ぜらるればなり。されど此の意味に於ては絶對者及び無限者の總念は互に相矛盾するものにあらざるのみか、相互含有するものにして、同一なるものゝ異なりたる側面たるに過ぎざるなり。無限者は絶對にあらざれば、無限なるを得ず。無限なる絶對者も原因たるにあらざれば、蓋しそは畢竟するに空なるものに過ぎざらん。

されば吾人は爰に凡て有限なるもの、又た凡ての勢力と知識の本源たる絶對獨立の實在を有するものなり。あらゆる勢力及び知識の本源、原由たるものが、自ら知らず又た其の爲すところをも知らずといふが如きは、最も確實明瞭なる理由を以てするにあらずんば到底信じ難き奇怪なる見解と稱せざるべからず。思想の顚倒之れより甚だしきものなかるべく、其の意義を顧みずして妄りに言語を弄するの害、之れより甚しきものなかるべし。これ實に好例證と稱するに足らん。

反對者曰く凡て意識は主觀、客觀の別あるを要す。故に孤立單獨のものは意識を有すること能はず、されば意識は世界の原由の無限なると單一なるとに矛盾するものなり。蓋し無限なれば己の外に物あることなく、單一なれば其の對象を有すべき筈あることなしと。然れどもこれ心意上の形式

と本體學上の區別とを混同することによりて生ずる誤謬なりとす。凡ての意識に於ける客觀は常に吾人の表現にして、本體學上心と異なるものにあらず。此等の表現は物を表はすものならん、されど意識は唯だ心の中の表現に達するのみ。自覺（セルフコンシヤスネス）に於ては此の事極めて明白なり。さて自覺とは吾人の狀態及び思想等をば自己の物として意識することを稱するものなるを以て、無限者は己れ以外のものを、其の客觀となす必要を有せざるなり。其の宇宙的なると否とを論ぜず、凡て自からの活動中に其の客觀を見出し得るものなり。

此の事實は形稍異なる他の反對に答ふるを得べし。曰く我と非我とは對立の總念にして互に相離るゝときは兩者とも何等の意義をも有せざるなり。故に我なる概念は非我の概念と共に起るとき始めて生ずるものなり。これを以て自覺は非我によりて制限せらるゝ有限の實在のみ之を有するを得べしと。

此の反論の前半が果して眞面目に試みられたるものなるか否かは、容易に信ずること能はざるなり。蓋し相互に否定するを以て其の意義をなす二個の總念は、積極的內容を有せざる純然たる否定是れなり。例へばAは非BにしてBは非Aなり。即ちAは非非Aにして、Bは非非Bなり。此の如く其の終りは其の始めと異らず、唯だ同一の場所を往來するに過ぎず。故に此等總念をして意義あらしめんと欲せば他と相關せず獨立して積極的意義を有せしむることを要す。我と非我との場合の

如き其の何れが積極的總念なるやは蓋し自ら明瞭ならん。我は直接經驗せられたる自己にして、非我はもと心の表現の總和に過ぎず。換言すれば其の意識に於て我（エゴー）が其の對象として己に相對せしむるものなり。從て非我は意識的自我より取除かれたるものを意味するに至る。人は其人と物とを論ぜず、凡て其の對象を己と對峙せしむ。之れ其の人にとりて非我たるものなり。此の曖昧を看過せしが爲め或る思索家は之れを以て種々雜多の眞理を證明せんと試みたり。或は意識は主觀と客觀とを要するものなりとの見地より。物質の實有を確立して唯心論を說破したりとせり。又は意識は非我を要す、而して物質は最も著しき非我にあらざるかと稱したり。

我なる概念は唯だ非我なる概念之れに伴ふときのみ發することを得べしとの說は、我と非我とに關する前の反論を繰り返すに過ぎざるべし。意識は其の發生の形式として、此等我と非我との概非の共存を要するものなれど、必しも本體學上差別ある物として之れを要せざるなり。蓋し意識の依て以て立つ所の主觀客觀の差別は、單に心の官能に過ぎずして本體學上の區別といふべからざるなり。人格若しくは自覺を有し得るは、本體的非我の存在に依るものにあらず、唯だ自我が其の狀態思想等を自己のものとして見ることを得る能力に依るものなり。固より吾人の意識は自己にあらざる或る物の作用によりて始まり、又た之れによりて限定せらるゝは眞實の事なり、然かもこは必しも外部より始まり、又た外部より起されざるべからずといふことを、意識の總念中に存するものにも

あらざるなり。永遠無始の我は、永遠無始の非我と均しく存在し得べきものなり。永遠の意識は永遠の無意識よりも殊更に信じ難きものにあらず。若し無意識にして絶對的のものならんか、到底意識に達するの途なかるべし。之れに加ふるに此の說に附帶する凡ての懷疑的難問は群れ來る。故に無限者の意識の對象は何ぞやといふ問に對しては、無限者自身の思想、狀態等が其の對象なりと答へんのみ。此の意識の何時に始まりしかといふ問に對しては、そは決して始まりしことあらずと答ふべし。又た此の意識は何に依るかとの問に對しては、唯だ無限者の有する、知る能力に依ると應へんのみ。

如上の理由によりて吾人は世界の原由を人格的なりとするに反對する說の、極めて淺薄なる心理學に依るものなりと爲さゞるべからず。其の反對の議論が專ら言辭上に存せずとするも、そは人間的意識に存する制限は、一般の意識にも必須的なりとするより生ずるものなり。實は此の點に就いて吾人は普通の思索的敎義を顚倒して、正當なる人格は獨り絶對者のみ有し得るものなりと明言せざるべからざる也。絶對者の人格を非難する反對の諸說は人間的人格の不完全なるを示すものなり。斯くすれば吾人は自己以外のものに所依するものなりと說くものゝ甚だ適切なる見るものなり。外界は實に吾人が心的生命に於ける大切なる要素なり。そは吾人が之れを支配するよりも、吾人を支配すること多きもの也。然れどもこは吾人が人格の制限にして、決して其の本源にあらざるな

り。吾人の人格をして他に依ることなく、全く自決的のものとせば人格は減縮せらるといふよりも寧ろ高上せらると稱するの當れるを見るなり。又た吾人は內部の生命に於ても同樣の制限を見るものなり。吾人は常に吾人の觀念を支配すること能はず。此等の觀念は屢々吾人自身の所作なりといはんより、寧ろ心中の出來事なりと思はるゝなり。既往は過ぎ去りて復た之れを還すべからず、而して現在に於ても吾人は能動的といはんよりも受動的なること多きものなり。而して此等も亦た吾人の人格の制限なり。吾人若し全く自らの狀態を自決するを得ば吾人は更に眞實なる意味に於て人格と稱することを得べし。然れども前說の如く凡て有限なる者は、其の存在の原由を自己に有せずして唯だ無限者に於て之を有するもの也。彼等は交互の關係と全體の方案とによりて其の特有の性質を保有するものなり。故に有限的意識に於ては、外部の要素、外界の壓迫絶ゆることなく能動的並に受動的の分子を有し、自己以外のものに依り、之れに從ふことあるもの也。されば吾人にありては、人格は必ず不完全なりとす。完全なる人格に取りて缺くべからざる絶對的知識と自主とは唯だ萬物の本源たる無限絶對者に於てのみ之れを見ることを得べし。其の純然たる自決及び完全なる自主とを以て、吾人は完全なる人格の要件と認むるものなり。吾人が有限なる人格は僅に其の最も微弱なる影像に過ぎざるものなり。

以上述べたる如く心理學上の誤解に加ふるに論理學上の差錯は、人格的のものを無人格的のもの

に求めんとする考の中に潜在するものなり。若し充足理由の法則を無分別に用ふるときは、常に吾人をして斯かる説明を爲さしめんとするに到り、かくして吾人をして無限に遡源逆行せしめんとする誘惑に陷らしむるなり。此の妄想によりて吾人は睿智の背面に達せんとし、若しくはそを睿智の下なる無人格的深淵より噴出する或る物と爲さんとすることを務むるものなり。こは實に空想なり。吾人若し睿智に達せば吾人の遡源逆行は終らざるべからず。吾人若し睿智の裏面に何物かを求めんか、吾人は實に人格の最高自足の範疇を棄てゝ更に劣りたる機制的範疇を求むることゝなるなり。然かもこは睿智によりて又た睿智を通じて存し得るものなり。充足理由の法は極めて立派なる法なり。されども能く之れを省慮せんか活ける睿智のみ獨り充足理由たり得ることを知らん。而して論理學は充足理由が充足理由を問ふことを許さゞるなり。吾人の既に論じたるが如く、睿智の存在は他の物を己の作用として説明し然かも自らは唯だ之れを承認するものなり。

之れに加ふるに形而上學は吾人に示すに無人格的存在の總念中には矛盾の存することを以てすること也。思想と實在との成立には是非存せざるべからざる變化と同一との調和は唯だ意識を有する思想によりてのみ爲さるゝものなり。時間と空間との無限の分性によりて、實在を脆き分散より救ひ得るの途は、獨り意識ある思想の觀念によるのみとなす。無人格の範圍にありては、凡ての範疇は消失するか、然らざれば自から萎縮するものなり。經驗の宇宙も意識ある睿智、之れが常在の本源若しくは根據たるにあらざれば、自から其の意義を失ひ其の存在をして不可能たらしむるものなり。されば吾人は再び人格は第二にして第一にあらずとの思索的判斷を顚倒し、活ける人格的睿智のみ獨り第一たることを得と稱せざるべからざる也。

吾人が此の説を持するや實に牢乎たるものあり。然かも吾人は此の反對の諸説にも多少眞實なる感情の存するものあるを認め、有神論に於ける淺薄なる擬人觀に陷らざる樣留意せざるべからず。先づ吾人は物の意匠に關し躁急過信の解釋を爲さゞる樣努めざるべからず。認識論は吾人をして終局態（ナリチー）は宇宙的原因性の固有なる形式なりと肯定せざる可らずとなす。然かも吾人は常に此の終極を尋究し得といふにあらず。之れに反して吾人が多く宇宙の排列と出來事との中に、目的を尋究すること能はざるは經驗の示す所なり。斯かる場合に吾人は共存と繼到との法則の發見を以て滿足し、更に明白なる見解の出づるを待たざるべからず。又た複雜なる體系に於て重要なる目的は、唯だ全體を知ることにより覺り得らるゝものなり。斯かる場合には容易に一部分の目的を以て終極態と誤り、我等自らの或る相對的利便を以て判斷の標準となすの恐れあるものなり。結局原因に對する僻見の多くは其の解釋上の背理に基くものなり。此の事に關しては知識ある基督教徒が、吾人の生涯に於ける神の指導を信ずるに等しきものなり。こは信ずべきもの然かも之れを尋究し得ることは極めて不完全なるを免れざるなり。兩者とも餘りに的確に、餘りに廣濶なる特殊限定は、恐くは知識

上の誹謗を免れざるべしと信ず。

吾人が前章に於て既に論ぜし如く物の目的と物が空間時間の中の出來事として發生する道との區別は深く注意せざるべからざるものなり。此の區別を明かにせざることは、科學をして目的論を忌避せしむる大なる原因なり。斯くして吾人の心を全然滿足せしむるに必要なる二個の別種なる疑問は混同せられ。其の結果終に不要なる爭論を惹き起すことゝなるなり。

終りに吾人は吾人の無限者に對する思想上に於て、卑近なる擬人觀に陷るとなき樣努むることを要す、固より吾人の思考することは其の無限の心を自己の心に同化せしめて始めて能くし得べきものなり。されど少しく省慮せんか吾人は有限の特性と制限とを、無分別に無限者に移すことなかるべきなり。吾人の思想生活と大差ある無限者の思想生活は唯だ之れを僅に了解し得るに過ぎず。其の不變の充實然かも單調ならざるもの、神的思想の永遠なる內容を定むる絕對理性、無限絕對なる自主——此等の觀念は實に幽玄にして吾人が如何に深奧なる思慮を以てするも尙ほ之れを明かにし難きものなり。吾人は此等の肯定の爲されざるべからざるものなる事を解す。然かもそは常に吾人の智力以上に存せざるべからずと信ずるものなり。此の點こそ實に哲學の思索に代りて宗敎禮拜と崇敬との生ずるところなれといふべきなり。

第四章　世界の原由の形而上學的屬性

吾人が世界の原由に關する思索的概念は今や特に宗敎的なる神の概念に近かんとす。本能的、思索的及び倫理的なる、種々樣々なる感化は人心をして人格的、睿智的なる神の概念を構成せしめたり。此の見解は之れを批評するときは、能く自らを維持し得るのみならず、又た理性其の物の要求及び含意たることをも示すものなり。然れども人類は單に此の如き斷言を以て自ら滿足すること能はず。數世紀に涉れる研究によりその有神的思想の內容を一層精密に限定せんことを勉めたり、此等の限定は二つの階級に類別することを得べし。形而上學的と倫理學的と是れなり。前者は第一原因としての位置より、神とは何ぞやといへる問に答へ、後者は其の屬性を論ずるものなり。換言すれば前者は神の性に係はり、後者は神の意に關はる。此の區別の外には敎理的神學に多く見る神の屬性の類別も、結局哲學的又た宗敎的思想の何れにも何等意味なきものとなり了るものなり。吾人は之れより世界の原由の形而上學的屬性中の主要なるものを論ぜんと欲す。其の結果として宗敎的思想と哲學的思想とが更に相接近するものなるを知るに至らん。吾人は又た之れより神と世界の原由といふ語とを同樣の意義として用ふべし。

唯一

世界の原由の唯一なることは、此等形而上學的屬性中の第一位なり。此の斷定を下すべき必要は交互作用の研究に示されたり。然れども之れを肯定するの必要を認むると雖ども其の意義に至りては常に明白ならざるなり。されば實在の唯一とは一般に如何なる意味なるか之れを形而上學に質さざるべからず。

物を唯一なりといふは、先づ其の結合體にして分割性あることを否定する謂にして、其の結合體は單一のものにあらずして集合體なり。されば其の結合體を組織する諸要素をば實有と云ふなり。結合體なる思想は之れを組織する單位のものを假定せざれば考へ得べきものにあらず。若し此等單位にして結合體ならんには、吾人は更に他の單位を假定せざるべからず。斯くして吾人は終局にして結合體ならざる單位に達すべし、而して此等終局の單位こそ眞正なる實有なれ、されば凡そ分割することを得べきものは眞正なる物といふべからず。こは唯だ總計若くは集合たるに過ぎざるのみ。故に若し物は單位なりといはゞ吾人は先づ其の物は結合したるものならず、又た分割する事を得ざるものなりといふ意を含ましむるものなり。されば世界の原由唯一なりとの說は、第一其の結合體と分割性とを否定すること是れなり。無限の分割性を許すもの例へば時間と空間との本體的實

有を肯定する說の如きにありては、單一も複數もあり得ざるなり。

唯一といふ語を單純といふ語に解し、複雜多樣の反對なりと論ずるものあり。ヘルバルト特に此の二つを同一となし主體の唯一は屬性の複數と相容れざるものなりとせり。神の唯一なることを論ずる上にも之れと同一の見解屢顯はれたり。此の見解に依れば神は純然たる單純なるものなるが故に、彼は嚴乎たる生命なき有樣と考へらるるに至れり。此說は思想をして一步も進むこと能はざる立ち往生の狀に至らしむ、何となれば純然たる單純なりと考へられたる唯一は、如何なるものにも達することを得ず。又た何物をも說明することを能はざるなり。此の如き唯一は分化進步の基を有することなし。故に世界の原由の唯一は多樣複雜を容るゝの餘地を存せざるべからずとは諸家の一致するところ也。

思想の歷史は此の點に關して奇妙にも不確實なる狀を呈せり。一方に於ては、一般に唯一を要求せりと雖ども、之れに達したるもの極めて少なし。他方に於ては、唯一に達したる者も、多くは之れを使用すること能はざるなり。こは機制的狀態の下に之れを思想するより生ずる必然の結果なり、吾人若しかく機制的に考へて複雜より論じ始むることあらば、到底唯一に到達すること能はざるべし、これ機制的必然は自らを分化すること能はざればなり。吾人若し複雜をある單一の實在に歸せしめんとせば、不知不識此の複雜を唯一の中に含蓄せしめざるべからず、何となれば機制的に

は唯一より複雑を引き出だすこと能はざればなり。かゝる場合に吾人はたとひ確乎として唯一を談ずるにもせよ斯かる實在の唯一が如何なる内容を有するかを明かにすること能はざるなり。之れに反して若し唯一を假定しなば、吾人は複雑に向つて一歩も進むこと能はざるべし。萬有を包括せる唯一は聊かも分化し若しくは動くこと能はざるものなり。

此の難題は機制的の觀念を棄てゝ自由なる智力といふ總念を抱くによりてのみ解釋し得るものなり。自由にして意識ある自我のみ吾人が知り得る唯一なる實在にして、吾人の考察は此の外に眞正の唯一と名づくべきものなきを示す。凡て他の唯一は形式的のものにして、唯だ心意上の存在を有するのみ。空間と時間とは唯一を含まず而して空間的、時間的存在は無限の分割性によりて消失するものなり。然れども自由なる睿智は、其の創造的活動により己の唯一と異なる複雑を作り、其の自覺によりて變化するところの複雑に對し己の唯一と同一とを維持することを得。然れば唯一にして、多數にあらず然かも多様なるを得べきものなり。然れば唯一は自らを破壞することなくして複雑を生ずることを得べし。又た同一も變化して然かもなほ常住することを得。されど此の不思議は自由にして自覺ある睿智の範圍内に於てのみ存し得べきことなり、機制的思想によれば僅に言辭上の解釋を與ふるに過ぎざるのみ。

されば吾人は唯一を談ずるは易くして、然かも之れに達することの決して容易の業にあらざるを

知るものなり。抽象的の考察は此の總念の難きを示す。唯だ活ける睿智の個人的經驗のみ獨り眞實の唯一を示し、又た此の問題を解釋し得るものなり。

唯一に關する形而上學の議論は以上を以て止めおくべし。然れども神の唯一といふ觀念には主として神は單一なりといふよりも寧ろ之を獨一なりとする思想の伴ふ者なりとするを正當とせん。故に有神論は常に唯一神教にして單一神教（ハシイズム）にあらざりしなり。此の唯一神教の信仰を起すに至れる歴史上の感化は少なからず。其の思索的の必然止むべからざるものあるなり。多數の神存在して各々己の世界然り寧ろ己の宇宙に居住し、個々割據すとの思想は、人心の妄に抽象し、漫に實在化せんとするより起る、純乎たる空想に過ぎざるなり、此等の神共同の世界にありて、互に相會し相作用せんか、彼等は必然に有限にして被制約的のものとなり、隨て獨立自存の者たること能はざるべし。吾人は曩に世界の原由の唯一なることを論ずる際、交互作用の計畫中に結束せらるゝ萬物は、凡て或る一つの實在に依りて存在するものなるを示せり。此の實在は體系を創造するものにして、體系中の萬物は皆之れより流出す。吾人は一般に關する總念を形造り而して其の階級に屬するものゝ數限りなきことを思ひ得るものなり。吾人が宇宙及び其の根本的實在に於けるも亦た此の如し、吾人は總念を形造り而して後に他の宇宙と他の根本的實有とあり得べしと想像す。然れども此の如き想像は心の妄想たるに過ぎず、有限者の全體系を意味する實際の宇宙は一つの世界の原由に歸せ

られざるべかず。想像的の體系は稍明瞭を欠ぐところの心意が、之れを想像して之れを實有の如くに誤解するものなりといふの外、別に說明を要するものにあらず。若し人吾人の世界と全く關係なくして獨立せる或るもの存せずと、斷言すること能はずといふものあらば、吾人は吾人の任務は現實の宇宙に關するものにして、空漠たる想像說を反證する要なしと答へん。唯だ左の一事のみ許容することを得ん。即ち宇宙を以て唯心論が唱ふる感官的知覺の體系を意味するものとせば、唯一なる世界の原由は此の如き體系の一連を維持することを得べしと。此の意味に於て宇宙は多數なりといふを得べし。されど根本的實有の唯一なることはなほ舊の如く必要ならん。

此の事實は思索を事とするものゝ屢々不問に附するところなり。空間時間及び神を以て交互獨立せる存在と見做し、空間と時間とをして神自らも服從せざるべからざる、先在の必然と見做すもの少なからざるなり。如何にして此等獨立無關係なる存在が、交互の關係を作るに至れるかといふ問題は、未解決の儘にして遺れり。かゝる總念の生ずるは畢竟するに極めて淺薄なる形而上學の然らしむるものなり。故に世界原由の唯一とは、單にそは結合體にあらず分割すべきものにあらず、又た部分の區別すべきものなきことを意味するのみならず又た此の如き根本的存在は獨一なりといふ意味なり。

不變性

第二の屬性は不變性なり。此の屬性は屢文字通りに解釋せられたれば之れをして生命も運動も取り去られたる不動不變の存在たらしむる結果を生ぜしめたり　エリヤ派の學者は實在を以て一にして不變のものとなせり。されば全く世界の複雜と變化とを說明することを得ざるなり。之れと同樣なる誤謬は屢思索的神學に顯はる。そは時に其の不變性を力說する極遂に活ける人格的神を失ふに至りたることなり。

此の誤謬は主として自然に發する思想によれる感覺的形而上學を持するに根ざすものなり。此の思想は本體は不變にして、變化は獨り作用と性質との中に限らるゝものなりと假定するものなり。然れども少しく思考を運らさんか全然不動固定なる本體は、物の變化する作用を說明すること能はざるべし。作用と發現との中に見る凡ての變化に對しては、之れに相當する變化、物それ自身にも起るものなりと肯定せざるべからざる也。物の間の變化は物の中の變化に依らざるべからず。凡ての作因に該當すべきことは神即ち世界の原由にも該當せざるべからず。神若し嚴然たる同一の存在なりとせんか、漸次發展する宇宙的運動を說明すること能はざるべく、又た動作に於ても知識に於ても變化を許すことを得ざるべし。實をいへば形而上學の示す如く、實在の不變は固定したる單調の本體學的不動にあらずして、寧ろ其の種々なる狀態と變化とを支配する法則の恒久連續なるにありとす。神の不變性はそのあらゆる神的作用を通じて、其の法則及び本源として存する神性の恒久

連續を意味するのみ。形而上學は更に吾人若し變化を超越し、變化の中にありて變化せざる或る常住同一の原理を求めんと欲せば、そは唯だ人格に於てのみ之れを發見し得ることを示せり。かく考へんか神の不變性は實在の固定不動に存せずして、實在が自らと自らの狀態とを區別し、而して自らをば同一常住のものとなす非常なる自覺の力にありとす。此のもの缺くる所あらんか、過程の連續は存すべし。然かも其れ以上を存せざるべし。かゝる不變性は同一の音調絶えず發せらるゝが如く純然たる形式的のものたるなり。此の形式的不變性も唯だ不變の自己に由りてのみ之れを生ずることを得べきなり。

此の問題の解決に就ては吾人は復た經驗に歸らざるべからず。思想は不變の域にまで達せざるべからず。然らずんば自ら亡ぶべきものなり。されども無人格の說、充足理由の法に從ふときは、思想は到底不變といふ域に達すること能はず、常に永久の流轉、無限の遡源逆行の中に存在すべし。此の法則は吾人をして强ひて後件を前件の中に發見せしめんとす。變化若し後件に存せんか、そは又た前件にも存せざるべからず。これに複雜あればかれにも亦た複雜存せざるべからず。かく此の問題は決して機制說によりて解釋せられ得るものにあらず。唯だ自由なる人格と活ける經驗の中に於てのみ之れを說明し得らるゝ也。吾人の要する不變は、論理學的範疇の固定にあらずして、睿智の自己同一と自己同等とにあり。具體的の變化不變化は共に自覺によりて解釋せられざるべからず。

抽象的の定義を試み、又之れを時間的座標と見るが如きは單に此の問題を曲解するにあらずんば架空的のものとなすに過ぎざるべし。

不變に關する形而上學の推論は、これにて筆を擱かん。然れども其の實此の屬性の中には種々なるもの包容せらるゝなり。神學思想とは自ら區別すべき宗教思想は、普通形而上學的形式とは異なる意義を有するものなり。其の一の目的は人間の依存的にして又た其の生命の短きに反し、神の獨立的にして永遠なることを肯定するにあり。又たこの不變性とは神の活動の倫理的不易を意味し神の目的は啣かも我儘專横の行はるゝことなきを意味するものなり。此の後の意味に於て此の不變の屬性は形而上學より倫理的の領域に移り凡て形而上學的演繹若しくは辯明より脫出したるものなり。

遍在

第二の屬性は遍在なり。此の問題は神と空間との關係に屬するものなり。蕪雜なる思想は屢此の問題を延長の如く解するが如し。空間を以て無限の場所なるが如く想像し之れに限りなき物を以て充たしたるもの是れ即ち遍在なりと。此の見解は哲學的に維持すること能はず、又た世界原由の唯一なる思想と兩立し難きものなり。蓋し空間に延長して存在するものは、何物も單位たることを得

ず。何となれば斯かる實在にありては實際分離し居るか若しくは其の中に有する勢力によりて、互に隔絶し又た互に相附着するかの二者に出でざる多くの局部を判別し得ればなり。後者にありては體は消えて唯だ諸種勢力の集合となるべし。且つ何れにしても體の一なることは自ら消滅すべきなり。此の如きもの如何ゞ空間に遍在することを得んや。そは唯だ空間の中、部分部分に現在するものにして、適當に之れを遍在と稱すべからず。遍在とは實在全體が、凡ての點に現在するとき始めて眞實なるを得べきものにして、恰も心全部が思想の何れにも現在するが如し。

されば思索的に之れをいへば遍在の說は、他の形態即ち主として消極的なる形態を取らざるべからざるなり。吾人が直接動作し得るものは、唯だ僅少なるものゝ上に止まれり。此等は吾人の前に現在すといはるゝなり。他の場合に於ては、吾人は唯だ媒介によりて動作し得るのみ。此等は吾人の前に不在なりといふべし。若し交互作用凡ての場合に於て等しく直接ならんか、吾人は現在不在の區別を設くる理由を有せざるなり。かくして空間は吾人が動的制限の現はるゝ形式に過ぎざれども、吾人には制限の如く見做さるゝものなり。遍在とは凡て此等の制限を拒否する意なり。直接なる作用は現在を意味す。故に凡ての物に及ぼせる直接の作用は、遍在を意味するもの也。されば萬有に內在する神若しくは世界の原由は遍在なりといはざるべからず。神若し或る物に作用を及ぼさんと欲せば遠近の距離を通過する要なく又た媒介物に依る要もなし。其の作用は寧ろ直接に

且つ完全に現在するものなり。之れを逆に有限者若し祈禱の如きものによりて神に作用せんと欲するときは吾人は、祈禱により或は身自ら神に達し、神を見んとて、驅け廻る要なかるべし。何となれば吾人は彼の中に生き又た在るものなればなり。又た神は吾人の中に常に現在する力たればなり。吾人は空間は神を制限し、若しくは隔絶するものなりとする思想を拒否する意味に於てのみ、遍在の說を立て得るものなり。空間は本體學上の實有にあらずして、單に心意上の存在に過ぎずとする形而上學の所說よりして益此の說を立つる必要を感ずるものなり。

此の結果を評價するに當り、吾人は吾人が空間的判斷の二重なることを注意せざるべからず。或は之れを幾何學の如く純粹なる空間の直觀となし、或は之れを吾人自身の有機的關係と制限との如きものとなす。前者は之れを普遍的と解することを得。然かもそは延長の意を含まざるなり。空間の思想は延長せりとの意味に於ての空間にあらざること恰も平方形が四隅を有せりとの思想にあらざるが如し。他の空間的判斷は純然吾人と相關したるものにして、變化したる有機的、動的狀態に對しては、何等意義を有せざるべし。吾人が『空間を滅す』といふときは、此の種の關係に對するものなり。此の意味に於ける空間は、萬物の直接に依存するところの實在者に取りては存在することあらざるべし。

永劫

永劫の屬性は、神の時間に對する關係に就いていふものなり。そは種々なる意味を有す。その第一にして最下なるものは、存在の無始無終なる繼續なり。若し時間にして本體學上の事實たらんか世界の原由は此の意味に於て永劫たらざるべからず。何となれば空なる時間は決して何物をも生ずること能はざれば也。又た無終の繼續といふ思想には、無限者に相當なる一種審美的の價値を有するもの也。然れども概して宗教的思想家は神の永劫と無終の繼續とを同一視することを好まず。寧ろ凡ての時間的制限と條件とを超越したる存在を示すものとして、凡ての時間に反對して之れを考へんと欲するものなり。此は神の時間に對する關係は、恰も其の空間に對する關係の如く、優れる者超越したる者と考へんとするものなり。

普通の思想によれば時間は無限なる形狀として存在し、神は其の繼續を以て之れを充たすこと、恰も普通の思想に於て神が其の延長を以て空間を充たすといふに同じ。されど此の說は兩者とも形而上學上維持すべからざるものなり。形而上學によれば時間は變化の條件となり、又た變化この中に發生すとなす獨立の實有にあらざる也。かゝる見解は世界原由の必然的單一を破り又た凡ての存在をして不可能たらしむべし。然れども此の考のみにてはなほ世界の原由は時間に超越すと決し難

きものなり。何となれば時間は存在として消失すと雖もそはなほ法則として存し、時間的形式は根本的實有にすら必然なるものとなるべければ也。

此の難問を解決する最も簡便なる方法は、世界の原由を無制約と呼び、而して此の屬性よりして、時間其の他凡ての條件に超越することを演繹するにあり。然れども此の無制約といふ總念は、稍曖昧にして、之れを吟味するにあらざれば用ふること能はざるべし。無制約の實在は他の實在者に依存することなしとの意味に於て肯定し得べし。然かも斯かる實在もなほ深奥なる內的制限を有し得べきなり。世界の原由は實に己以外の物によりては制約せられざるなり。然れども如何なる場合に於ても、自らの性質によりて制約せられざるべからず。而して此の制約は無限の生命それ自身に、時間的繼起の存することを含むものなりや否やの問題を生ぜざるを得ざるなり。時間的繼起を含むと肯定せんか、甚だ重大なる哲學上の難題を生じ來らん。吾人は世界の原由は發展の法則に從ひ、唯だ漸次に自覺(イツトセルフ)に到達することを得といふべきか、若しくは世界の原由は、構造上の必然として、常に完全なる自覺(イツトセルフ)の狀態に在ることを得ざるべしと稱するかの外なき也。理性が唯一適當なる世界の原由として要求する自由にして自己中心なる原因も、亦た此の必然に制限せられざるを得ずといふ外なけん。豈にそれ然らんや、加ふるに認識論によれば、凡ての意識は無時間の要素を有するものとせらるゝを見ん。眞實の連續を意識に許すことは、思想をして不可能ならしむるものなり。

變化することを識る知識は、不變ならざるべからず。時間の知識は永切ならざるべからず。之れに加ふるに形而上學は吾人に教ふるに、時間の關係は、實に自己意識の内と自己意識にまでの關係なることを以てせり。そは出來事の不變絶對の性質にあらずして、意識其れ自身の範圍に相對したるものなり。時間は心以外の事實によりて計量せられ、若しくは之れに參照せられ得るものにあらず、唯だ純然意識中の關係としてのみ之れを見ることを得べきなり。時間内に起る經驗は、心より離れたるものにあらず。經驗は唯だ時間の形式を有するものなり。然かも此の形式は主として吾人が有限制約の發現なり。一時の判斷は多くは吾人が現在の狀態に相關するものなれば、此の狀態を變化するときは、此の判斷も種々に變化し得べきものなり。されば晝と夜、夏と冬、安息と勞働、少年と老齡との定期體といふもの取除かれんか、吾人が時間的の計量と判斷とには多く殘るところなかるべし。

如上の事實を心に留め、吾人は世界原由と時間との關係を次の如く見ることを得べし。第一吾人と時間との關係には之れを世界の原由に對して肯定すべからざる性質のもの存する也。例へば吾人は遲々たる發展を遂ぐるものにして、漸次自主の完きに進み、老いて而して死するが如し。かゝる狀態をば吾人は時間の制限と條件とに從ふものなりと稱す。此等の點に就ては無制約なる世界の原由は、時間に服從することを得ず、寧ろ無時間たらざるべからず。常に己の在らんと欲するまゝに在る程自由自在にして、常に自己を十分に意識し、漸次に己に到達したる實在にあらざるものに取り

ては、己自らは時間の中に存せざるものなり。かゝる實在は不變の知識と不變の生命とを有するならん。そは記憶なく又た期待なかるべし。然かもそは絶對に己を樂むならん。此の如き實在に取りては現在のみ存するものなり。其の今は永遠のもの、其の名は「我在り」と稱すべきもの也。吾人に取りて無制的なる世界の原由、即ち神とは畢竟かゝる實在を指すものなり。彼は其の自覺と自主とに關しては、時間によりて制限せらるゝものと見做すべからず。唯だ自己中心自己同等の人格に於てのみ、吾人は時間の條件と範圍とを超越し得べきを覺ゆるもの也。然れば神は單に永遠無限なるのみならず又た時間無きもの即ち時間的制限と條件とを超越するものなり。

かゝる考へは絶對的人格者として神を見るときは容易に之れを許し得んも、神を世界的過程の創設者又た保導者と考ふるときは自ら難問の生じ來るもの也。此の事實は神と時間との關係をして新ならしむ。蓋し此の過程は開發變化するものなれば、本來時間的のものなり。故に世界に於ける神の作用は又た本來時間的のものなり。可能的なる世界の事物に對する神の知識は時間的にあらざるべし。然れども此の實際の世界の體系に於ける神の動作と其の知識とは時間的なるべし。何となれば其の體系は時間的なればなり　過程には連續あり。されば實現せんとする意志にも亦た連續なかるべからざるなり。理想に關する不變の知識は必ずしも有り得ざるものにあらず。然れども變化するものに對する不變の知識といふは矛盾の語ならざるべからず。されば不變と無時間とは唯だ神が

己との關係にのみ適用し得るが如し。不變と無時間とは神自身若しくは可能的のもの、或は神の目的に關係したる場合に於てのみ、其の知識に適當し得るものなり。

こは一見極めて明かなるが如くにして然かも少しく思慮を運らすに從ひ次第に雲影を加ふるものなり。若し世界的過程必ず時間の內にあるものとせば、そは誰かの爲めに時間の內にあるものとせざるべからず。其の時間性はそれ自ら若しくは自らの爲めには何等の意義を有せざるものにして、本來唯だ意識中の關係に過ぎざるものなり。認識論は意識をして變化に從はしむること、若しくは意識中に本體的の變化を入るゝことを許さゞる也。意識自らは固定したる背景にして、此の上に變化は發起するものなり。而して意識なかりせば變化は無意味のものとなるべし。吾人若し充足理由の法によりて、逆さまに眞實の變化と想像せられたるものより推論し行かんか、思想は忽ちヘーラクライトス一派の流轉說若しくは無限の遡源逆行の中に滅亡せざるを得ざるべし。此の結果を免がれんと欲せば凡ての變化は不變なるもの即ち時間的ならざるものに歸せられざるべからず而して凡ての時間的計量と關係とは之れを思想中に發見するにあらずして、思想の構成する物の秩序中に見出されざるべからず。こは固より無人格の範圍にては不可能の事なり。變化と不變、時間と無時間との問題は最も深玄なる思想の問題にして、之れが解釋は獨り自由の睿知と有神的唯心論とによりてのみ求むるを得べし。抽象的範疇を有する抽象的の思想は、何等解釋に資するところなし。吾人は

超絕的經驗論に賴りて、吾人の諸種の言葉を睿智の活ける經驗によりて解釋せざるべからず。睿智の自己同一若しくは自己同等は、吾人の經驗し得る唯一の眞實なる不變なり。而して此の不變こそ吾人の問題に適合する唯一のものなれ　其の他のものは悉く架空のものたらざるべからず。

以上の結果を概括すれば即ち次の如し。吾人は形而上學によりて如何なる場合に於ても、時間は存在の形式にあらずして唯だ經驗の形式なることを確信するに至れり。而して時間は本來吾人が有限なる狀態と共に變化するところの自覺內の關係たるなり。吾人が時間的の判斷には多くの相對的の分子を有し吾人々類にのみ適當するも之れを神に移すこと能はざるもの存す。之れに加ふるに時間關係は常に之れを睿智の作用の中に求むべくして決して睿智其の物の中に求むべからざるなり。故に絕對的睿智と意志とは、其の本源としてあらゆる時間的制限と條件とを超越するものにして、決して其の中に包容せらるゝものにあらざるなり。

全知

全知を解釋するに當り、唯だ字義を說明するを以て哲學の解釋となしたるもの極めて多し。思索家は言葉を分解して以て其の思想の內容を定めんことを求めたり。然れど此の方法は惑へるものなり。物の觀念を理會せんには其の言葉の構成を研究するによりて得らるゝものにあらず。之れを理

解するは其の觀念に達したる道を精思するにあり。最も廣濶なる意味に解すれば全知とは過去、未來、現在、必然若しくは自由を問はず、等しく凡ての物と凡ての出來事との知識を意味するものなり。されど斯かる事は唯だ字義を解するのみにより出來得べきことにあらず。吾人は寧ろ矛盾の存し得べきを肯定せざるべからざるとき、全知は全能と同じく維持すべからざるものに非ざるや否やを問はざるべからず。矛盾の不可能なるは萬人の認むるところなり。されば吾人は神の屬性の概念中に矛盾を含ましむる自由を有せざるなり。全能はなし得べきことに限られざるべからざるが如く、全知も亦た當然知り得べきことに限られざるべからず。若しそれ然らんか本來知り得べからざるものありとせば、そは全知も達し得ざるところのものたらざるを得ず。

更に思考を進ましむれば睿智は世界の原由に於て、他の屬性に比し、第二等に下らずとするも、同格なる作用を爲すものなりとの想像に達せしむ。吾人の知識は吾人の中に起れるものゝ一小部分に過ぎず。其の他は悉く秘密の暗雲に蔽はるゝものなり。世界の原由に二種の境域ありて、其の一部は探究も明にする能はず、睿智も解くことを得ざるものなりとは、又た思議すべからざることにあらざるなり。

此の見解の起るは、一は吾人々間の制限を絶對の實在者に移す擬人的作用と、一は思考の繪畫的なるとに因るものなり。此の假定は兩面の物を繰り返し觀るが如し。そは積極的の證據を欠くが故

に、全く理由なき假定といはざるべからず。若し此の假定を宇宙的作用にまで推し及ぼすときは、吾人が宇宙的秩序を理解するに必要なりとする自由智力の統制力を欠くに至るべし。加ふるに少しく思考を運らさんか、此の見解は到底不可能なる二元論に陷らざる可らざることを覺るべし。絶對的人格は絶對的の自識と自治とを有せざるべからず。斯くして始めて此の場合に於ける理性の理想に適するを得べし。積極的の反對を有せざるときは理性は常に其の所說を肯定するもの也。唯だ疑問と認むべき點は全知の總念は如何なる範圍まで前後相照應し居るかにあり。

無限者に歸することを得ざる有限者の諸經驗につきて、神の知識如何といふ問題は、先づ吾人の惑ふところなり。凡そ物的の經驗は悉く有限者にのみ屬するものに似たり。されば無限者は如何にして之れを知り得るか。此等の事に於ける吾人が悟性の作用は同じく之れを分類し命名するにあり。物それ自身は唯だ直接なる經驗によりてのみ認識せらるゝのみ。此の難問を推しつむるときは、無限者と有限者の間隔をして相通ずるを得ざらしむるに至らん。之れを解釋するは吾人の能くするところにあらず。若し之れを爲し得とせんか、そは唯だ形式的のことに過ぎざるべし。吾人若し此等の經驗例へば肉體的の苦痛を神に歸することを好まず、又た神は之れを知ることなしといふことをも好まずんば、吾人は吾人が悟り得ざる神の知識の方法存することを許さざるべからず。吾人が所有せざる覺官の內容は全く吾人に了解せられざるものなり。されど假定によれば無限者は之

れに與ることなくして有限者の經驗を悟るものなり。此の假定の中に含まれたる秘義は、神學併に哲學に於ける多くの推測を生ずる導きとなれり。未熟なる汎神論は、吾人の經驗は實に神の經驗なりといひて之れを解釋したりと考へたり。されどもこは凡ての區別を混淆するに過ぎざるなり。無限者の心理學と認識論とは不明なる點少なからざるべし。

されど普通の人に取りて全知に就ける重もなる困難は、自由撰擇を豫知することに關す。過去と現在とは、全知の前に暴露せられたりと考へらる。凡て可能なる事も亦た十分に知ることを得ん。自由なる受造者は、可能なることゝして豫知せられざることを爲し得ざるなり。故に增加することも不意に驚くことも永却絶えて無かるべき境界此處に存す。又た道の分岐するところも此處にあり。自由なる行爲はその性質上新に始まりしものなれば、其の起らざる前には何物も之れを表示するものなし。されば自由の行爲はその行はるゝまでは、單に可能性にして事實にあらず。然れども知識は事實を有りの儘に覺るものなれば、かゝる行爲は現實のものとしてにあらず、唯だ可能的のものとしてのみ　豫知せられざるべからずとなすものあり。その爲さるゝ前にたゞ可能的のものなるが故にそは可能的のものとして知られざるべからずと。然るに他の一方に於ては是れ固より可能的のものなりと雖ども、そは將來必ず實現せらるるものとして知ることを得べしと主張せり。かゝる場合には之れを知ればとて、必しも强ひて事實を發生せしむるものにあらず、唯だ之れを豫知す

るのみにて實際は豫知せられざると同じく、事實をして自由ならしむるものなり。斯かる豫知に關しても、なほ諸說紛々たるものあり。或は豫知を主張するも自由を拒否するものあり。或は自由を主張して豫知を拒否するものあり。或は自由も豫知も共に之れを肯定するものあり。以上三者者中の前二說は自由と豫知とは兩立し難きものとなすに一致し、唯だその對句の何れを棄るかに於て互に異なるのみ。

最後の說に就きても困難を感ずることは是れなり。定義によれば自由なる行爲は絶對的の創始なり。さらば其の起らざる前には之れを表示する道なかるべし。吾人は之れをたどりて特殊なる意志にまで達す。而して之れを超ゆれば何等の存在も表示をも有せざるなり。されど未來の出來事に關する知識は、之れを知るところの理由存在するを豫想するものなり。而して自由なる行爲に於いてはかゝる理由を有せざるなり。されば自由なる行爲の豫知は、之れを知る根據無き豫知たらざるべからずと。時間の實在を假定するときは此の困難を免るゝこと難かるべし。神は吾人の思議し能はざる智識の方法を有すと假定するにあらざれば、到底此の難題を解釋する道あるべからず。自由なる行爲の豫知は、その自家撞着なることを證明すること能はざると等しく、又た其の可能なることをも辯明すること難かるべし。

以上の諸點は時間は單一にして凡ての條件たることを想像するものなり。吾人若し時間の觀念性

と相對性とを持せんか、此の問題は從來の形式を失ひ、餘すところは唯だ無限者の認識論と、有限者の存在とに伴へる一般の秘義あるのみ。

全能

全能は吾人が曩きに形而上學によりて、世界の原由は本體に非ずして作因なり、材料に非ずして原因なりと假定したることを含意す。而して上來論述したる一般の目的は、世界原由の絶對無制約的なることを肯定するにあり。

此の事柄に關する普通見解の中には二個の傾向あり、其の一つは神は當然に爲し得べきことを爲し得る能力ありと雖ども、到底超越すること能はざる多分自存永遠なる必然によりて、制約せられたりとなすもの也。此の說は維持し難き神の從屬性を含むものなれば、宗教的感情も亦た哲學的の思想をも滿足せしむることを得ざるなり。其の結果は反對の意見を惹き起すに至らしむ。此の說によれば神は凡ての制限を超越し、可能なることも不可能なることも凡て之れを爲し得る力あるものなりと、さりながら前說を以て鈍愚なりとせば、後說は全然無意義の言にして理性其の物を滅ぼすものといはざるべからず。

神の存在を信ずるものは多分偶然の事柄に於て、神の全能を見るに、何等の困難を感ぜざるべし。されば能力の制限を主張するものは、概して理性の必然若しくは眞理の久遠といふ根據の上に之れを爲すものなり。彼等は曰く、此等理性の必然久遠の眞理は如何なる能力によるも之れを破ること能はず、而して此等は又た人力と神力とを問はず凡ての力に制限を附するものなりと。されば神の制限問題は、實は神が此等理性の必然若しくは久遠の眞理に對する關係の問題たる也、神は此等によりて制約せらるゝか將た又た此等に優越するものなるか。此の問題を論ずるに當り、吾人は此の領域に群集する多くの抽象的觀念の弊に陷らざる樣十分に注意せざるべからず。

世界の原由の唯一なるを論じたる吾人は世界の原由は根本的實在の複數と相容れざるものなりといへり。されば眞理と必然とは何等かの方法によりて、世界の原由に其の根據を有するものなりと結論せざるべからず。若し眞理の領域實在を離れて存在すと假定せんか、吾人は、更に眞理と實在（レーエル）との間に交互作用の存する事を假定するにあらざれば、眞理は實在に對し何等の影響を有せざるべし。されどこは眞理をして物となすものにして、眞理と實有とよりも更に深きものありて、其の交互作用を媒介するもの也と假定するの止む可らざるに至るなり。此の點に於て吾人は抽象的觀念の弊に陷り易きものなり。自然の法則は決して實有の先件にあらず反つて常に其の後件なり。實有は先づ在りて又た獨り在るもの、其の在るが儘なるものにして其の法則は結果として生ずるもの、否な寧ろ物の性の表現に過ぎざるものなり。然れども吾人は往々抽象的觀念を以て物を誤解し、物を

究めて法則を集め來りし後、直ちに其の物を以て、物の立つる法則の結果なりとせずとも、其の支配を受くるものなりとなすに至る。かくて法則の支配といふ語行はる。かく二重の抽象によりて法則は、物を離れ物の上に實在する君主の如く見做され、又たある不可測なる必然の表示なりと思はるゝことゝなれり。固より實有の發現するときは、君主の命ずる形式に從ふ外なきもの也。かくして原由は其の結果に支配せられ、實有は其の後件の結果として說明せらるゝに至る　蓋し思想の顚倒なるや明かならむ。自然法は實有の結果にして、決して其の根柢にあらず、又た實有を離れて存するものにもあらざるなり。

眞理に於ても亦た然り。合理的眞理は偶發的事實の眞理と異なりて、觀念の必然的關係若しくは理性が、普遍的に進行する方法の表示に過ぎざるなり。そは心を離れ若しくは心に先つものにあらず、唯だ心性の表示に過ぎざるもののみ。然れども吾人は此の事を忘れ久遠の眞理と稱する數多の原理を抽象し、又た不可測なる必然なるものを設けて實在は之れに從ふ外道なしとなす。されど此の事たるや全く空想的性質のものたること明かなり。世界の原由を離れて獨立せる眞理の領域といふもの存することなし。眞理其の物の根柢及び眞と僞、順應と矛盾、可能と不可能等の區別の依つて以て生ずる一切の原理の根柢は、此の世界の原由たる實在の中に求めざるべからず。此等の區別の旣に成立する體系に於ては、此等の區別は凡て新たなる出來事に適用し得べしと雖どもそは抽象的必

然としてにあらずして、實在的體系の實際の法則として然るもの也。

此の原理は實有に先つものなりと考ふるに至るも、一つは此の區別を看過するに基くものなり。實に此等の原則は或る特種なる出來事に先ち、又た之れを制約するものなり。されば此等の原則は凡て一般の實有に先つものなりと想像す。而して想像は更に加はりて迷妄を全うするものなり。人若し眞理は虛空に於てすら確實なりと云はゞ、此の虛空の概念は單に概念に過ぎずして、斯くいふ自らが凡て彼の觀念と思想の法則とを以て現在することを覺らざるものなり。彼は虛空の概念と共に他の概念をも有するものなり。而して普通の關係兩者の間に存在し續くを見て、彼は實に虛空を概念し、又た凡ての實有消滅するとも思想の法則は確實ならんと考ふるなり。されども之れが迷妄なること明かなり。虛空に於て眞を發見する術は思想する心に對して現在眞なるもの何ぞやと尋ぬるにあり。眞の虛空は判別し難き無なるべし。眞理と誤謬との觀念的區別は、其の適用を論外として何等の意義を有せざるべし。されば吾人は結論せんとす。眞理は世界の原由を離れて獨立するものにあらず、或る方法によりて之れに基き之れに依るものなりと。萬物を制約する自足的眞理の獨立したる領域といふ總念は斷乎として之れを排し得べきものとす。

眞理が世界の原由に依るといふことは之れを二樣に考ふることを得。眞理は世界原由の性に基けるもの、若しくは意志の造るところなりと考へらるゝ也。後說は多く神學に顯はる。然かもそは自

家撞着たるを免れざるなり。神は眞理に對し、氣儘にして之れを起し又た之れを廢するものなりとするは、眞理は神の意志を離れ獨立して存在し、又た意義を有するものなりと假定するものなり。何となれば若しそが或る固定したる眞理の標準に合し、誤謬は之れに反するものにあらずとせば、何故に創造的行爲の結果を以て誤謬といはずして眞理と呼ぶことあらんや。されば神は眞理を僞とし可能をして不可能たらしむといふは兩者の標準が意志を離れて存在することを含蓄す。而して神は固定したる制限を横ぎりて、單に物を前後に移すことゝなるなり。

此の說を消極的形狀に於て見るも等しく自家撞着たるや明かなり。眞理が廢せられ若しくは毀たれん爲めには、そは先づ眞理として存在せざるべからず。破らるべき命題にして既に眞ならざりせば、破るべき眞理の存すべき筈なし。僞なる命題は之れを僞となさるゝこと能はず、何となればそは既に僞なればなり。故に眞理を意志の被造物となさば、眞理を全く否定するか、若しくは己の自家撞着によりて之れを破壞し去るか、二者の中其の一に居らざるべからず、然れども此の說を持するものゝ目的は決して眞理を否定するものにあらず、寧ろ神の絕對無碍の獨立を崇めんとするにあり、斯かる方法を以て議論したる思索家は、通例善意を有するものなれど、問題の性質を明かにすること能はざりし也。

されば吾人は神が眞理を造ると云ひ、若しくは神は自らを離れて獨立する眞理を認定すといふ意

見に反對するものなり、神は寧ろ眞理の本源、又た基礎なり。而して眞理は神の作用の固定したる方法なり。吾人は合理的眞理を神性の後件若しくは表示とも見るを得べく、或は之れを神の活動の根本的法則とも見做すことを得べし。兩者とも同一の意義を有するものなり。

神に其の發現の本源として性を附するに反對するもの少からず。斯かる總念は神を制限するものなり。神は絕對者として自ら自己の性を具へざるべからずとなせり。神には何等立憲政治的のものなく、凡て彼の在るところのものは其の絕對意志の結果ならざるなしと。故に『無底』『靜寂』『超然眞體』及び其の他數多の空辭を神に附するに至れり。こは一つは性といふ言を誤解すると、一つは絕對なる概念に低き意義を加へたるに因るものなり。吾人は先づ其の誤解を論ぜん。

吾人有限者は開發するものにして、吾人の性を以て此の秘密なる進行の本源なりとするものなり。又た吾人は遺傳すること多きものなり。而して屢此の遺傳せる特質を概括してわが性と稱す。此の性は又た吾人が喜んで逃れんとする制限の如く見ゆること少なからず。斯くして靈魂の中に分裂生ず。自由の靈は己に屬せざる海上の舊き人とも稱すべく、若しくは死の體とも呼ぶべき力に反對して戰ふの要あるもの也。此の意味に於て性は絕對的實在者に附すること能はざるなり、斯かる性は固より制限にして、獨り制約せられたる有限者にのみ屬し得るものなり。

然れども作用の定則若しくは發現の方法といふ意味によれば、性はかゝる制限を含まざるなり。

こは具體的の實例に徵すれば明かなり。吾人いふ『思考は思想の法則によりて支配せらる』とされば此等の法則は心の外若しくは心の内に存する實物にあらず、吾人は之れを外部の壓力若しくは内部の制限と感ぜざるなり。其の理由は此等の法則は本來思想的作用の唯一の方法にして思想の動作より抽象さるゝことによりて形式的法則と稱せらるゝに至れるものなり。根本的事實は思想の作用なり。而して反省によりて此の作用に一定の形式あるを知るもの也。次に此等の形式は法則とせられて心をも支配せしめんとせらる。斯くして此等の法則は制限にして知識の妨害物なりと想像せらるゝに至る。されど事實は此等方則は智力を支配するものにあらずして、唯だ智力の如何なるものなるかを表示するに過ぎざるなり。心が己の自主自在を意識するは思想の明白なる動作を運用するときに如くものなし。思想の法則を廢して心を自由にし、又た知識を擴充せんとするは奇怪なる提案なりといはざゝべからず。

次に第二の點即ち絶對性を誤解する問題に移らん。以上論じたる意味に於ての性を神に對して拒否するは、全く其の存在を打ち消すこととなるべし。凡そ存在するものは何物かにてあらざるべからず。而して又た一定したる作用の法則を有せざるべからず。之れなくんば思想は消滅して唯だ空虛なる心のみ遺るべし。人或は言葉を以て此の空虛を充たすことを得べけん。然れども心は之れによりて何等本體を得るものにあらず。此の一定の法則を以て制限となすは、全く實在自らを以て制

限となすものなり。斯かる場合に於て眞の絶對は、單に純然たる不定、虛空の中に彷徨するものにして、再び確定したる存在に歸る道なかるべし。一度び此の如き空虛に陷らば思想は永久にかしこより脱出することを得ざるべし。かく絶對性を考ふる事度に過ぐるものあらんか、蓋し自滅の道たらざるを得ざるべし。

そは絶對者の實有を消滅せしめ、宇宙と活ける神とを無の中より構成せんと試みるに至らしむ。然れども吾人若し物の性は法則なりといはゞ、吾人は之れを以て法則は物の中の一物若しくは物を支配するものなりと考ふべきものにあらず。物それ自身は凡てなり。法則は單に其の物の性若しくは其の物の作用する方法の表示に過ぎざるなり。

此の點に於ても吾人は諸種の抽象を避け、經驗に依りて、此等の言葉の眞意を尋ねざるべからず。吾人は單に字書を探るに止まらんか、吾人は容易に一定不變と自由とは併立し難きものなりと考ふるに至らん。されども吾人一たび經驗に訴へんか、吾人は二者の何れをも棄つること能はざるを發見せん。自由をして意義あるものとなさん爲めには、一定不變を以て其の根柢となさざるべからず。又た一定不變をして價値あるものとなさんか、そは自由と結合せざるべからざるなり。純然たる必然は理性を消滅せしむ。純然たる自由自在も亦た理性を消滅せしむるものなり。一定不變と自由との一致は、獨り能く合理的生活を成立せしむるものなり。吾人は寧ろ斯くいはんとす、即

ち合理的生活は此等の兩反對の側面を有するとき始めて成立するものなりと。二者は合理的生活の依つて以て生ずる前存の要素にあらず、そは單に合理的生活の對偶的側面に過ぎざるなり。而して此の場合に於ては合理的生活のみ重要唯一の實有たるのみ。

然らば神の意志は神の存在と何等の關係を有せざるか神は己を以て客體として他より與へられたりとするか、若しくは己は己の原因なりとするか。此の答は然り又た否とせざるべからず。此の問題は知識し意志する神は、存在する神に次ぐものなりと假定するものなり。

固より時間の前後ありといふにあらず、唯だ論理上の順序たるに外ならざるなり。神は存在し而して後に動作するにあらず、その動作に於て又た之れによりてのみ存在するものなり。此の動作は氣儘氣隨のものにあらずと雖ども、又た必然的のものにもあらず。或は必然なりと雖又た自由なりとす。此の一見矛盾の觀ある意味は是れなり。自由と必然とは形式的觀念としてのみ矛盾するものなれども、實在の限定としては互に相容れざるものにあらず。兩觀念は畢竟ずるに人格的存在の兩反對と側面より抽象し來りたるものに外ならざるなり。吾人は吾人の生涯に於て一樣不動の分子を發見す而してこは吾人の有する必然の唯一なる積極的觀念を得る所以なり。吾人は又た自決の或る分子を有す。而してこは吾人が自由の觀念を形造るものなり。故に實有は此等形式的反對の觀念が實際の存在中に結合せられたるものなることを示し、反省熟慮は兩者とも合理的存在に必要な

ることを覺らしむるものなり。

吾人は吾人の生涯に於て此の兩者結合の意味と其の出來得べきこととの例證を有す。思想の法則は理性の性質上破るべからざるものなり。意志は之れを顚覆する道を有せず。斯く思想の法則は絶對にして何等顚覆の恐れなしと雖ども、他をして己に服從を必せしむること能はざるものなり。人の靈魂は理性の法則のみによりて合理的靈魂となるものにあらず。之れに加ふるに自由なる心靈が之れと對合する自決の働を要するものなり。されば靈魂には必然の存すると共に、自由の存することに因りてのみ始めて力あるものなりとす。吾人は人皆な己を合理的靈魂となさざるべからずといひ得るもの也。之を爲す道を解釋すること難し。

然かも其の事實たるは一なり、吾人は吾人自身の動作によりてのみ、自から十分なる存在に達するものなり。限られたる程度に於て吾人に該當するものは、絶對的に神に該當すと考へ得べし。神の絶對的意志は凡ての點に現在し神の必然性に確定性と實有とを與へて之れに力を加へざるべからず。此の意味に於て吾人はスピノザと共に神は己の原因なりといふを得べし。彼は間斷なく己を合理的心靈となすものなり。神は永劫合理的永遠の原理に從つて、己を限定する絶對的意志若しくは絶對的作因なりといふべきなり。

第五章　神と世界

以上吾人は主として神自身に於ける属性を攻究せり、吾人はこれより神の宇宙的關係を論ぜんと欲す。固より神は如何にして世界を生じ世界は如何に彼に依るかを論ずるは、吾人の目的にあらず。吾人は唯だ神と世界との關係に就いて大略如何なる思想を懷くべきやを究めんとするのみ。此に世界といふは凡て有限的の存在を意味するものなり。

概して二種の見解存す。有神論、汎神論是れなり。

汎神論は世界を神の一部となすか若しくは之れを神性の必然的結果となすものなり。有神論は世界を以て神の自由なる作用と創造なりといふ。吾人は先づ汎神論を論ぜん。

汎神論

世界は神の一部なりとの說は、古今分出論の共通なる要素なり、波は大洋の一部分なるが如く、更に適例を求むれば、各有限の空間若しくは時間は、一つの無限なる空間若しくは時間の一部分なるが如く、各有限なるものは、一つの無限なる存在の一部分若しくは一形像(フヱース)なりと。此等の見解は何れも神を以て第一原因となすよりも、寧ろ世界の本體と見做すものなり。而して此の本體は泥

土の如く種々の形に造らるゝを得べき原料の如きものと考へられ、其の產物の爲めに少くとも幾分かを消耗するものなりと。此の說は時に稍精巧なる想像を以て、神を以て世界の背景の如く考へ、恰も空間が無限の背景にして、其の中に圖を畫くことを得るが如きものなりとせり。時としては神は己れより世界を生じ、若しくは分出し、若しくは自己分裂の方法によりて、自己の一より宇宙的存在の多に移るとなす。かくして有限者は無限者の一部若しくは樣式若しくは分出にして、其の本體は無限者の本體と同じきものなり。世界が永遠のものなるや否やの點につきては定論を有せず、之れを神の永遠の部分と要素なりとなすものあり。又た之れを神より造り出だされたるものなりと考ふるものもあるなり。

此の種の見解は悉く想像の所產にして、元來畫き難きものを畫かんと試むる結果なり。吾人は世界の起原を考ふるときは　其の背後に世界の依つて以て造られたる、諸種の形を作成し得べき本體の存することを想像し吾人の想像を滿足せしむ。吾人は世界を或る先在の材料に歸するか若しくは或る將成的形狀に於て先在せるものなりと見做すものなり。然れば其の成果は既に存在したる材料の精製か、若しくは潛勢力の放出か二者の何れかに外ならざるなり。宇宙的實有に關する吾人の關係は、吾人をして如上の傾向を强め、考ふるよりも寧ろ畫くことによりて、此の問題を解決せしめんとするものなり。吾人は既存材料の變形に制限せらる。而して此の擬人的制限は批評的ならざる

人に取りては、容易に必然的法則と考へられ得るものなり。

此の種の見解は、背理的想像の好むところなれども、理性は之れに反するものなり。形而上學は實有は物質的材料にあらずして　作因なることを示す。作因は己の中に本體を有し、之れによりて存在するものにあらず。其の作用に依りて物の存在に於ける決定的要素として自からを確立せしめ、以て實在と見做さるゝ權利を得るものなり。吾人は宇宙を說明するに本體を要せずして作因あるを要す。要は本體にあらずして原因性なり。後者は前者の意味を殘すところなく顯はし誤解せられ易き感官的含意を示すところなし。形而上學は各作因は複雜ならず分割すべからざる單位なることを示す。されば神は無限の物質的材料若しくは本體にあらずして、一にして分つべからざる無限の原因若しくは作因といふべきものなり。此の點よりすれば神と世界との關係につきて述べたる前諸說は自ら消滅すべし。神は部分を有せず、又た總計にもあらず。されば世界は神の部分にあらず、又た神よりの分出にもあらず、又た神の本體を分有するにもあらざるなり。何となれば此等の見解は神を分割し得らるゝものとなし、其の性質を物質的材料の如きものとするが故なり。神は必然唯一のものなれば、全部若しくは一部の別なく、凡て彼を世界と同一視せんとする說は、吾人之れを採ること能はざるなり。有限者にして實在ならんか、若しくは現象的以上のものならんか、それは神の中より發生したるものにあらず、神に因りて發生せられたるもの、即ち創造せられたるもの

と見做されざるべからず。創造の觀念のみ獨り能く有限者の本體的實有と無限者の唯一とを調和し得るものなり。蓋し有限者實有ならんか、それは作因なり。作因なるが故に何物よりも造り出ださるゝことを得ず。唯だ無限者によりて定置せらるゝものなり。

世界は神の樣式なりとする諸說も亦た同一の反對を免れざるべし。此の樣式といふ言葉は、普通想像と結び付けられ、受動的にして伸張したる本體といふ總念に基けり。通例之れと相伴ふ思想は物は各無限者の特殊別々の部分にして恰も一波瀾が海全體の一形像にあらず、波の中に含まれたる海の局部の一形像なるが如しといふこと是れなり。されども形而上學は、實在の唯一が屬性の複雜と相反せざるは、此の屬性を全體の屬性なりとするが故なることを明にせり。唯だ物の局部の狀態に過ぎずとする雜多の狀態といふ概念は、此の唯一を破壞するものなり。全體の實有は各狀態の中に現在せざるべからず。されども數量の總念、此の問題に適用せらるゝときは此の事得て望むべからず。實在者が全體として各樣式に存すと考へ得る唯一の道は、唯だ凡ての數量的、空間的觀念を棄てゝ、實在者を以て作因と見做し、あらゆる樣式を其の作用の形狀となすにあり。されば有限者若し無限者の樣式ならんか、それは無限者の作用にして、作因の樣式なりといふ意に外ならざるなり。

此の關係につきて他の概念を提起するものあり。それは全體と、其の中に包含せられたる特殊との關係、特に普遍的理性と個別の心意とに基くもの是れなり。理性は凡て人に同一にして、誰も之れ

を專有すること能はず。唯だ之れに與かり得るものなるが故に、普遍的理性は、唯一の實有にして、有限の心は、一形像若しくは發現として、唯だ此の中に、又た之れによりて存在し得るのみなりと。されどもこは煩瑣哲學的實在論の反響に過ぎず。部類(クラッス)的名稱は其の存在を表示せず。だ唯特殊なる存在に於てのみ之れが實有を有す而して部類的名稱は之れより抽象せられたるものなり。

世界と神との關係は盡くべからずして考へられざるべからず。根本的實有の唯一なると空間的關係の觀念的なるとは想像に浮び出づる數量的空間の觀念を拋棄せしむるものなり。吾人は世界の起源を尋ねて、神の中まで辿り行くべからず。神のもとまでたどるを以て滿足せざるべからず。世界は神の中に存在すとは、單に世界が絶えず神に依りて存すといふ意に外ならず。シェリングの所謂『暗黑なる自然原因』の如く判別し得べき本體的形狀に於て、世界を神の中に見ることは、神の必然的唯一を亡ぼすものなり。吾人が經驗する能動的睿智とその所產との關係といふ觀念のみ、獨り此の問題を解決することを得べし。吾人が既に論じたる如く、睿智の作業を本體學的の意味に於て、睿智の中にまで探らんとするは、理性を破壞するものなり。吾人は其の作用の原因を睿智に歸す。かゝる原因作用の可能なるは、吾人の經驗するところなり。思想はこれ以上に達することを得ざるなり。

有限者に關する概念にして論理學上成立し得べきもの二種あり。第一吾人は之れを神の作用の樣式と考へ、之れを本體を具へたる物と見做さゞるなり。第二吾人は之れを神の所作なりと爲すに止まらず、本體的成果たる實在の物と見ることなり。前者の概念は思想と心との關係を以て、其の例證と爲すを得。此等の思想は心の樣式にあらずして、心の作用なり。そは何物より造り出だされたるものにあらず、唯だ思想する心が之れに存在を與へたるのみ。同時に此の思想は心中に存する物にあらず、唯だ之れを創始する作用の中に、又た之れを通じて存在するのみ。

此等見解の中何れを擇ぶべきかは、己を物として知り得る物を、有限者の中に發見するとき、決定せらるゝものなり。物及び本體は一見直接の知覺によりて示さるゝが如しと雖、認識論は吾人に敎ふるに知覺の對象は、元來吾人の概念と再現とが、空間と時間、本體と屬性、原因と結果等の形式の下に、客觀的のものとなされたるに過ぎざるを以てせり。そは唯だ外より來る激動の系列に對し、心の反應する方法を表示するのみ。更に形而上學は獨立したる事實は、全く外見と異なるものなるを示せり。此の如く考ふるときは、現象的存在と區別せられたる眞の本體的存在は獨り人格にのみ屬するものなりといふべきなり。唯だ自我のみが有限者と無限者とを區別するを得べく、有限の心靈獨り無限者に對して本體的に他在態(アザーネス)の狀に達するものなり。無人格なる有限者の他在態(アザーネス)を有するは、思想若しくは所作が其の主體に對して有するが如し。

以上は現時哲學思想の近づきつゝある物質體系に關する見解なり。思想は實に萬物は本體的に存すといふ確信を以て始むるものなり。されど吾人が研究の歩を進むるに隨ひ、其の萬物は消えて、連續、一樣、普遍性以上なる眞實の物にあらざる法則、過程となり了るものなり。又た世界の原由は人格的作因と共に、無人格的作因をも定置すといふも、何等如上の結論に對して利するところあらざるべし。何となれば無人格的有限者の總念は之れを分解するときは、唯だ現象と成り了るものなればなり。同一（アイデンチチー）、唯一（ユニチー）、原因性、本體性等は唯だ人格的形狀の下にのみ出來得べきことなり。かく論じ來れば無人格は唯だ依存的現象、若しくは己以外の勢力の過程としてのみ、之れを考ふることを得べし。

此の說は普通の思想家の喜ばざるところにして又た常識の名によりて之れを疑ふもの少からず。かゝる反對論は概して誤解に基くものなり。吾人の感覺的經驗は、物の體系と吾人とを關係せしむるものなり。此の體系に關して吾人は問はんとす。此の體系は狂人の妄想が、その發狂的精神に依るが如く、吾人に依るものなるか、將た又た吾人と吾人の知覺とを離れて獨立したるものなるかと。普通の觀念論的概念は前說を肯定す。こは慢性的誤解の一つにして、一たび此の誤解に陷らんか、到底救出せらるゝ道なかるべし。されども合理的觀念論者にして、誰れかかゝる見解を持するものあらん。彼は經驗の體系は吾人自身の所產にあらずして、凡て人々に對し一樣に存在するものなるを

信ずること、決して他に劣らざるなり。彼は唯だ此の體系が其の本質に於て、如何なるものなるかとの疑問を提出するのみ。實在論者は非心靈的存在の概念を提出して、そが終局の性質を表示するものなりとなす。されども觀念論者は、此の如き概念は、實在論者の說に過ぎずして直接なる經驗の事實にあらず又た此の說は、其の負はしめられたる任務を盡すだに難きものなるを示すこと容易なりとせり。又た實在論者自からも、神と世界との關係を論ずるに當り、其の自說を緩和するの止むなきに至るものなり。固より想像を恣にするときは、此の關係を以て空間的のものとなし、交互に包攝と排除とをなすものとすること難きにあらずと雖も、少しく思慮を運らさばかゝる見解の不可能なること若しくは矛盾なることを解するに至るべし。實在論の想像に取りて最も便利なる點は反省的思想に取りては極めて妨害なるものなり。實に此の見解は、神學の困難を感ずる多くの形而上學的難問の源なるや明かなり。實在の物質と勢力とを有する、實在の空間といふ觀念は常に凡ての存在に對し、機制的、唯物的概念を持せしむる傾きありて、自余の概念をして成立の餘地なからしむ。實在論は無神論にあらざるべし。然れども慥に無神論の一大本源なりといふべし。其の物と勢力とは絕えず自ら獨立せんとするものにして、非宗教的傾向を有する、心の明晰ならざる人は、屢々之れを獨立したるものと考ふるものなり。

兎に角有限的心靈の世界は、創造せられたるものなりと見做さゞるべからず、そは先在の物質的

材料より製作せられたるものにあらず。創造せられたるものなり。創造とは、創造的作用なくば存在せざるものを、存在せしむるをいふ。之れに關し二個の當然なる問を發するを得べし。作因は誰なるか。そは如何にして有り得べきか。第一問に對しては神と答へ、第二問に對しては過程の推論といふ意味に於て合理的の答を有せず。

此等の當然なる問の外に、不條理なる問を發するもの少からず。例へば世界は『何より』製造せられしか。之れに對する普通の答は無よりなりといふにあり。問も答も互に相似よりたるものなり、兩者は共に先在の物質的材料といふ總念に囚はれたるものなり。背理の極ともいふべきは無を以て其の所謂材料となし、神は或る方法によりて、其の無を或る物に製造したるものゝ如く思ふことなり、何物も無より生ずること能はずといへる古き諺を以て、創造說を攻擊するものありと雖も、蓋し何ら効力なきものなり。此の中に存する眞理は、無は何物も生ずること能はず、又た無よりして何物をも製造すること能はずといふに過ぎず。されども有神論は、無が或る物を生じたりと敎ふるものにあらず。唯だ全能の神世界を存在せしめたりといふのみ。又た有神論は神が無といへる一團の材料を用ひて或る物を製造したりと主張するものにあらず寧ろ新しき存在を創始せりとなす。然かも神は之れを創造したる後も、決して創造の前より、減少することなき方法によりて、之れを創造せりと論ずるのみ。神は無を原料として世界を作らず。又た己の中より之れを生じたるに

もあらざるなり。兩說とも背理なりといはざるべからず。唯だ彼の作用を離れては、存在することは能はざりしものを、存在せしめたりといふに過ぎず。唯だ時間の觀念性なるを思ふとき、吾人は創造とは、物の存在は神の作用に依るものにして、數量的に神の本質に與かるものにあらずとするのみ。固よりかゝる神と物との關係は秘義なり。されども之れに反對する見解は思想それ自ら矛盾たらざるを得ず。創造は神の唯一と有限者の存在とを調和せしむる唯一の概念なり。吾人は恐らく此の秘義の存することを憂ふるに及ばざるべし。何となれば秘義は何くにも存するものなればなり加ふるに創造は吾人の業にあらざればなり。

或る思索家は世界は無より造られたるものにあらず。神性の潛勢力より造られたりとの說を主張して、創造の秘義より免かれんとす。此の見解の意義にして、唯だ理解し得べき點は。世界は實現したる前に、神の思想の中に概念として存在したりとするにあり。此の概念的存在は潛勢力たりしなり。然かも概念として存在したりしものが、如何にして實在界に顯はれしかを示さざるなり。此の如き見解は唯だ學者らしき口吻に過ぎずして、何等意義をも有せざるなり。

されば世界は神に依りて存するものなり。然かも神の本體の樣式若しくは部分にあらざるなり。かゝる概念は神の唯一に反し、又た本體と原因とを同視する非理に陷るものなり。かく觀來れば、世界を以て、神の部分となし。兩者の關係を解するに數量の範疇、若しくは全體と部分との關係を

以てするが如きは到底理に合はざることなり。吾人は以下世界を以て神性の必然的結果と解する汎神論を論ずべし。

此の見解は吾人が實在に關する一般の思想に準じて、二種の解釋を容るべし、吾人は世界を以て神性の論理的（自然の）含意とも見るべく、又た動的結果とも考へ得べし、一說によれば、神は凡てを規程する前提にして世界はその含意なる結論なりと、此の說によれば、神と世界との關係は論理的靜的にして此の見解は靜的汎神論と稱し得べし、之れに反して神を以て凡てを規程する原因と見做し、世界を以て其の原因性の必然發現するところのものなりとも考へ得べし。此の說に依れば神と世界との關係は、動的にして、此の見解は動的汎神論と名づくるを得ん。此の見解によれば、無限者は或る法則に從ひて、常に活力を發生して止まず、之れによりて種々の成果を生づるものなりと、されども此等の法則は、悉く無限者の性の發現にして。些の變化を許さざるものなり、世界の秩序は神の性にして又た神の性は世界の秩序なり。されば此の種の汎神論者は痛く奇跡に反對す。何となれば奇跡は自然界を離れ、又た其の上に立つところの意志を含意するものなればなり。世界の秩序實に神の性ならんか、神は自らを否認するにあらざれば、此の秩序を離るゝこと能はざるべきは論なきことなり。此の確信は敎育なきものが、經驗の一樣不變を以て、實在の必然なりと誤解する、自然の傾向によりて、更に强めらるゝものなり、かくして世界の秩序は、終に必然的不變なるものなりと確定せられ、心は自らの影を認めざるなり、是れ即ち凡て哲學的進化論及び現代科學的理論の大部分、即ち科學的事實と原理とに基きて立論したりと想像せられたる理論の根柢に伏在する見解なり。靜的汎神論はいふ、原始に永遠の本體若しくは永遠の理性存在し、何等變化することなく、凡て其の含意と共に存在せりと。動的汎神論はいふ、原始に必然恒久の勢力在りて、其の固有の必然によりて、常に法則と體系とを生ずと、此の見解若し世界原因の無人格無意識觀と合するときは、鄙俗なる無神論と異なることなきに至るべし、之れに依れば世界の原由は、單に統一的原理、宇宙の根本的實有に過ぎずして、其の宇宙的發現に於て、悉く己を消費し盡せりといふものなり。これ超越性を有せざる內在にして神と世界とは同一事物の反對なる側面たるものなり、其の根柢より考ふれば、世界は神にして、其の發現したる自然界より考ふれば神は又た世界たるなり。

靜的汎神論は動もすれば、宇宙を靜止の狀態また妄想に充ちたるものとなす、これ到底維持し難き抽象たるを免がれざるべし、そは又た時間も變化もなき不動靜止の實在を示すものにして、如何にするも、吾人が變化する經驗と結ぶこと能はざるべし、吾人若し此の經驗を妄想と呼ばんか、此の妄想も亦た事實と同じく、解說し難きものならん。エリヤ派哲學は、此の巖礁に觸れて破船し、スピノザの學說も亦た之れによりて粉碎せられたり。凡て神と世界との關係を論理的含意のものとなす見解は、悉く然らざるはなし、何となれば論理學は時間を有せず、結論は常に前提と俱存せざ

るべからざればなり。されば現在の世界、若し神の實有より生ずる、論理的含意なりとせば、世界とその凡ての要素とは、永遠のものたらざるべからず、かくして變化の發する餘地なく、萬物は不變不動に共存すべきものなり。此の見解によれば有限の心と其の一切の內容とは、又た必然にして永遠なりとせざるべからず、過失も、害惡も、此の心の內容の一部が發現したるものなれば、そも亦た必然にして永遠なりとせざるべからず、されば吾人は非理と害惡との要素は、神の中に存在せりと主張せざるを得ざるなり、論じて此に至れば思想は全く破壞せられたりといふべきなり、

故に汎神論中多少の眞理存するものとせば、そは動的汎神論たらざるべからず、然れども此の見解すらなほ維持し難きものあり。請ふ左に其の理由を說かん。

一、そは不明瞭なり。論理的含意以外の動的含意の觀念は、自由なる意志の作用となすにあらざれば、全く解すること能はざるなり。又た此の見解は世界的秩序を說明するに止まりて、其の細目を顧みざるなり。一般法則の體系たる世界的秩序は、特殊なる事實を說明するものにあらず。故に吾人は世界的秩序を神の性に歸するのみならず、宇宙の細目も亦た然かせざるべからず。而して此の細目は間斷なく變遷するものなれば、その基本たる神の性も、亦た變遷せざるべからず。斯くて無限者は時間的存在者にまで貶され、其の絕對性を失ふものなり。何となれば只だ自決のものゝみ絕對たることを得べければなり、

普通此の難點を看過する所以のものは、全一の誤謬に基くものなり。世界の體系はその細目を顧みず、全體として神の性に基くものと考へられたり、然かも吾人一たび具體的に考へんか此の說は成り立つこと能はざるなり、されば吾人は凡ての複雜性と多樣性とを、其の原由に歸せざるべからず。かくして原由自ら復雜多樣となるものなり、同樣の誤謬は汎神論に含まれたる神性の墮落を隱蔽したり。吾人が多く經驗する、數多の不透明にして些細なる、然かも亦た不快なる細事をして、神に歸せしむることを好むものは蓋し少かるべし。されども吾人は之れを世界的秩序若しくは法則の體系といふ思想の裏面に蔽ふこと易かるべきなり、而して此の體系は、神性の相當なる表示なるが如く考へらるゝものなり。かくして具體的經驗の不體裁にして迷惑なる分子は、悉く吾人の思想より取り除かるゝなり。批評家たるものは宜しく此の妄想を指摘せざるべからざるなり。

二、自決すでに拒否せられんか、吾人は無限者の變化極りなき活動に對して、其の原由を求めざるべからず。而してこは無限者の中に存し、之れが爲めに其の狀態は交互相作用して其の結果を限定する機制に發見せられざるべからず。されども吾人はかゝる形而上學的機制の概念を形成すること能はず。而して又た此の見解を徹底すれば、全然無限者の唯一性を打ち消すことゝなるものなり。吾人は續いてその唯一を語り得ることあらん、然かも其の唯一なる點を發見し、若しくは何くに其の唯一の存するかを示すこと能はざるべし、吾人は永く交互作用を爲す複雜中に留まりて、到

底根本的單一の地に達することを得ざるべし。吾人が既に指摘したるが如く、吾人の知る唯一の實在なる單一は自由にして意識を有する自我あるのみ。吾人は精思を凝らすに從ひ、益々それのみ眞實の單一なることを知るものなり、此の種の汎神論は必ず無神論に變轉するものなり。

三、吾人が既に論じたるが如く、所謂自然の法則と結果の必然とは、純然たる假定說に過ぎざるものなり。如何に必然なる眞理を精思するも、現在の秩序は決して必然的含意なりとは考へられざるなり、形而上的必然は、純然たる消極的觀念にして、何ら積極的概念若しくは經驗の之れに應ずるものあることなし、而して合理的必然といへば、世界と其の細事とは偶然なりとするものなり、

四　吾人は更に必然を主張する諸說は、理性其れ自らを顚覆するものなるを論ぜり。自由は合理性の必然なる含意なり。此等の理由によりて、吾人は神は世界に對する關係に於て、自由なるものたとひ世界は神の性に依存すとはいへ、決して其の必然なる成果にあらず、寧ろ神の意志に基くものなりと主張するものなり。世界を神に合せしむるは、時間と進化とを、神に合せしむるなり。而して神が進化開發すといふ總念は決して哲學的思想の贊成するところにあらざるなり、此の善惡相反し、意義少く、不完全にして、廢物の數知れず存する現實の世界を、神の中に歸することは、有神的觀念を貶して、プラトーの造物主(Demiurge)と等しからしむるものなり。されば凡て他の物は神性なりとするも神のみは其の神性を失ふに至るべし。

或る意味に於て、さきに述べし如き好ましからざるものも凡てみな神に歸せしめざるべからざるを知らば、有神論を持するによりて、吾人は何の益するところかある、と問ふものあらば、吾人は次の如く答へんとす。汎神論と相容れざる神の絕對と完全とを維持し得る利益少からざるものあり、と、之れに加ふるに、世界の一見害惡不完全と思はるゝものも、目的と自由とに基きて生じたるものにして、決して頑固なる必然によりて起りたるものにあらず。されば神の計圖の完成するときは之れが取り除かるゝか、若しくは改善せらるゝかの希望を抱き得るものなり、若し萬物不明なる必然によりて起り、何物も適當なる先見と目的との結果にあらずとせば、吾人はかゝる希望を抱くこと能はざるなり。

吾人若し世界は如何にして存在するに至るかと問はゞ、吾人は世界の概念を神の思想に歸せしめざるべからず、然かも此の概念の起原と可能なることを問ふは無益なり、かゝる質問は充足原理の法を、思想の結果よりも、寧ろ思想自らに適用するものにして、常に混亂を以て始終するものなり。次に如何にして此の概念は現實せられたるかと問はゞ吾人は之れを神性の必然に歸せずして、造物者の自由意志に基すといふものなり。更に此の概念は何故に現實せられたるかと問はゞ吾人は或る價値ある目的存し、之れによりて最上善に達せんとするものならんと答へん、最後に此の最上善は之れを實現する爲めに現世界を含意するかと問はゞ吾人は之れが解答を後日に待つといふを以て滿

足せざるべからず。

神は世界に對する關係に於て自由なりとの結論を爲すに由り、吾人は思索的に創造を演繹する凡ての希望を拋棄したるものなり。かゝる希望を抱きしもの古今其の人少しとせず。又た之れを實現せんと企てたるもの數ふるに遑あらず。世界より神を論結することを得べければ、吾人は神より世界を論結し得ざる道理なしと、時に創造は神の性に缺くべからざる要素なりと定義するによりて、此の神より世界を論結する問題を容易ならしめたり。而して彼は世界を有せざる神は自家撞着の思想なりと結論したり。此等の見解は失當なるのみならず、そは又た理解に必要なる條件を會得することなくして、慢然理解會得せんとする思索的慾望より生ずるものなり。此の點に於ては誰か神を造りしと問ふ小供らしき智慧と異なることなし、吾人は此の具體的世界の本源を以て睿智に歸せざるべからず。然かもそを睿智の必然的含意となすべからざるなり。

此の結論はその物質と心靈的とを論ぜず凡ての有限なるものゝ體系に適するものなり。そは創造に於ける神の絶對と自由とを主張す、然かも亦た被造物の全き依存性と其の現象性とも全然調和し得べきものなり、さりながら此の場合に於ては、創造は神に對し、眞實なる他在態を生ずることなく、創造者の側に取りては、一種の朦朧たる默想の如きものとなり消え失するものなり、かゝる結果を生じて吾人は再び當惑せざるを得ず。有限は全く理解し難き幻影となり果つるなり、されば吾

人は或る本體性を有限なる心靈に附することを努めざるべからざるに至るべし。神はその世界との關係に於て自由なりと論じたれば、吾人は次に有限の靈は神と相對して或る實有なりと論ぜざるべからざるなり。

然れども大なる困難は、有限者の必然的依存性といふ點にあり。交互作用を研究する際、吾人は凡ての有限物は他に依存するものと解すべきを論じたり。而して吾人若も愼慮を缺ぐことあらんか、此の事實によりて、吾人の人格と責任とを消失するは極めて容易の事なり。此の點を鮮明にせんが爲めに、著者の作『形而上學』より引照するところあらん。

『此の點に關し誤解の依つて以て生ずる更に微少なる根源は、有限者の必然的依存性にありとす、有限者は無限者に依り又た其れに絶えず依存するところの體系の一員なり。されば其の結果として有限の靈は、其の最善なるものも唯だ制限せられたる相對的存在を有するのみ。無限者と相比して有限者は唯だ部分的不完全なる存在を有するに過ぎず、最も十全なる意味に於ては、無限者のみ獨り存在するものなり、其の他のものは相對的、現象的のものにして、實在せざるものなり』。

『抽象的に此の點を思考せんか、此の結論に到達するは容易なることなり。哲學史を一讀したるものは此の點に於て、多く汎神論に陷る傾あるを記憶すべけん、又た吾人が有限と無限と、依存と獨立と、現象と實在と、存在と非存在なる抽象的範疇を論ずる間は、此の結論に達するを免れざるべ

し、事實吾人は此の場合に於て如何なるものが具體的に可能なるかを決せしむる、此等の範疇を洞察する力なきものなり、吾人は經驗に依らざるべからず、而して範疇にによりて經驗を決定するにあらず、經驗を以て範疇を解釋せざるべからざるなり。之れと異なる方法は、凡て妄想にして、又た多くの妄想を生ぜしむる源泉なり』。

『此の方法に依らんか、吾人は如何に有限なるものが、かく存在し得るかを覺ること能はずと雖も兎に角そは存在するものなることを發見するものなり。有限なるものは無限なるものゝ如く、十分の意味に於て存在することなかるべしと雖も、僅少なる方法に於て、そは作用し又は作用せられ得るものなり。自己充足の意味に於ては、スピノザの唱へしが如く、唯だ一種の本體存するのみ。されどもかくいへばとて、凡て他のものは、悉く朦朧たる陰影なりといふを得ず。何となれば他に數多の作用し又た作用せらるゝ本體存すればなり。吾人若し此の事實を念頭に留めおかんか、之れを如何に名づくるかは抑も些事たるのみ。本體を自己充足の意味に用ひんか、此等數多の物は本體に非ざるべし、されども本體の意を、作用慾情の主體と解せんか、此等のものは本體と稱すべきなり、されば吾人若し此の意味を十分に注意して、吾人の念頭に存しおかば、吾人は無限なる者のみ獨り存在し、又た眞に實在するものにして、有限なるものは唯だ部分的、相對的不完全なる非有的存在を保ち得るのみといふことを得ん、而して此の言の中に多少の眞理を宿すべけん。然れどもか

ゝる言は誤解せられ易きものなれば、之れを秘して多く使用せざるを利とすべし。此等の手術を施すに當り、吾人は防腐劑を用ひ、推論を始むる前に先づ嚴密なる定義を言葉に下して、言葉の用具を消毒せざるべからず』。

『吾人若し生命を熟思せんか、二個の事實に逢着すべし。第一吾人は思想と感情と意志とを有す。此等は吾人の有なり。吾人は又た多少自制自治の力を有す。されば經驗によれば、吾人は一種の自我性と相對的の獨立性とを有するものなり。此の事實は吾人をして眞實の人格者たらしむ、そは寧ろ吾人が人格の意義なり。第二の事實は吾人は此の生命を自己充足にして、獨立なるものと見做すこと能はざること是れなり。生命は如何にして存するか、こは吾人の知解する能はざるところなり。吾人は唯だその存在するを知るのみ。如何にして此の二個の事實を結合するかは、吾人の解し得ざるところなり。吾人は唯だ此の兩者を認むるにあらざれば、生命を會得すること能はず。兩者の何れを拒否するも、吾人をして矛盾、無意義の地に到らしむることを知るのみ。神は萬物の中に在りといふは、立派なる言にして、又た或る意味に於ては、正當なること無論の事なり。然かも神は萬物にして一切の思想と感情と行爲とは、悉く神のものなりといふときは、理性は自殺したるものといはざるべからず。神は吾人の思考と感情と稱するものに於て考へ又た感ずることゝなるなり。かくすれば吾人の過失は神の過失にして、吾人の愚は神の愚たるを免れざるべし。神は又た極

めて自由に自家撞着を爲すことゝなるなり。何となれば彼の數多の思考は人と人との間に一致あることなく、又た同人に於ても、日々必しも調和し難きもの存すればなり。誤謬も愚も罪も亦た凡て神のものとせらるゝに至るべし。かくして理性も良心も其の權威を消失することゝなるなり。此の說に依れば理性ならざるものは、唯だ神あるのみ。而して彼は矛盾と陋劣との塊となり了らんとす。』

『これ吾人が如上言及したる惡、誤謬の問題を追窮することなくして、此の總念中に存する、純然たる論理的の困難に注目すれば足れりとす。個人の經驗は他の者に移すこと能はずといふ觀念中に含まれたる困難を除去し、吾人の思想と生命とは、有意識的に神の物なりとして、之れを彼に歸することを得と想像し見ん。さらば吾人自身の思想を考ふる神と絕對の思想を考ふる神との關係果して如何。神は有限者の經驗に於て、限局せられ、混雜せられ、又た盲目にせらるゝと共に、彼の無限の生命に於て、絕對的洞察を爲し得べきか。彼は自己を有限者中に沒入して、遂に自己の何たると誰たるとを知らざるに至るか、若しくは自己を有限者中に沒却して殘るものは唯だ有限者たるのみとならんか。さあれ神は常に唯一無限のものとして、自己の完全なる知識を有すとせんか、此の完全なる唯一と光明の中に、如何ぞかゝる有限者の妄想を生じ得んや。かく無限者が二方面の働を爲すと想像せらるゝ以上は、かゝる質問に答ふること能はざるべし　吾人は到底解釋し難き無數の

妄想に逢着すべけん。而してこは又た無限者が自ら奇怪なる形而上學的泥醉に於て、果てもなきかくれんぼうを爲す觀あるものなり。創造といふ總念中には難解の點を宿すものあらん。然かも以上の難點を免がれしむるものなり。無限者は如何にしても有限者を確立せしめ、道德的秩序を定め得るかは、吾人の解し得ざるところなり。されども之れに代はる說は、吾人をして救ふべからざる不合理の地に陷らしむるものなり。吾人はかゝる汎神論的見地によらんか。神も世界も解すること能はざるべし。されば此の種の思想に傾くものは或る「永遠の意識」と吾人が人的意識との間に定めなき彷徨を爲し、其の相互の關係に對しても、前後相應じたる明白なる思想を有することなく、唯だ曖昧模糊たる言辭を弄するのみ』（（形而上學（改版）百ページ以下）

之れによりて吾人は如何なる形狀を以てするも、汎神論は到底維持し難きものなりと結論するものなり。その神に對する教理も亦た吾人に關する見解も、共に批評の忌むところなり。神をして必然に服從せしむることゝ、人をして神の幻像たらしむることは、均しく理性の許さゞるところなり。固より此の教理は思想の產といはんよりも、寧ろおぼろなる感情といふべきものなり。機制的自然神敎若しくは宗敎的擬人論の行はるゝ時に際しては、汎神論は反動として自ら起るものなり。極端なる機制說若しくは唯物論の行はるゝ時、汎神論の起るは寧ろ其の救濟法として歡迎すべきことなり。活ける神の信仰遠き過去の事となり、神は全く地平線下に消え失せたらんか、かゝる時に汎神

論の生ずるは蓋し一進歩なるが如し。然かも此の說は誤れり。さはれ實際吾人の要するところのものは、萬物を己に吸收し盡して、他の存在を妨ぐる神にあらず、吾人が彼に賴りて生きまた動きまた存することを得、又た彼の恩惠は凡て彼の被造物の上に顯はるる生ける內在の神たるなり。又た天啓と神秘と相混ずる神にして能く吾人に近接するものなれば、吾人之れを愛するを得べく、然かも亦た高遠なるが故に、吾人は之れを恐れ崇敬の情禁ずる能はざる神たらざるべからず。汎神論を眞理となし之れに感動せらるゝものは、只だ用語上の幻影に惑はさるゝ心あるのみ。印度と印度の萬神廟は、汎神論本來の意義を表示するものなり。

吾人は次に神の世界に對する有神的觀念を論ずることゝせん。

此の見解によれば世界は神の意志に由つて成立す。かく論斷するに當り、吾人は人類に附隨する制限を神の意志に適用せざる樣注意せざるべからず。人類の意識には、意識固有の要素に非ざる多くの形狀を存するが如く、人類の意志にも、固有必要ならざる多くの形狀を有するものなり。而してこは吾人の有限性に基くものなり。吾人が意志の對象は、漸次經驗によりて得るものなるが故に、吾人は動もすれば意志を以て、時々吾人の生活の中に發動する瞬間的の活動にして、概して靜止するものなりと考ふものなり。斯くて吾人は意志の作用を以て、一定不變の狀態を維持するに何等の關與することなく、唯だ變化を生ずるものなりと思考するに至る。若しそが或る狀態を保持するに與

かるとすれば、それは外部より此の狀態を亂さんとするに對する場合に於てのみ然るものなり。此の如くなれば吾人は終に意志は、必ず時間的のもの、始めあるものなりと思惟するに至るものなり。さすれば世界は神の意志によりて成立すといふときは、吾人はその創始せらるゝ前に、空虛なる時間の存在することを假定するにあらずんば、此の思想を了解すること能はざる感を抱くに至るものなり。

人類の意志に屬する此等の狀態は何ら研究することなく、漫然之れを神に轉用すべきものにあらず。先づ吾人は意志の作用には、必ずしも始めあることを含むとなすべからず。神の全能を研究する際、神自らに關する神の意志は、永遠ならざるべからざるとを知れり。換言すれば、そは神の神たる所以の自由の自決にして、神の無始なるが如く無始なり、神の意志の時間的なるは世界に關する場合に於てのみ。此の點に於ても亦た神の意志と人の意志とは本來の差異著しきものあるなり。吾人は唯だ漸次に吾人が目的を知り得るのみ。然かもそは神に於ては然らざるなり。神は絕對的に自識自主たる以上、過去もなく將來もあることなしとは、吾人の既に論じたるところなり。されば神の意志の理想は、神の思想に於ても亦た永遠なり。されども創造せんとする意志に關しては諸說一定せず。或るものは之れを神に於て永遠無始のものとなし、或るものは之れを時間的なりと解す。

吾人の意志と創造的意志との間には、更に他の區別あることを忘るべからず、吾人にありては意志を決することは、必ずしも之れを成就する所以にあらず。かくして吾人は意志の外に、之れを實現する特別なる作用なかるべからずと考ふるに至る。人或は此の概念を神に推し及ぼし、創造せんとする意志は永遠無始にして、然かも之れを實行するは時間的なりと主張するものあり。されども此の見解は意志(ウイル)と意向(インテンション)とを混同するのみならず、亦た謬說たるを免れず。吾人の意志がかゝる形狀を顯はす所以は、全く吾人の有限性に基くものなり。吾人の意志は、事實吾人の心的狀態にまで及ぶのみ。而して此所に於てすら絕對たることを得ざるなり。外界に於て結果を生ずることは、己以外の或る物に依らざる可からず。而して此の己以外の或る物は、常に己の意志に服從するものにあらざるが故に、吾人は執意と實現とを區別するに至れり。吾人の思想は一部外的原因に由來するものなれば、吾人は常に吾人の思想を支配すること能はざるを發見するものなり。かく意志と思想との爭鬪を生ずるに於ては、吾人は意志と實現とを區別する、更に新なる理由を發見するものなり。終に吾人が身體を支配するに當り、努力勤勞の感を有す。而して吾人は之れを意志の觀念に推し及ぼすものなり。然かも此の感覺は意志に屬するものにあらざるなり。此等の感覺は吾人が意志に基く筋肉緊張の結果にして、意志に屬する部分にあらざるなり。此等の要素は一として之れを神に轉用すること能はず。神は己れ以外のものによりて制約せらるゝものにあらず。神は絕對的に自決する

ものにして、神に取りては決意と實現とは同一ならざるべからず。

時間の實在的敎理によれる創造せんとする意志に關し二個の見解あり、或は之れを神の永遠なるものとなし、或は之れを神の時間的のものとなす、吾人は唯心的概念を論ずる前に、此等兩說に對し一言なかるべからず。

此の兩說の中創造をして唯だ時間的のものとなす說は、他の說に比すれば想像し易しとす。創造的作用の行はるゝ前に、空虛なる時間の存在を肯定するは、其の作用をして、永遠無始の働に比ぶれば、作用らしき觀を呈するものなり。之れと同時に此の見解は、創造をして神の性の必然的結果たらしむる反對の說よりも、更に意志の働たることを明白に現はすものなり。然れどもこは唯だ想像に便宜を與ふるに過ぎず。創造者若し自由ならば彼も永刼に自由なるべし。彼は先づ存在し、而して後に自由となりたるものにあらず。彼の自由は彼と俱に存するものなり。されば彼の自由なる働は彼と共存し得るものなり。永遠無始の創造といふ總念は、神の自由若しくは世界は神の意志に全然依存するものなりとの說と矛盾するものにあらず。時間的創造の總念は、次の如き困難なる問題を惹起せしむる不利あり。即ち神は創造以前には何を爲しつゝありしか、何故に神は此の世を創造せし時に創造して、其の他の時には、創造せざりしや。吾人は神は恰も漸を追うて己の本領に達し、創造の準備を爲しつゝありしかの如く、自己の進化を以て此の時間を塡充すること能はず。何

となればこは神の絶對性を打ち消し、神をして時間的實在となすものなればなり。更に朴素なる思想家は豫備的創造を以て創造以前の時を充たさんと考へたり。こは此の問題の困難を知覺したるものなれども然かも決して解決したるものにあらざるなり。されば創造遲延の理由は神に見ること能はざるが如し。そは又た時間の中にも發見すること能はず。何となれば絶對なる時間の瞬間は、何れの時も同一なればなり。されば時間的創造は純然たる氣儘の行爲たらざるべからざるが如し。此等の理由によりて多くの神學者は、永遠無始の創造を唱道し、又た創造を以て時間的の起原を意味するものにあらずして、單に世界が神に依りて成立すといふ意なりとなす。

之に反して永遠無始の創造とは、自家撞着なりと主張するものあり、こは時間を以て實在的のものと想像するに因るものにして、到底維持すること能はざる見解なり。此の說によれば、世界は時間に於て始めを有せざるべからずとなす。然かも此の議論は同時に時間自らも亦た始めを有せざるべからざることを證明するものなり。カントすらなほこの過に陷りたるものにして、彼の有名なる二律背反は、時間の永遠なることを否定する力あるが如く、又た世界の無始を否定するにも同樣に力あるものなり。されども無限なる過去の時を信ずる者は何物か常に發生しつゝありたらんことを拒否する理由を有せざるなり。必然を信ずるものは何物か常に起りつゝあることを唱へざるべからず。

有神論者は、何物が常に起りつゝありたらんと見做さゞるべからず。有神論は宇宙の過程は、神と共存なりとの見解を否定する、何ら先天的の理由を有せざるなり。

通例起る難題は、無限に經過したる時間の總念に附着すると稱せらるゝ、自家撞着に基くものなり。されども此の難題の生ずるは過去の時間が無限なりといはるゝ意味を忘却するに由るものなり。此の無限といふは、唯だ過去の時間は何處まで溯るとも、之れを盡すこと能はずといふ意なるのみ過去の時間の無限なるは、恰も空間が何れの方向にも無限なるが如し 前者の場合には、何時までも溯るとも、其の始めを見ざる如く、後者に於ては、何れの處まで進むも、その終りを知らざるべし若しも時間が實在的客觀の存在を有し得るものならんか、上に述べし如き意味に於ける、過去の無限といふことは、思想の上に難題とならざるべし。そは寧ろ必然の肯定なるが如し。此の如き難題は思想と想像とを混淆するより生ずるものなり。想像は時間若しくは空間を以て限りなきものとすること能はず。然かも思想は之れを限りあるものと思惟することを得ざるなり。されども無限なる時間と永遠なる神とを以てすれば、宇宙的過程が無限なる時間を通じて、延長することを得べしとするを否定する理由を有するなり。

又た數の性質に基きて、他の反對論は發生せられたり。數は必然的に有限なり。されば數を適用すべきものは、又た有限ならざるべからず。されども數は之れを計量するものとして、時間に適用

する故に、時間も亦た有限にして、始めを有せざるべからずと、かゝる議論は吾人を感服せしむといはんよりも、寧ろ惑はしむるものなり。先づ第一に數の必然的有限とは、凡そ數は增すことを得ずとの意に外ならず。されども此の有限なることゝ、數は有限なる時間に於て盡すこと能はずといふことゝは、相撞着するものにならず。吾人よし時間を以て實在無限のものと想像するも、過去の時間に於ては、單位(時間)の或る一定數は經過したりしなり。されども其の數は有限なる言葉を以て之れを言ひ顯すことを許さざるべし。時間は間斷なく經過しつゝあるが故に、數も亦た慥に間斷なく增長しつゝあるものなり。これ以外の意味に於て、時間を有限なりとする要なし、連續繼起の性質は必ずや其の始めなかるべからず。第一なくば第二なしといはゞ吾人は時間の限りなき連續に對し、かゝる數の適用は之れを空間に適用すると同じく、吾人に對し相對的なるものにあらざるや否やを考ふるを要す。吾人が時間と空間とを領解せんが爲めに吾人は憑據として用ふる軸を立つるを要す、然かも事實其物は吾人が之れによりて思考する此等の手段に依るといふこと能はざるべし、天文學上の地平線と赤道とは天體の運動と位置とを領解し測量せしむるものなれども、こは決して運動と位置とを生ずるものにあらず。數に基く議論が時間の有限なるを證するものとせば、また能く空間の有限を證するものなりといはざるべからず。何となれば如何なる點に於ても其れに近接する哩は、何れの方向たりと雖ども終りの哩なり。されば其の方向に向つて不定に延長する距離の何

哩目といふべきなり。第一なくば第二も亦たあることなし。されば距離も亦た始めありて、其の延長も凡ての方向に於て有限なりとせざるべからず、實に空間の無限を信ずる者の明確なりとなし難きところなり、

されども吾人若し時間の無限なるを承認して、唯だ時間に於ける宇宙的作用は、有限ならざるべからずと言はば、吾人は奇異なる二律背反に陷らざるを得ず。一方に於て永劫の神は、常に何事か爲しつゝありしこと明かなり。されども他の一方に於て數の制限力の爲めに神は過去永劫なる時間の經過を待ちて、漸く事を始め得るものなりとせられざるべからず。こは慥に奇妙なる結論なり。而して此の結論は物の系列連續は必然的に有限なるもの、又た有限物を如何ほど集むとも到底無限者を生ずること能はざるを思はゞ、蓋し免れ難き結論なりといはざるを得ず。此の困難を眞實に解釋し得る道は時間の觀念性を說くにあり、時間の本體的なるを拒否するものは、時間的關係をば是非とも宇宙的作用中に限りて、之れを創造者にまで延長すべからず。神は絕對にして自己關係を有する存在者なり。彼は永遠にして時間に限らるゝことなし。されば神は絕對の時間中の或る時に創造したるものにあらず。然かも創造したり。而して世界と時間とに其の成立を與へたり。されば吾人は世界は始めありしものとするも、何れの時即ち時の永遠の流轉中、何れの瞬間、神は之れを創造せしかを問ふは、實に背理の事たらざるを得ず。かゝる流轉は存ぜざるなり。されば創造は或る瞬間

に起りたるものにあらず。元始に神創造せり。何となれば創造は時間其の物の元始なればなり。されば神は創造以前の永刼中何を爲しつゝありしかの疑問に關しては、何ら勞する要なきものなり。そはかゝる永刼は存在せざればなり。唯だ自存、自立、時間なき神其の名は『我れ在り』といふもの、而して其の存在は時間的の變遷を有せざる神ありしのみ。時間的の言葉は唯だ宇宙的作用の中にありてのみ。意味を有するものにして、之れを絶對の神に適用するときは、自ら意義を失ふものなり。吾人の思想が導くところは、世界成立以前暫時の絶對的存在にあらずして、寧ろ世界に獨立したる絶對の存在なり。其の先在は論理的のものにして時間的のものにあらず。

宇宙的過程の中にありても時間的關係は、其の過程の事物と、形像(フェーズ)との中に、盡き難き動的形像を表示せんとする形式たるに過ぎざるなり。吾人はこゝに前きに論述したる、時間的判斷の相對性を回想せざるべからず。そは宇宙的作用に固着する絶對的性質のものにあらず。されば自覺と關係せずして、自らによりて定義し得らるべき如きものにあらず。凡て時間的判斷の起原なる現在は、純然たる自覺中の關係たるに過ぎず、而して其の延長は吾人が勢力の範圍に依るものなり。されば吾人は吾人が時間の計量を神にまで延長することには、餘程注意せざるべからざるなり。

空間と時間とを以て現象性のものとなす說は世界と空間及び時間との關係に關する此等多くの疑問を取り除くことを得。されども詮ずるところ空間と時間とに於ける世界の無限性に關する質問は

答を得ずして遺るものなり。何となれば世界は空界と時間との形式の下に顯はるゝものなれば、其の延長の問題も自然發し得らるゝなり。さればかゝる質問も事實發せられたれども、問題は變化すること少からざりしなり。時間と空間とを以て本體的となさば之れを有限と見做すべきか將た又た之れを無限と思考すべきかに就き、心は均しく惑はざるを得ざるべし。されども此の惑は、時間と空間とを以て觀念性のものとなすによりて取り除かるゝことを得べし。此の說による唯一の無限性は空間及び時間的總合の法則は無盡なりとの事實是れなり。されば時間と空間とは、可能的に無限なること、恰も數の連續の無限なるが如し。後者の無限性は吾人を煩はすことなく、又た前者の無限性も均しく害なきものなり。此等の法則を經驗に適用するときは、時空數の三種の無限性は皆同樣のものなり。吾人は時空數の具體的無限性を肯定する先天的の理由を有せざるなり。又た吾人は經驗によりて、完備したる即ち究極の有限性を肯定する理由をも有せざるなり。此の點に於て經驗は知識を供する唯一の本源なり。されば心は矛盾の兩面を主張するものにあらず。何れの方面にも積極的の決定に達し難きものなり。時間と空間とは唯だ現象的のものに過ぎずとなすときは、かゝる決定に達する必要を見ざるなり。之れを本體的の性質と假定すればこそ二律反背と論理的誤謬とを發生するものなれ。此の事に關し吾人はカントと共に獨斷的實在論の『彼もしくは是れ』に代ふるに、批評の『彼にもあらず是れにもあらず』を以てせんとするものなり。

世界は神の意志によりて生み出だされたり。されどもかくいへばとて世界と神の意志との現在の關係を決定するものにあらず。此の事に關しては二種の極端なる見解と其の中間の說數へ難きほど存す。其の極端なる一說自然神敎は、世界は創造せらるゝを要す。然れども一たび創造せられたる後は、自らの力によりて成立し得るものとなせり。他の極端なる說は殆んど世界に本體的のものあるを認めず。世界の繼續的存在は、永久の創造なりと見做すものなり。

此の兩極端の說の外に、自然神敎に反して、創造の作用の外に、保存の作用存することを唱ふるものあり。又た之れに反して創造と保存とを同一視するを斥くるものあり。凡て以上の見解は通例時間を以て實有となし、此の時間中若しくは時間を通じて、物の存在することを假定するものなり。

自然神敎は自然界を以て、現在其れ自らの權利によりて成立するものとなし、神は不在の如く、自然界に關して何ら行政の職務を有せざるものゝ如く見做せり。神は世界を創造せり。而して其の後世界は自ら運行するものなり。されば神の必要は第一原因、若しくは最初の主動者としての事にして其れ以後は更に用務を有せざるなりと。

此の概念の維持し難きことは已に之れを示せり。相互作用を論ずる際吾人は多くのものゝ、交互作用のすべては實際一(ワシ)の中に於ける內在の作用なることを解したり。自然界に於ては有限なるものの若しくは現象は、如何なる意味に於ても神の妨害又は故障たるべき自からの形而上學的若しくは

其他の權利を有するものにあらざるなり。法則と物とは神の計畫に要せらるゝが故に、存在し若しくは變化するものなり。神の計畫に於て固定せらるゝことを要するときは、則ち固定せられ、變化を要するときは　則ち變化す。彼等は神を制限するが如き存在の理由を、自らの中に有せざるなり。何となれば彼等は神の目的の發して現實するに過ぎざればなり。若し自然の作因にして繼續せば、そは存在の權利固有せるが故にあらずして、創造的意志絕えず之れを支持すればなり。宇宙的運動に於て、同一の勢力絕えず同一の法則に從ひて動きつゝあるが如く見ゆることあらば、そは勢力と法則とが永遠悠久に存在するが故にあらずして、結果を生ぜしめんが爲めに、一定の形式と方法とに於て働くべき神の計畫によるものとせざるべからず。之れを一言にて顯はさば科學の基礎たる自然法の繼續は、事實と認むることを得べし。されどもそは自ら立ち若しくは或る形而上學的必然に依れる事實に非ずして、寧ろ絕えず神の意志に依り神の方法を表示する事實に過ぎざるなり。されば吾人は自然神敎に反對して、世界は神に獨立して自ら立てる實有に非ず、唯だ神の目的が自らを實現する形式に過ぎずと主張するものなり。世界は神の目的を妨害するが如き、其れ自らの法則を有するものにあらず。其の凡ての法則と運行とは神の目的の表現に外ならざるなり。吾人の自然界に處するや、吾人は其の法則に適從せざるべからず。然れども神にとつては其の目的は原始的にして、法則は其の結果たるなり。故に法則の體系は其れ自ら全く神の目的に從ふものにて、其の

目的の要求するところ、直ちに表現し、又た實現せらる。そは法則の體系あるにも拘らずといふにあらず、此の體系の中に又た之れを通じて然りとなすものなり。

保存と不斷の創造とを同一視する見解は、之れを物質界に適用するときは、些の困難を感ぜざるなり。物質界に於て形狀と法則とは吾人の發見し得る唯一の一定せられたる要素にして、形而上學は此の外に一定の要素ありや否やを疑はしむ。此の場合に於て物質界の秩序は、其の間斷なき運行の中にのみ存在する過程に過ぎず。其の同一なるは樂譜の同一なるが如く。そは絶えず繼續して、再現せらるるによりて存在するものなり。然れども吾人は此の見解を靈界に應用すること能はざるべし。强ひて之れを應用せんか、少くとも時間を以て實在的のものとなすときは、處理し難き困難に沒頭せざるべからざるなり。現象的過程の同一は、唯だ之れを視る人にのみ存在するものにして、有限の靈をして、かゝる過程に下さしむることは、全く自我を消滅せしめ思想の成立を不可能ならしむるものなり。

されば吾人は創造と保存とを區別せざるべからざる狀に陷りしが如く見ゆ。然かも此の區別の性質を解するは難きことなり。吾人は全く其の性質と方法とを理解し能はざる或るものを肯定するものなり。之れを救助する道は唯だ時間の觀念性を說くにあるのみ。吾人は創造、保存の總念に代ふるに神の意志に依存すといふ總念を以てす。此の事實の秘義なることは、吾人既に汎神論を論ずる

時之れを示せり。吾人は又た有限なる靈の依存と同時に、その相對的獨立をも肯定するにあらざれば、思想の運用を爲すこと能はざるを說けり。此の如き關係の如何にして成立すべきかに就きては、思想は之れが明答を與へず。そは唯だ經驗が事實を啓示する時を待つあるのみ。依存者の同一に關する困難も亦た同樣の方法によりて解釋せらるべし。同一なる靈は其の同一を異なる時を越えて主張するものにあらず。唯だ之れを經驗に於て同一なりとするのみ。此の種の自己同一が具體的同一の眞實唯一の意義たるものなり。此の外之れを判斷する道なし。經驗は此の事柄に關して、其の意義と其の可能なることを量り知る唯一の標準なり。時間、連續及び同一の抽象的範疇は經驗に先ち、又た經驗を生ぜしむるものにあらず。反つて經驗は根本的事實にして、之れによりて此等の範疇は其の意義を生じ、又た之れによりて試驗せらるゝなり。此の經驗を離れんか、此等の範疇は自滅を免れざる抽象たるに過ぎざるなり。

物質界に關するのみとせば、世界と神との關係につきて、更に附加すべきことありとは思はれず。神は其の創造者にして、又た保存者たり。吾人之れを治者若しくは主宰者などゝ呼びたりとて、何ら附け加ふるところあることなし。實在論(リアリズム)すら、物の世界は其の法則を神より受け、如何なる方法を以てするも、之れを離るゝこと能はざるものと見做せり。此の如き物は統治を要せず。否統治といふ語はかゝる物に適用するとき自らその意義を失ふものなり。多少獨立を有し、動もすれば主宰者

の實現せんとする一般の計畫を亂さんとする存在者ある場合に於てのみ、統治は存すと語り得るものなり。神の統治の適當なる主體は、獨り有限の靈あるのみ。何となれば有限の靈のみ、統治の觀念に必要なる神に對する相對的獨立を有すればなり。

されば神の統治の總念中には被治者として有限なる靈の存することを含意す。されど自由はそれ自らにては方法に過ぎず、目的に非ざるなり。自由によりてのみ何らか善事實現せらるゝにあらずんば、自由なる世界は必然なる世界に優ることあるなし。故に世界の統治といふ總念は、或る最上の善、創造の結果として存在し、凡て人格的活動の法則となるとき、始めて合理的意義を生ずるものなり。世界の統治は、世界の目的を含意し、世界の目的は、世界の法則を含意す。方向もなく目的もなき宇宙運動は、自尊自重の睿智より發するものにあらざるなり。

さらば凡て自由なる存在者の服事すべき大目的とは何ぞや。自然界は無數の特殊なる目的を示す。されども何物も最上の價値を有するものなく其の多くは何等定まれる價値をも有せざるなり。吾人の觀察の及ぶ限り、自然界に實現せられたる目的は、概して無意義なるものにして、世界の完成には何ら一物をも加ふるとなく、多くの場合に於て、缺點の如く見ゆるものなり。最上の目的は吾人の觀察に上るとなし。宇宙は大體に於て判然たる方向を取りて進むとも思はれず。一定の進路に向ふといふよりも、寧ろ定めなき運動をなすものといふべきなり。吾人は又た宇宙的運動の目的を、世界

の原由の開發に見ること能はず。何となればかくするときは、世界の原由を以て。時間的存在と成したる道理なればなり。されども吾人若し强ひて世界の目的を尋求せんか、吾人は道德界に於てのみ適當なるものを發見し得るなり。道德の法則に從ひ、道德の祝福を享樂せる道德的人格者の社會こそ、獨り創造の理由となし、又た創造を價値あらしむる唯一の目的なれ。されば道德的統治の總念は直ちに吾人を導きて倫理界に進ませしめ、而して又た形而上學と何ら關係なき總念を含意せしむ。人若し此等の總念を有せざれば、かゝる統治の問題を生ずべき筈なし。而して有神哲學は神と世界との原因關係を考察するに止るべきものなり。

創造を以て自由の作用となし、之れを神の性の必然的進化と爲さざる概念は、世界と神とを同一視し、若しくは兩者の間に平等的關係を附するを禁ず。心と其の思想との關係若しくは作因と其の動作との關係は、唯だ之れを經驗によりてのみ解し得るなり。そは決して數量的、方程式的の名辭によりて表示すること能はず。されども此の慢性的妄想を外にして、哲學的思想は、從來創造の模樣及び動機を說明せんが爲めに、諸種の說を提出したり。淺薄なる哲學は種々雜多なる世界開闢論を以て創造の模樣を說明せんことを試みたり。而して其の中今なほ行はるゝものあり。此等の說一として哲學的若しくは宗敎的價値を有するものあるとなし。其の說くところは單に旣存材料の變形と結合にありて其の起原に關しては何ら論ずるところなし。創造的作用の起原を理解せんには、吾

人は唯だ類似として吾人の經驗を有するのみ。吾人の經驗によれば、吾人は先づ概念を形成し、後ち之れを實現するものなり。されば神の理解と其の意志とは、自ら區別せられ、分業の如きもの、の間に行はれたり。理解は凡て出來得べきものゝ概念を提供し、此の中より神の智慧は其の最其善なるものを擇び、神の意志によりて之れを實現せしむ。神に於ては知ることゝ意志することゝは同一ならざるべからずとの理由に基きこれを區別することに對し、多くの疑念は發せられたりき。されども此の兩語を定義して一は他を包含すとなすことにより、獨り此の同一といふ觀念を得るものなり。さりながら兩者の場合に於て、吾人は吾人の制限より生ずるところの、知ることゝ意志することとの狀態を取り去らざるべからず。概して神に於て知ることゝ意志することとを同一視することは、同時發生と同一とを混合するものなり。將に爲すべきことを知るに當り、その爲すべきことを遲延すべき理由なし。故に吾人は知ることゝ意志することゝは、同時なりと見なさざるを得ず。されども知ることゝ意志することゝは、心の作用として常に判別せらるべきものなり。此の外神の知識は、善のみならずまた惡にも及ぶものなり。さらば神は又た更に惡を意志するものなるか。

創造の動機に關しては、純粹なる思索は、何ら判然たる言を發すること能はず。そは唯だ神の絶對性を維持せん爲めに、此の動機を以て創造者の不完全より發したりとなすべからざるを指摘し得るのみ。確實なる暗示を得んと欲せば、吾人は吾人の道德的宗教的性質に賴らざるべからず。而し

てこは倫理的仁愛心より劣りたる動機を以て滿足せらるべきものにあらず。此の事實と基督教の積極的教訓とは人をして多く世界は愛の結果なりと演繹せしむ。然かも功を奏すること極めて少し、吾人は其の愛が何を含意するかを先天的に語ること能はず、爲めに吾人は實際的經驗の大部分を倫理的若しくは其の他の愛の概念に調整することすら能はざるなり。吾人は唯だ愛は創造の本源にして、神性の本質なりと信じ得るのみ。然かも到底其の含意を定むること能はざるべし。

吾人既に論じたるが如く物の世界にのみ關するものとせば、神と世界との關係に對し、何ら加ふべき言の必要なかるべし。かゝる物の世界は、自らの力によりて動若しくは反動を行ふこと能はざれば、決して常道を失するが如きことなかるべし。されども一たび自由の被治者を含意する、世界の神的政治の事に及ぶときは更に別問題を發生するものなり。吾人の思想を明白にせんが爲めに、吾人は此等自由の被治者と、彼等がその部分を形成する體系即ち世界との關係を査定せざるべからず。換言すれば人は吾人の經驗に上ぼる此の種唯一の被治者なれば、吾人は人と此の體系との關係を研究せざるべからず。

固より人は最も深き意味に於て此の體系に屬するものなり。人は此の體系を離れて解せらるべきにあらず。又た此の體系は人を離れて解すること能はざるべし。神の根本的計畫は共存の物も繼續の物も、皆等しく一個の相關的秩序の中に包有せざるべからず　こは何ら必須なる關係を有せざる

事物の寄せ集め若しくは始めは粗笨にして、後ち續々良思善想の附加せられたるものゝ如く解すべからず。此の一般の問題に關する普通の見解は、本能と淺薄なる思考との矛盾せる結合なれども、少しく之れを研究するときは、其の眞相を解するに、便少からざるべし。

自發的思想は人と自然界とを區別するものなり。されども自然界を以て物質的自然界と考ふるには、明白なる理由の存するものありて、然かもかく考ふるときは、其の問題の及ぶところ極めて廣く將に凡ての存在を吸收せんとす。此の自然界と其の物質的動的性質の存在に就いては何ら疑問の餘地なきものなり。少しく思考を運らさば此の明確なる事實よりして、次の疑問は發せらるゝなり。曰く自然界の終るところ何くぞと、人も亦た其の物的存在者としては慥に自然界に屬するものなること發見せられ、直ちに自然界は凡てを説明し、又た凡てを包容するものなりとの推量に達するものなり。自然界といふ言葉を擴大して、法則の全體系をも此の中に含ましめ、然かも此の言葉の物的意義は知らずしてなほ依然保存せられ、自然界は終に凡てなることと確定せられたりと思ふとき以上の推量は强めらるゝものなり。之れに加ふるに、時間的秩序も本體的のものなりと想像せられ、宇宙的發現の初めの狀態は眞實の實有にして、後の狀態は之れによりて生ぜられ、之れを比較せんか、後の狀態は非實質的、暫時的のものなりと、生命と心とは後の產物なれば、彼らよりも更に實質的なる低級の實有より進化したるものなりと。此の如き方法に於て機制說、決定論、唯物

論及び無神論を生ずるものなり。

かゝる妄想は自然淺薄なる形而上學の見地より發生し來るものなり。凡ての人格を有せざる存在物が、現象的なりとの疑を挿む者あるなし。されば物質的、機制的推論の生ずるは無論の事なり又た前件に含まれざる或る物を機制的に開發せしむることの不可能なるを疑ふことあるなし。されば全く生命なく知識なきものより、生命を得ることは易きことゝなるものなり。又た等しく開發するものは、決して暫時的に存在するものによりて定義し、若しくは言ひ顯はさるゝものにあらず。唯だ之れを成長(ヒカム)するものによりてのみ、然かすることを得るといふ事實の不審をも存するとなし。されば眞の實相は最初のもの、最も低きものなりと想像せられ、其の他の物は、悉く其の移り行く成果なりとせらる。されども深玄なる形而上學はかゝる妄想を拋棄するものなり。此の自ら運行する自然界といふ觀念は、感覺主義の人々の喜ぶところなり。さはれ批評の許し得る物的自然界の唯一の定義は、空間的現象と其の法則との總和たらざるべからず。此の自然界は始終を通じたる結果にして、此の中に原因性又た必然性あることなし。原因性は現象を生ず、然かも亦た現象の外に存在するものなり。一般自然界若しくは最も廣き意味に於ける自然界の唯一の定義は、法則に從ふべきあらゆる現象の總和及び體系なり。此の定義すら多くは吾人と相關するものなり。何となれば法則を形式的主觀的なるものとするにあらざれば法則の存在は疑はざるを得ざるべし。先づ一般法則

の體系存し後ち結果之れに挿入せられたるものにあらずして現に内在の神によりて保持せらるゝ實有の體系存在するものなり、吾人の思想を以てすれば此の體系を一方普遍的法則と他方特殊的結果とに分析することを得ると雖ども之は事實單に論理的區分に過ぎざるなり。結果が法則の後件に非ざることは、恰も法則が結果の後件に非ざるが如し。漫然たる思想より生ずる分解と意匠とは、決して實有を有りの儘に明示するものにあらず。唯だ吾人の思考に便ならしめんが爲めに形式上之れに對するものを示すのみ。されども人的立脚點より之れを見れば、法則の一般的秩序と具體的事實とを區別することは必要なることなり。

又た此處に吾人は再び經驗は具體的の事柄に絶對の權利を有することを記憶せざるべからず。自然界、科學、範疇、獨斷的直觀、其の他此の類の抽象的事物は、悉く此の經驗の標準に照らされざるべからず。思想の目的は經驗を解釋するにあり。されば經驗に矛盾する凡ての議論は斷然之れを除去せざるべからず。此の要求に應ずる性質ともいふべきものは、二種の條項を成就せざるべからず。第一そは吾人の依存し得る識別せらるべき秩序の體系ならざるべからず。第二そは人の意志よりして多少の變化を受け得るものならざるべからず。若し第一の條項なかりせばそは渾沌たる狀態にして秩序ある世界を見ること能はざるべく、而して吾人の知識は發生する時なかるべし。若し第二の條項なかりせば、自然界は吾人を容るゝ餘地なく、行爲の及ぶ限り吾人は全く世界に存すべか

らざることゝなるなり。此の如きは經驗によりて發見せられたる自然界にして、經驗中に發見せらるゝ唯一自然の界なり。其の終局原因と最高の法則とは、運動のエネルギーを、一定量に保持するといふ所謂他の『自然界』は抽象を事とし、哲學的批評の初步に暗きより生ずる一種の空想に過ぎざるなり。かゝる『自然界』は、思想も目的も將た又た意志も、吾人の身體を指導する上にすら、何らの關係を有するものにあらずとせらるゝものなり。若しそれ然らずんば連續若しくは其の他の極めて重大なるものが、干涉せらるゝ譯となればなりと。迷信は一として知識を害せざるものなし。

以上凡ての結果を綜合し、吾人は次の結論に達す。即ち物的自然界てふ自ら行動する體系あることなし。されども吾人を離れて獨立したる現象的法則の秩序なるもの存せり。之れに加ふるに此の秩序と吾人との間には伴生變化の秩序あり、各自は他者に對して意味を爲すものなり。吾人は此の秩序の中に變化を生じ又た恒久的の變形をすら生ぜしむることを得る行動を爲し得るものなり。そは永劫新しき形狀を取るものなり。然かもそは物的體系の前行狀態の結果に非ずして、人の意志に其の本源を發するものなり。物界の數多なる形狀は、之れが本源を星霧に歸すべからず。多くは其の環象に印象を刻したる人の意志に因るものなり。地球上動植物に見る大變化も、亦た氣候、降雨の變動も多くは人の意志によりて起りたるものなり。然かも自然の勢力は最も模範的の狀態に於て、人の勤勞の中に働けり。されば人の意志は決して自然の法則を破るものにあらず。唯だ法則によ

りて自らを實現するのみ。一たび執意的衝動力起るや、其の結果は直ちに法則の大組織中に入り來り、又た之れによりて移動せらる。意志するとは、吾人之れを擇ぶことを得。されども吾人が意志の結果は吾人之れを擇ぶこと能はざるべし。其の結果たるや、自然界の秩序の根據となり、之れを保持する吾人以外の勢力に依るものなり。同樣の關係は吾人自身の身體に行はるゝ法則の中に存す。吾人は此處に吾人が之れを作り、又た之れを廢すること能はざる法則を發見するものなり。されば吾人の成功は、唯だ此の法則に從ふにあり。吾人はこゝにも亦吾人の意志によりて行爲を生ぜしむ、されども吾人の意志によりて意志の結果を止むることを得ざるなり。斯く觀來れば吾人は大部吾人自らを作るものにして、又た或る程度までは、吾人は吾人の世界を作るものなり。

かくして世界は撓性のものとなり。法則の行はるゝ地、又た睿智に服事する所となるなり。そは又た理性と實際生活の要求するところの秩序と、又た吾人が此の世の生存に等しく必要なる可撓性をも有するものなり。此の世界の連續性とは、嚴密なる存在の不變をいふものにあらず。世界は現象的のものにして、自らの中に何ら連續性を有せざるなり。其の連續性は凡ての現象を同一の法則に從はしむるにあり。現象は往來す。されども凡ての現象は新舊とも法則と關係との同一組織の中に包容せらるゝなり。此の事實は世界體系の唯一、一樣、連續を構成せり。現象的立脚點よりすれば、自然界は此の種以外の一樣と連續とを有せず、又た有すること能はざるべし。而して此の連續性は

此の體系中に見るを得、若しくは此の體系と交互作用を爲し得る自由の睿智に對し、世界體系の全然可撓性なることゝ何ら矛盾することあるなし。此の體系の法則は決して神の行爲が、之れによりて拘束せらるゝが如き、獨立したる必然物に非ざるなり。そは寧ろ神が之れによりて行進し給ふ規準ともいふべきものなり。そは又た有限者の自由を妨ぐる鐵壁にも非ざるべく、そは唯だ自由を有効に使用する制約たるのみ。自然界其の物も單に一定せる行進の秩序に對するも一般的の名稱に過ぎざるなり。されば自然の出來事とは、吾人が平生見聞に慣れたる過程の此の中に發見せらるゝもの、若しくは一般法則に從ひ他の出來事と連結せしめ得る物たるなり。されども凡ての出來事は、悉く其の根源を神の活動力に發し、其の原因は又た等しく超自然的のものとなす。

かく觀來れば、神の統治の方法を考ふるの道、自ら暗示せられたり。吾人が健全なる心意と道德性とは吾人が依存し得る法則の秩序を要求するものなり。若し此の法則の秩序存せざらんか、理性も良心も安固なること能はざるべし。されども此の秩序は自然神教者の想像するが如く、嚴密自動のものに非ざるなり。吾人は固より自ら働きて、吾人の救を獲得せざるべからず。然かも神は吾人の內にありて働き給ふ。吾人は自然神教の不在なる神に代ふるに聰明なる有神論の內在の神を以てせんとす。されば事物が普通の徑路によりて行進するとするも、そは神の計畫に於て、かゝる徑路は最善の事なればなり。法則が要求するが故に事行はるゝにあらず。事の行はるゝは、神の目的

之れを要するが故なり。而して神の意志は奇跡に於けると等しく、又た最も有りふれたる事物にも現在作用するものなり。されどもこは現象的法則の維持と、全然兩立し得るものなり。何となれば人の意志は絶えず自然の法則を通じて作用し、又た之れによりて其の目的を實現するものなれば、吾人は人に可能なる事は、又た神にも可能なる事なりと信じ得るなり。されば神は人類の歴史中に顯現し、世を指導し、偉人を起し輿論の向ふところを導き、道を好むものゝ心を潔め、己が智慧に從ひて祈禱に應へ、且つ公私の罪惡を懲罰し得るなり。然かも決して一定の現象的秩序を紊亂するが如きことあることなし。神法則の中に内在すれば、法則以外の境域より來る干渉の要を見ざるなり。

自然神教的の心を持するもの或は異論を唱へていはん、かゝる結論は畢竟皮相の見解に由るのみと。吾人の知識不足なるが故に、目的の存在を考ふるなり。されども吾人若し事物の全體を知悉せんか、凡ての出來事は的確に其の前行の出來事に續き生ずることを知るべし。從つて何物も皆自然なり、目的も統治も、之れに必要なることなしと。

かゝる議論も亦た皮相の形而上學より來る反響に過ぎずして、批評はすでに之れを棄てゝ顧みざるなり。吾人若し一事件或は奇蹟すら、その凡ての前件を認知することあらんか、吾人は其の說明を發見し得ん。然かも吾人の知らざるべからざる其の『凡て』が如何なるものなるかを知るにあらずんば、此の論も亦た何の用を爲さゞるべし、吾人若し時空中に於ける凡ての有限なる前件を知ら

んか吾人は他の說明を要せざるべしとは暗默の中に存したる假定なり。且つ此等の前件は決して目的に依りて定められたる結果にあらずとの假定をも加ふるものなり。されども事實吾人は現象的にも又た形而上學的にも、前件を結果中に遡源すること能はざるは、形而上學の示すところなり。吾人は繼起續生の順序を見ることを得。然かも其の内的關係を知ること能はざるなり。自然界は單なる演繹によりて、一の事實より凡て將來の形狀を論理的に演繹し得るが如く、完全に空間的事實の中に表現せらるゝものにあらず。此の如き演繹はよし量的には之れを能くし得べしとするも、最も單純なる質的變化に對するときは、自ら破壞せられざるべからず。如何なる體系に於ても、物力は之れを見ること能はず。而して力學的變化は、絶えず純然たる運動學的演繹と背戻するところのものを發生しつゝあるなり。吾人若し隱れたる力學の法則と運動學的法則とを結合するにあらずんば、後者は絶えず連續を缺くことを示すべし。されば如何なる學說も、自然界を以て十分に、空間的事實によりて表現せられたりとするものあることなし。皆見るべからざる勢力の世界の存在を假定せざるべからず。されども形而上學は吾人に示すに、此の勢力を以て執意的容智のものとなし、凡て有限物の世界は、究極其の要素と變化の一切とを、最高の意志と目的とに歸せざるべからずとなせり。其の目的と其の意志とは、何物にても其を眞實に又た結局的に理解せん爲めには、吾人の知ることを要する『凡て』の物なりとす。吾人若し此の『凡て』を知らんか、吾人は一切の物を說明し得た

ると無論の事なり。何となれば聰明なる有神論者にして、たとひ奇蹟と雖ども無暗に行はれ、又た如何なる結果も、全體の終局原因によらずして生ずるものなりと想像するもの有らざればなり。

されば科學は堅實なる基礎を有せざるべしとて反對するものあらん、吾人は答へていはん、神の意志と目的とに優りて堅實なる基礎何くにかあると。假定を眞として論ずるにあらざれば、必然は決して基礎たること能はざるべし。何となれば變化と相容れざる必然は、宇宙を封ずべければなり。一たび變化を必然の中に承認することあらんか、吾人は終に其の何れの點にまで進むやを知ることを能はず。果ては必然其の物の如何に成り行くかをも解すること能はざるべし。無人格の見地より充足原理の法則に基づくときは、變化の必然なるものは變化を爲す必然の意なり。而してそは必然なるもの數多存し、順次際限なき思想の散亂を來たし、何ら唯一不變の原理發見せられざることを意味するに至るものなり。かくて必然其の他凡ての物は悉く一般の流轉中に引き入れらるゝなり。

されども有神論の立場よりすれば科學は實在と經驗に發現したる事件の秩序とを、合理的に尋究する學として存在するを得。然かもかゝる研究は大なる實際的の價値を有し得るものなり。かく觀るは科學の目的論的概念にして、批評的思考の結果は、益々此の見解を取るに至らしむ。科學は自らの爲めに存在するものにあらず、そは吾人の助をなさんが爲めに存するのみ。固より此の見解によりて、吾人は此等發見せられたる一樣を悟了し得ざる必然となし、若しくは此等一樣に對し、時空

に於ける無限の確實性を與ふるが如きことなき樣注意せざるべからず。此等一樣と稱するものは、實際的の原理にして、思索的のものにあらず。されば之は他の此の種原理と等しく、吾人の肯定に於て、『隣接せる事柄に對しては延長の度合を適當の範圍』にまで限らざるべからず、之れに加ふるに科學は常に表面に止まるものにして、現象の奥に進むものにあらず。原因性と內的關係の問題とは、哲學に屬するものなり。實際的科學は存在し得べく、又た價値あるものなり。然かも『科學』にして無限永刧を語り『必然の鐵鎖』を論ぜんか、そは既に科學にあらずして自らも亦た自らの問題を解せざる獨斷的形而上學と稱すべきものなり。

此等の點に關し少しく考察を運らさんか、普通人心を煩らしたる科學と宗教との人工的敵意を除去するの力少なからざるべし。又たそは宗教的と非宗教的一般の人心に殆んど公理の如く見ゆる自然と超自然の誤れる對立を排除する助ともなるべし。機制的思想に基く誤れる自然も、亦た唯だ休徵と異能とに神を認むるが如き誤れる超自然も、共に消滅するに至るべし。兩者共に自然界の機制的、本體的概念と全一といふ誤謬とに基ゐするものなり。前者に基ゐするが故に、自然界は常に神の敵手として考へられ、法則界の伸張は即ち神の領域を侵害することゝなるなり。後者に基ゐするが故に、神の存在を許すとするも、唯だ物の一般的體系を造り一般法則の維持に關はるのみと想像せらるゝなり。細事や特種の事物は、或る不定の方法によりて生起し、神の思想と目的中に嘗つて

存在せざりしものゝ如く思はる。されば特種の攝理、祈禱の應驗等の難問續發し來るなり。こは凡て皆全一といふ誤謬に基づくものなり。物の一般的體系若しくは關係のなき一般法則の體系あることなし。唯だ實有の實際の體系存するのみ。而して此の實際の體系を生ずる神の思想と作用とは、事實と同じく多數にして、又た特種ならざるべからず。部類の單純は、其の中に含まれ居る個別なる物の複雜と多數とを拒否せざるなり、而して此等特種なる事實は一として之れに對當する特種の思想と作用との存せざることあるなし。吾人は細事に於て目的を判別し得ざるべし、而して更に思索を運らさずして、之れを日常見聞に慣れたる經驗の規準に類別し得ん。されども目的何物にか存すとせば、そは又た凡ての物に存すべきなり。吾人は言辭の上の單純のために全一といふ誤謬に陷り、眞の事實を蔽ふべきにあらず。されども吾人は同時に事件に於ける目的に對し、獨斷自信の解釋を加へざる樣注意せざるべからず。吾人は目的は凡ての事物に存在すといふ事實を主張す。然かも特種なる解釋に對しては、之れを批評する權を保留するものなり。此の事に關し吾人が十分思想を發表せんか、吾人は超自然的自然なるもの、換言すれば自然界以上の神の原因性に基く自然と、自然的超自然、即ち秩序ある方法に從ひて作用する神の原因性の存在とを主張せざるべからず。かゝる見解に依れば、事物は其の原因に於ては、超自然的にして、其の發動の秩序に於ては自然的なりとす。而して所謂攝理は萬物の中に存する、神の目的と原因性とが日常見聞に慣れたる事件に於

てよりも、更に明瞭に發見せらるゝ出來事たるのみ。

傳承的神學の首將は所謂『禿頭自然論』と稱するものに對して心安からず、之れを恥かしむるに『サタンの無底界』を以てす。然かも彼は又た等しく批評的思想の忌むところなる『禿頭超自然論』の存在せざるや否やに注意せざるべからず。彼の相應はしき友、自ら不信を標榜する徒、若し凡ての宗教的現象に對し、純然たる自然的の解釋を言明することあらんか、彼は其の假定するが如き、自然の果して存在し得るや否やを明示する要あるものなり。此の質問を進め行かんか、此等兩論者（自然論者、超自然論者）たる雷の子の如き首將の惑を解くに便するもの少なからざるべし。『禿頭』なり然かも更に之れに劣れる自然論の存在するや疑なし。かゝる自然論は自然界と稱する盲目なる機制的體系の存在を假定す。そは神の思想も目的も顯はさざるものにして、單に機制の副產物に過ぎざる雜多なる偶然の事物を自らの力にて行ふものなり。されども此の空論を棄てゝ凡ての事物に對し、神の原因性を認識せんか、所謂自然は自然以外に存する目的を有する原因性の、耳目に慣れたる秩序ある發現に外ならざることを知るものなり。吾人一たび此の見解に達せんか、かの所謂自然超自然の『禿頭』は自ら消失して、吾人は吾人の及ぶ限り、凡ての事物に經驗の秩序をたどり得るに至らん。而して其の事物は自ら機制的自足の狀にあるを見るの恐れなかるべきなり。

神と世界との關係を擱筆するにあたり、一言かの古來より傳へられたる言辭の議論に及ばざるべ

からず。即ち神は內在の神か、將た超越の神かとの問題是れなり。而して又た吾人の思想は宇宙を超越することを得ずとさへいふものあるなり。吾人は先づ以上內在、超越の言辭を如何に定義するかとの問を發して、此の質問に答へんと欲す。此等の言辭を空間的に解して、內在を以て宇宙の內となし、超越を以て外となすが如きは背理といふべきなり、さりながらかゝる妄想は少からず此の問題に關する言葉の中に發見せらるゝなり。一は多の和として考ふることを得ず、又た一は多が依りて以つて作らるゝ材料とも想像すべからず。又たは一は多に依存するともいふべからず。之れに反して多は一に依存するものなり。此の意味に於て一は超越的なり。多は空間的に一の外に存せず、又た一の附屬物にもあらざるなり。されども一は常に現在する勢力にして、多は此の中に、又た之れによりて存在するものなり。此の意味に於て一は內在的なり。之れに異なる意味を以てせんか、內在超越の言辭も畢竟意義なきものに過ぎざるべし。

かの宇宙に超越するを不可なりと稱するも蓋し等しく言辭の爭たるのみ。以上定義せる意味に於て、吾人は宇宙に超越せざるべからず。これに異なる意味に於ては、吾人之れに超越する要なし。近世の思想によれば、本體性に代ふるに原因性を以てし、若しくは原因性を以て本體性を定義するに至れり。世界の原因と區別せられたる世界の本體は、畢竟想像の所產に過ぎざれば、批評に遇はゞ自ら消散するものなり。世界の體系を說明せん爲めに、吾人の要するところのものは、彼物此

物、若しくは其の他のものにあらずして、萬物之れによりて存在する遍在の作因たるなり。此の作因は如何に名稱を附するも不可なることなし。第一原因、絕對、無限、世界の原由可なり。宇宙と稱するも亦た不可なし。唯だ吾人が其の意義を心に留めおく要あるのみ。其の意義とは萬物之れによりて存在する。吾人若しくは他の有限なる物質外の力を指すものなり。吾人は此の作因と、そが凡ての宇宙的所產とを、宇宙といふ一つの思想中に結び付くることを得べし。かくするときは吾人は宇宙に超越すること能はずと斷言し得べし。されどもかくすればとて問題を明晰にするものにあらず。何となれば宇宙といふ言葉は、通例有限なる物と發現したる物との體系を示すに限られたればなり。宇宙を以て存在の總體となす以上、人の思想は宇宙の中に限らるゝものなりと敎ふるを喜ぶものあらんも、吾人は彼に其の望を禁ずるの却て冷酷なるべきを信ぜんと欲す。

內在超越の概念は、物を繪畫的に考ふる結果にして、世人普通の事なり。人には神と世界との關係を密接ならしめんとする慾望存す。而して內在とは、此の慾望に應ずる好適の言辭なり。されども此の言辭の用ひらるゝや、往々注意を缺き、凡ての物を曖昧模糊の中に、汎神論的解散の狀となさしめんとするものあり。人には又た此の如き結果を避けんとする欲望ありて、有限者に對し、無限者の存在を辨證せんとするなり。かくして超越の言辭起る。されどもかく區別するは、動もすれば空間的區別の如く、解釋する傾あるものにして、世界一たび發動したる後は、此の中より全く神

を除外する結果に陷るものなり。かゝる結果を避けんには、宜しく內在、超越といふ言辭の眞意を了解し、心をして全然空間的、量的解釋を棄てしめざるべからず。吾人の又た注意せざるべからざる點は、此の形而上學的內在は道德的意義を有せざること是れなり。そは凡ての有限なる物は神に依存すといふに過ぎず。何ら心靈的類似若しくは接近の意を含まざるなり。吾人は何ら心靈的同情なしとするも神に賴りて生きまた動きまた在ることを得るなり。此の形而上的內在を以て道德的、精神的、性格を含むものゝ如くなし、かゝる思辨の樂しき酒を以て、少しく其頭腦を熱せしむる人、世に少しとせず。されども此の萬物が一般に神に依存すといふ觀念の中には有限物の凡ての區別と、品格の種々なる等級と其の反對とを藏むるものなり。然かも道德的同情と交情とは、全く別問題に屬し、思索によりて到達すべきものにあらず。

此の內在、超越の對句によりて、明かに言ひ顯はされざるも、暗示せられたる、潛みたる思想他に存するものあり。そは神は自らの本領を發揚する爲めには、世界に憑依する要あるか、又た神は此の世界に於て十分に發現し、其の全部を盡し居るや否や、或は現實の世界を離れ、神の性の中には無限に發動し得る能力存するや否やの問題なりとす。始めの疑問に對しては、否と答へざるべからず。神の絕對性は、世界に依存すといふ觀念を容れず。又た汎神論的意義に於て、世界と相關係すとの思想に反するものなり。其の他の質問は其の意義明ならず、若し『現實の世界』といふ言葉暫

時存在する體系の意ならんか、かゝる世界は決して存在することなし。若しそが前に在り、今存し後ち在らんとする世界の意ならんか、吾人の理性は之れが答を與ふることを得ざるべし。而して實際的生活はその答を要せざるなり。されば問題は全く空漠たる抽象論と成り了るのみ。

第六章　世界の原由は倫理的なり

以上論究したる神の屬性は專ら形而上學的のものにして、唯だ理性にのみ關す。此等は宇宙及び其の原由の問題を論ずるに當り、思索的智力の肯定せざるべからざる性質のものなり。されども吾人若し此の點にのみ止まらば、吾人は眞實なる宗教的概念に達するを得ず、僅に形而上學的思索の結局に到達したるに過ぎざるべし。これにつき好適例を示すものはアリストートルにして、彼は神の觀念を以て、單に形而上學的の作用と意義とを有するものとなせり。神は原始の發動者、自ら動くもの、最初の理性として現はる。然かも愛、信賴及び禮拜の對象として現はれざるなり。

されども人心は一般に、神の形而上學的概念を以て滿足するものにあらず、寧ろ宗教的概念を要求せり。而して宗教的概念は常に第一にして、第二にはあらざりき。形而上學的思想は、宗教思想を築き立つる基礎とならずして、寧ろそが分解の結果、宗教的概念の含意として認めらるゝに至れり。人類は一般に宗教的なれども、其の形而上學的なるはさまで一般といふべからず。

されば吾人は未だ論理及び歷史の事實として、宗教の神に到達したるものにあらざることを記憶せざるべからず。そが論理學より到達し得られざるは明かなり。何となれば世界原由の此等形而上學的屬性は倫理的には空虛なるものなればなり。そは倫理的性質の可能なるを示す。然かも必然な

るものとして之れを含意せず。また歷史の事實として之れを見んか、吾人は世界の原由に最上の理性と意志とを認むるも、道德的性質を拒否する諸說の唱道せられ、又た今なほ唱道せられつゝあるを見るものなり。時にエピキュラスの神々の如く、道德的無頓着を唱ふるものあり。時には道德は純然たる人の所產にして、生物的進化の偶發に過ぎずと解するものあり。若しそれ然らんか道德は神に對して何らの意義を有せず、又た之れを人的關係以上に延長すべからざるなり。そは宇宙的法則といはんより、寧ろ心理上の出來事と稱すべけん。かゝる見解は古今の哲學中にも現はれざるにあらず。又た文學にも少からず其の反響を聞くものなり。かゝる事實は吾人に警告するに、世界の原由を以て眞に倫理的なりと肯定せんには、尙ほ多大の勞を要することを以てす。されども形而上學的見地と異なり、宗教的見地よりすれば、神の品性即ち倫理的性質に關する屬性を以て、最も重要なるものとなさざるべからず。吾人はこゝに斯く主張する理由を明にせんと欲す。

吾人若し完全なる實在者てふ心の理想を以て、宇宙の原由と認むるときは、此の問題は直ちに解決せらるべきなり。道德の性質は最高のものなり。眞、善、美なる者は、善と義とを愛す。而して唯だ此等のみ絕對の神聖と、無制的の價値とを有す。完全なる實在者にして、此等の性質を缺くか若しくは之れを具ふるも、不完全を免れずとせんか、知識的、審美的、道德的背理蓋し之れに優るものなかるべし。然れども此の理想を信ぜんとの要求が、此の如く露骨に提出せらるときは、吾人

を狐疑せしむる恐あれば、吾人は稍不明瞭なる方法に依りて、此の結果に達せざるべからず。知識の問題は、吾人が理性に明かなる宇宙を假定し、吾人の思想の法則が要求するところのものは、宇宙必ず之れに應ぜざることなしといふに當り、吾人は動もすれば惑と疑となきこと能はざるなり。かゝる大なる假定は丁寧反覆之れを攻究したる後、始めて之れを爲すべきものなり。されども吾人は個々の事物に關しては、何ら批評の煩ひなく、かゝる假定を爲すを常とす。自然界を研究し特種なる問題を論ずるに際し、吾人は此の原則を以て當然の事なりとす。之れを抽象的普通の原則として陳述するとき、始めて疑惑の念生ずるものなり。完全なる實在者に關する更に廣大なる理想に於ても亦然り。吾人は事に當り物に觸れ、隱然之れを假定するものなれども、之れを確然たる抽象的陳述として示すときは、之れを厭忌するものなり。これ普通人心の心理的制限の然らしむるところにして、吾人は深く其の事情を察せざるべからず。されども如何に此の理想が吾人の推理を限定するか、其の方法を知るは興趣あることなり。

世界原由の倫理的性質を論ぜんには、思索的演繹を試みる途なし。何となれば吾人が既に論じたるが如く、世界原由の形而上學的屬性は、倫理的には空虛なるものなればなり。されば完全なる實在者といふ吾人の理想を信ずるか、若しくは經驗に訴へて世界の原由は、倫理的原則に從ひて、動作するものなることを證せざるべからず。吾人が實際に取るところの方法は、二者を配合したるもの

ならざるべからず。

世界原由の道德的品性を證明する經驗的推論は、吾人の德性、社會の構造、歷史の進行に基くものなり。前二者は道德的創造者の存在を指示し、後者は正義を贊助するもの、從つて道德的にして、吾人のものにあらざる勢力の存在を顯示す。

吾人の德性を攻究する方法二つあり。即ち第一之れを說明を要する結果として、第二其の直接なる含意に於てする是れなり。されば第一の問題は、吾人が德性の存在に就き說明を試みんとするものなり。

最も簡易なる解釋は、此の德性を道德的作者に歸するにあり。眼を造りしものいかで視ることを得ざらんや、人に知識を與ふるものいかで自ら知るを得ざらんや。此の如く人の心に常に義を重んずる心を植ゑ付けしものいかで自ら義たるを得ざらんや。

此の推理法は極めて自然に又た直接なるものなれば、强大なる道德的興味を持し、明晰なる思想を有するものにして、之れを疑ふもの殆んどあることなし。固より造物者が道德的區別を知ることに就いては疑なかるべし。之れを疑ふは凡ての知識の本源なる者にして、然かも知らざることありといふに同じ。若し疑を挾む餘地ありとせば、神は自己の行爲に於て、此等の區別を自ら認識するや否やの一事に關するのみ。吾人若し道德的區別の眞實なると、道德的意志の最高の價値とを認むる

ものならんか、神に道德的意志の存在することを拒否すること能はざるべし。若し然かすることあらんか、最高の事物に於て神を人に劣るものとなすものなり。かゝる見解は全く吾人が合理的理想を顚倒するものにして、終には無神論に陷らざるを得ざるべし。

道德的結果より、道德的原因を推究するの結論を避けんが爲めに、巧なる說の提出せらるゝもの少しとせず。其の多くは不當の說にして、皆悉く不成功に了れり。

無睿智より睿智を演繹するの途存せざるが如く、無道德より道德を演繹するの途なし。唯だ妄に假定を逞くして所謂悪證佯爭の愚に出でざる外無しと思はる。

吾人は之れを不當の說といへり。何となれば此の議論は、大低は如何にして道德的區別を認識するに至りしかの問題を攻究するものなればなり。こは倫理學の經驗派と直覺派との間に起れる爭論にして、道德的區別の實有に關する、更に深玄なる問題には、必しも觸れたるものといふべからず。又た吾人が具體的道德律といふものは道德的の見解なると共に、又た經驗の作用なるが故に、動もすれば唯だ經驗のみ道德律の本源なりと斷定せしめんとする事實は、此の問題をして更に紛糾せしむるものなり。之れを當面の問題と關係を有する適當のものたらしめんと欲せば、吾人は道德上の觀念を以て專ら私意僻見の事となし、實際に於ては善もなく悪もなく、凡ての事は同樣に善にして讃むべきものなりとの說を唱へざるべからず。かゝる場合には神が人の習俗、僻見に心を勞すと

思はれざること勿論なり。かゝる說すら理論上には主張せられたれども、生活と良心との猛烈なる反對によりて、實際上到底之れを維持することを得ざりき。論者自らも机上の外別に之れを主張せざりしなり。彼が他人と相接するや、忽ち善悪の區別を認識せざるべからざるに至る。少くとも人の彼を遇する道に於て然りとす。されば凡ての事皆善なりとの觀念は、單に書生の空論に過ぎず、實行上には之れを許すべからざることを知るに至らん。故に人心自然の思想は、概して人の德性は、其の適當なる原由として、神の道德的品性の存在を指示するものなりと見做したり。恐らく哲學的思索も亦これに優る解釋を與ふることを得ざるべし

吾人が既に述べたるが如く、德性は其の直接なる含意に就きて研究するを得べし。多くの論者は良心其の物は、吾人之れに對して責任を負ふべく、良心も亦た之れに感應する道德的人格の存在を證明するに足るものなりといへり。此の說は文字通りには維持し難きものなり。宗教的發達と感覺との高まれる場合に於ては、責任の念此の人格的形狀を取ることあらん。かゝる場合には正義は神の意志にして、罪とは神に對する罪なり。此の說は强硬に主張せられ、又た熱心に駁せられたり。而してかゝる場合に於ける常例として、幾分の眞理は双方に存するものなり。

良心は直ちに審判者、義罰者たる神の存在を確定すとの說は、心理學を研究する者の容易に承認せざる說なり。されども最高の審判者、義罰者の確信が、主として人の德性に基くものなること

は拒むべからざることなり。正義の神聖なること、不義暴戻の罪惡なること。公義顧みられず、善と惡との結局同一に歸するが如き宇宙の、到底堪へ忍び難き性質、此等の思考は人類をして天に至高の公義、正道の存在するを信ぜしむるに至れり。文學は凡て此の見解を證明するものにして、又た此の思想は實際勢力ある議論といふべきなり。されども論理學上之れを推論と稱すべからず。宇きて何物をも假定せざる人に取りては、甲の物必しも乙の物に比して別段怪しむべきに宙に就あらず。これを信ずるとかれを信ずると。更に擇ぶところなし。吾人若し宇宙は道德的ならざるべからずと假定することなからんか、吾人は其の無道德的なるを見るも怪むに足らざるなり。吾人若し世界の原由は、吾人の利益得失に注意すべき筈なりと假定することなからんか、實際之れを顧みられざればとて驚くべき理由なきなり。凡て此の種の議論には、其の根柢に完全なる實在者を假定し、人類及び道德上の利害は最も尊重すべきものなることを假定せり。されば之そ結論に力を與ふるものなれ。公義顧みられずとするも、公義は顧みられざるべからざるものなりとの假定に依るにあらざれば、何をか證明し得べき。宇宙は何ら道德的若しくは審判的價値を有せざる、極めて醜陋粗雜なるものなりとせんに、誰かそが眞、善、美の在る所にして、又たその發現たることを知るべき。凡そ此の如き思考の眞の力の存するところは、論理學上の點にあらず、寧ろ或る見解に含蓄せられたる、悲むべく忍び難き否定を吾人に示すが爲めなり。此等の否定を拒絶するは論理的の推論に

依るにあらず、靈魂が己自らの本性を棄てゝ、悲觀失望に委することを斷乎として拒絶するにあり、されば內部の生命を豐富ならしむるものは、凡て適當なる信仰を强くするものなり『イン、メモリアム』の如き詩、成長する愛情、强き正義の念等は、多くの論理よりも信仰を助長せしむること大なり。されども議論の眞相此の如くなればとて、吾人が之れに服從することの妨げとなすべからず。吾人は前に吾人が全心理的生活の基礎は、實際此の如きものなることを十分論究したるにあらずや。

經驗的推論の第二類は人生、社會の構造及び歷史の進行より立論せらる、此等は道德的觀念と道德的目的とを顯はすとせらる。人生は道德的方面に於て、絶えず刺激を與ふる樣に構成せられたり。又た自然と經驗とは、勤勉、謹愼、遠慮、自制、正直、眞實、友愛の諸德を敎ふること甚だ勉めたりといふべし。聖書は改譯せられたるにも拘はらず、罪人の途はなほ困難なること故の如し。德は生命を與へ、罪の最後の價は死たらざるを得ず。二種の民團ありて德、不德の點を除かば、凡て同樣なりとせんか、德を重んずる民團は存續して、不德の民團滅亡せんとするは疑を容れざるところなり。よし善惡の結果時に定かならざるものありとするも、事物自然の性は、明かに義に與するものなり、こは倫理學者の一派が、道德は單に大なる實利に過ぎずと唱へしに徵するも明かなり。此の如き說の生ずるは、人生が倫理的に構造せられたる證據なり。德義の大なる實利たるは論なきことなり。實利は必ず德義なりと主張するときは、倫理學上の爭論は發生す、然かもその爭論はなほ實利

の意義如何に關す。吾人若し實利に定義して、德性の滿足を含ましむるものとせば、最早や爭論の理由存ぜざるなり。

社會の構造は道德的目的を有する道德的制度なり。個人はたとひ利己的なりとするも、道德的觀念に基く社會的秩序なかりせば、彼等は共同の生活を營むこと能はざるべし。此等の觀念存することなく、不義、暴戾、非道は法律によりて施行せられんか。社會的地震及び火山は社會を其の根柢より震動せしむるに至らん。これ天柱碎け地維欠く時なり。人も社會も正義、眞實、正直、純潔等の必要を免かるゝこと能はざるなり。猾智も權力も永久に眞理に反抗すること能はず。勢力も永く虛僞を助くること能はざるべし。惡人は大なる權力を有し常盤木の如く暫く繁茂することあるも、忽ちに亡び失せん。義人の名は永久に記憶せられ、惡人の名は亡ぶべし。萬國の民盛に惡逆、非道を行はんか其の結果は知るべきのみ。義は國を高くし罪は民を辱かしむとの敎訓ほど、歷史の明かに敎ふるものはあらざるべし。學藝、技術の旺盛なる國民も、其の罪惡流行の爲めに、或は亡び或は痛く罰せられたり。暴逆、不正、淫慾は、國民を塵芥の裡に墮落せしめ苦がく恐ろしき義罰の杯を飲むの止むなきに至らしむ、世界の原由に關して確證せられたる一の眞理は、世界の原由は義を助成するといふこと是れなり。自我的利害の衝突よりして道德の敎は發生したり。他愛主義は深く人生に其の根柢を宿し、又た動物的衝動をすら美化するものなり、動物性も我慾も道德的進步を助

長するものなり。されば人類進步の混亂場裏に於て、吾人はなほ道德的要素の此の道程中に內在することを愈々明白に識別するものなり。

此等の經驗的推論は吾人の信仰を明かにし且つ之れを强むる用を爲し得べきも、然かも其の本源にあらざるや明かなり。此等の經驗的推論は拔き取りたる事實に基けるものにて、經驗によつて得らるべき最も著しき方面を看過するものなり。これ漫に議論を事とするものゝ、此の點に關し、全く相異なる結論に達する所以なり。或る者は世界を以て神の善の充滿するところとなし、或者は唯だ强奪、害毒、失敗の存する所となせり。

此の拔き取り撰擇は特に歷史的推論に於て甚だし。此の推論に於て微かなる人類進步の潮流は發見せられたり。而して人類が覺束なくも經過する沼澤は看過せられたりき。進步の範圍は限られたり。而して人類の多數は歷史若しくは進步に對して何らの意義を有せず。唯だ動物的欲求の外には運動の主義を有せざるなり。こゝには歷史なく、進步なく、觀念なく、唯だ物的願望と獸的本能とを有するのみ。されども吾人は『人種』及び『人類』をして進步せしめ、而して個人を忘却して顧みざるが如し。此等事實の外に、吾人は信仰の本源として何物かを要すること明かなり、吾人は世界に於て智慧の存在する痕跡を發見す。然かも完全なる智慧の痕跡にあらず。又た世界に於て善の痕跡を認む。然かも完全なる善の痕跡にあらざるなり。兩者の場合に於て、吾人は吾人の發見する

有限の善と智慧とより進みて、完全なる善と智慧とに達す、是れ吾人が十全完備なる理想を信ずる力に因る。かく一たび其概念を得たる後は、吾人は再び經驗の世界に返り來りて、之れが例證を求むるなり。論理的立却點よりすれば證據として見るに足らざるものも、例證としては極めて有力なるものなり。而して此の例證は頓がて證據と見做さるゝに至るものなり。そは實に確信を生ぜしむるに相違なし。然かも推論の眞相を忘るべからず。若し人ありて世界は智慧なく害惡充つとの反對の假定說を主張せんと欲せんか、其の證據として擧ぐべきもの少からざるべし。一見すれば無意義の如く思はるゝ多くの事物や、人生に群れ來る害惡の事實は、かゝる見解を例證する好材料たるべし。固より純然たる客觀的の推論は、凡ての事實を査察して其の平均を取るにあり。此の如く事實を研究するときは、吾人は迷霧の中に閉ざされざるべからず。自然界に於ける善に對して、惡を之れと比ぶるときは、如何ぞ善を確むることを得べき。されども自然界に於ける惡に對して、善を之れと比ぶるとき、吾人は世界の根本を惡なりと主張するを許さゞるなり。自然界に於ける智慧に對し、存在の無意義なる形相、空に歸するが如き宇宙的勞作を之れと比べんか、吾人をして宇宙は最上なる智慧の所作にあらずして、寧ろ盲目的造物者(デミアージ)の所業にあらざるなきかを疑はしむ。されど如上の事實に對して、宇宙の發展止むことなき合理的奇觀を示さんか、吾人は再び疑雲に蔽はれざるべからず。其の結果として吾人は道德的に無頓着なるもの、若しくは道德的不完全なる者、若しく

は道德的善なる者、然かも吾人が此の醜陋なる宇宙に優る宇宙を造ることを禁ずる、或る必然によりて制限せられたるが如き實在者を肯定する外途なかるべし。

されども心は此の道程に上ることを好まざるなり。又た見す〳〵其の理想の破壞せらるゝことを忍ぶものにあらず。心は寧ろ理想に關する其の信仰を維持し、矛盾衝突する事實は、吾人が理解力の未だ明かにし得ざるものなれども、完全なる知見に達せんか、一致調和を見るに至るべきなりと信ぜんと欲するものなり。此の假定は認識界に於ても、道德界に於ても。共に設けらるゝものにして、論理學上よりすれば、其の根柢を有すること二者に於て異なるところなし。兩者の場合に於て吾人の論法は論理學上、强壓的のものと見るべきにあらずして、寧ろ人が本能的に自家を防衛する所爲にして、生命の破滅を救はんと欲する心よりなりといはざるべからず。此の隱然たる生の目的は、均しく至高の理と至高の義とに導かざるを得ざるなり。

此の抽象的議論によれば、吾人が世界に於ける道德的觀念に對する位置と同じきものなり。兩者の場合に於て、觀念は其の絕對の形狀に於て、經驗を超絕し、生活其物の活力に依るものなり。又た兩者の場合に於て、此等の觀念を經驗に適用することに就いては、吾人は未だ勝利を得たりといふべからず、なほ交戰の中にあり。吾人は吾人の信仰の例證を發見す。然かも適當なる證明を有するものにあらず。物界に於て時に秩序紊亂し、吾人をして之れが了解を

難しとせしむるものは、吾人をして法則と睿知との存在を疑はしむ。道德界に於ても亦た吾人は公義審判の行はるゝと共に、又た雲霧暗黑の漲るを發見するものなり。されども兩界に於て智力と道德との秩序が普遍的なりとの確信は、人類の生活が深刻なるに從ひて增進するものなり。吾人は固より信仰を喜ばざる爭論家に向つて、吾人の信仰を强ふること能はざれども、吾人の心には十分納得し得らるべし。其の他の者のためには生活と適者生存の法とによりて決せられざるべからず「

こゝに吾人は再び緒論に於て論じたる事實に遭遇す。即ち最も深遠なるものは、形式的の三段論法によりて解せらるゝものにあらず、唯だ生活其の物の經驗によりて始めて會得せらるゝものなること是れなり。人生の過程には非形式的に、又た本能的に推論せざるべからざるもの極めて多し。此等若し形式的に陳述せられんか、其の强みを失はざるを得ざるなり。人若し彼が他人に對する信賴を形式的に論證すべき場合とならんか、彼は決して成功し得ざるべし。かゝる形式的陳述は友情の信賴に對しては、餘りに冷淡に、餘りに曖昧に見ゆるものなるべし。實有に對する凡ての推論も亦た之れと同樣なり。凡て推論的確信の裏面には直觀的の分子ありて、論理は之れを十分に言ひ表はすこと能はざるなり。之れを言ひ表はすに論理學的形式を要せん。然かも論理學的形式によりて之れを解すること能はざるなり。そは推斷といはんよりも、寧ろ本能若しくは直觀なり。論理學の推論と稱せんよりも、寧ろ生命の定式によりて示したるものと稱すべきなり。

こは特に最高最深の事物を論ずるに於て然りとす。之れを論ずるに單に理解力を孤立したる官能の如く見ることなく、全人即ち人全部を論究の中に入るべきなり。理解力は唯だ經驗によりて提供せられたる材料を操縱する器械に過ぎざるなり。されば經驗にして限られ、若しくは欠くるところあらんか、何ら解釋するものなく、又た事實解釋すべき問題を有せざるべきなり。人若し審美的感情を有せざらんか、如何にその論理的巧妙を以てするも、審美學の判斷を下すに適せざるべし。かゝる人は多分ホッテントット族のビーナスは、其の美に於てミロのビーナスに劣れる證據を有せずと決定することあらん。而して彼は其の決定の明敏にして公正なるに誇ることもやあらん。此の如く道德的興味に乏しき者は、人の道德性より、有神的推論を判斷すること能はざるべし。道德性に基く推論は、よし他人には强力なる理由なりとするも、かゝる人に對しては力なく價値なきものとせざるべからず。

更に此の推論は受動的考察によりて正解し得るものにあらず「唯だ道德的行爲によりてのみ之れを理解し得るものなり。實行に伴ふときは、明かなる眞理も、一たび實行より引き離さるゝ時は直に曖昧不定となるに至るは奇異なる事實といふべきなり。されば自然界の一樣なることに關しても之れを抽象的の命題となさんか、種々學者の疑問を惹起する餘地あらん。然かも實行に於ては、たとひ理性の之れを疑ふことあらんも、事實吾人はかゝる信仰によりて左右せらるなり。吾人の最深

なる情愛も、受動的の瞬間に於ては、全く靜止し、若しくは存在せざるものゝ如く見ゆ。然かも一たび行動の必要あらんか、忽ちかゝる情愛を顯はし、人も亦た其の力を怪むことあるなし。之れと同じく倫理的創造者に對する倫理的の要求も、決して純然たる心理學的抽象の思考によりて感ぜられるゝものにあらず、唯だ人類の道德的努力奮鬪に、直接關與することによりてのみ感じ得らるべきものなり。唯だ獨りかゝる方法によりて、其の意義と奧妙とを解し得べきなり。容積によりて物を量る者には星辰のきらめく天こそ、萬物の最も大なるものにして、說明を要する唯一の物なれ。道德的の心を有する者には、人類の歷史劇は、凡ての天文學の啓示に勝りて、遙かに大なる意義を有するものなり。然かも道德的原理活きて、思索家の意志中に存在するにあらずんば、其の原理は蓋しその考察に對して何等の意義をも有せざるべし。

終りに生活其の物に根柢を有する凡ての推論に於ては、事頗る複雜にして、判明的確なる陳述を爲し難からしむるものあり。かゝる場合には式にて示されざる心の作用といふものあり、是が推論の眞實なる要點となるものにして、又た意義を其の定式に與ふるものなり。又た此の意義は字書より取り來り得るものにあらず。習俗、儀式、歷史、及び文學等の全生活を研究するによりて、始めて解せらるゝものなり。吾人若し人が此等の諸點に就いて、如何に考ふるかを知らんと欲せば、吾人は坐して論理を事とすべきにあらず。立つて世界の廣原に出で、人類の全運動と表現とを研究せざるべからず。されば吾人は人類が有神の信仰を有する限り、神の義に對する不變の信仰を固持することを判知し得べきなり。經驗は單に宇宙的理性の存在を證明するのみならず、又た宇宙的正義の存在することをも證明するものなり。

さりながら此の種の議論は、決して三段論法の法則によりて、適當に試驗せられ得るものにあらず、根柢に橫はる事實は、論理的のものにあらずして、寧ろ活ける過程なり。かの議論といふものは、潑剌たる活ける確信の運動を表明すること極めて不適當なるものなれば、そは往々先きの結論に對する言譯に過ぎざるが如き感を生ぜしむるものなり。畢竟するに、人生には互に相競ふ傾向、若しくは矛盾する人生觀あり。而して活ける人之れを批判せざるべからざるなり。如何に彼が之れを批判するかは、固より彼が論理學に依ること少からざるべきも、亦彼の人物如何に依ること多きものなり。如何なる三段論法か、果して能くイザヤと現代厭世主義の預言者とを調和し得んゞ人に信と不信とを起さしむるものは、主として其の意志と其の人物自身にして、論理の力は遙に之れに劣らざるべからず。

さあれ吾人は、たとひ神の善なることの信仰が、經驗の歸納的考察のみによりて得らるゝものにあらざることを許すとするも、未だ必しも迷境を離れ得たりと爲すべからず。何となれば經驗は神の善といふ觀念を生ずる本源となり得ざる代り、反つて此の觀念を反駁する基となるやも知るべか

らざればなり。先天的の思想を實際の經驗的事實と比較するときは、兩者相矛盾して、終には其の先天的觀念をも放棄せざるべからざるに至るものあり。これ即ち此の問題の眞相なり。

此の問題は個人の問題によりて、其の複雜の度を大ならしむるものなり。大體より言はゞ、歸納的に道德的要素が、世界の秩序中に存することを論定し得べし。吾人が既に暗示したるが如く、吾人は人生に於ける他愛的要素、人の道德性、人の我慾と殘虐も亦た道德の進步發達に資せらるゝの道、吾人が副道德的生活に於ける貴重なる道德的補助力、惡德非行に對し、多くの忘れ難き應報等の存在を指摘し得るものなり。吾人若し此等全體の事を考察するときは、問題は明確なるが如し。されどもこは未だ問題を盡したるものにあらず。個人は全體の如くに存在するものにあらず。そは其の具體的生活と重荷とを有す。義と善とは社會全體として、若しくは時代を重ぬるときに之れを識別し得ることありとするも、個人の運命に關しては、なほ疑雲迷霧に閉されつゝあるものなり。かゝる場合に於ける全體的樂天敎は、單に事物は遠方より見て善しと思はるゝといふに過ぎず。然かも近いて事物の眞相を窺はんか、事物は實に慘澹たる觀あることを看過したるものなり。全般よりすれば、義は一般人々の交涉の間に行はるゝと信ぜらるゝも、個人の運命、具體的生活の詳細に立ち至らんか、吾人は再び疑惑に陷らざるを得ざるなり。かく論じ來れば、此の神の善と義との問題に於ける必須の要素たる樂天と厭世との問題に到達するものなり。根本的善にあらざる義なるも

のは空にして價値なき物なり。

以上論ずるところによれば、吾人は此の問題に對し、決定的證明を與へ得る希望を有せざることを明白となれり。されども兩派暗中互に少からざる爭を爲したれば、此の問題に對し多少の解說を試みる要を見るものなり。吾人が發し得る唯一の問は、經驗が神の善と義とを證明するや否やにあらずして、經驗は此の信仰と兩立し得るや否やにありとなす。樂天家の主張するところは、吾人は凡ての事實の前に、吾人の信仰を固持し得といふにあり。而して厭世家の說は、吾人が樂天的信仰は生活及び自然界の暗黑なる事實と對照すれば、慥に亡びざるを得ざるべしと斷言するにあり。

樂天敎と厭世敎

樂天敎と厭世敎とに二種の型あり、一は經驗の事實に基き、他は吾人が一般の世界觀より推論するもの是れなり。前者は之れを歸納的若しくは經驗的、後者は推論的樂天敎及び厭世敎と稱すべし。爭論は普通前者に始まりて後者に終るものなり。有神論者は努めて人生の善なることを示さんとす。然かも經驗が暗黑有毒なる側面に接觸するときは、神と來世の信仰とに避難せんとする傾きあるものなり。かくして彼の樂天敎は、推論的となり、其の距離延長せらる。之れに反して厭世家は人生を以て全然善なるものと考ふることなく、害惡の混入したるものとせり。かゝる悲觀の說を持

するにも拘はらず、快濶の心、時に發動するを覺ゆるものあり。而して彼は己が事物一般の所說に基き、人生の永久的價値を有し得ざることを示さんとするものなり。かくして其の厭世敎も亦た推論となり、其の距離延長せらるゝなり。議論の明晰を保たんが爲めに、吾人は歸納的と推論的見地とを區別し置かざるべからず。吾人は吾人が有神的希望によりて、長く樂天家たり得ることあらん。之れに反して無神的失望の爲めに厭世家となる事もあるなり。されども吾人は經驗より始めざるべからざるなり。

此の議論は普通抽象的、空論的の論法によりて其の眞相を蔽はれたり。完全なる力と完全なる善との總念は、抽象に混入せられ、遂に神の力と神の愛との傳承的二律背反の說は說き出されたり。其の主張によれば、神は全能なるとゝもに全く善なること能はずとなせり。

此の論爭は抽象的なる限りは、全然明瞭なることなり。されども一たび之れを實際の世界に適用すときは、疑問となるにあらざれば、殆んど曖昧模糊、事實論ずるに足らざるに至ると考へらるゝなり。さりながら抽象的の措定(シーシス)としては、樂天家も之れを承認せり。而して神は世界に存在する惡に對しては、之れを如何ともする能はずと唱へ、其の善を保護せんと努めたり。こはライブニッツ以來普通行はるゝ神義論(ジオドシー)なりとす。一般の法則によりて支配する政治の中には、自然個人には困難の存するあるべきを含意するものなり。されども世界は全體として善なるのみならず、又た此の上

の善を望むこと能はざるべし。理性の永劫なる眞理と、論理的結果の不可抗なる力とは、現在の世界以外の世界たるを許さざるものなり。固より特種なる狀態には、或は改良を加ふる餘地存するものあらん。されども何物も自ら若しくは唯だ獨り自らのみのために存するものにあらず。凡ての物は他の物と無限の關係と含意とに結びつけらるゝものなり。吾人如上の事を考察するときは何物も之れを變改する能はざるが如し。若し强ひて之れを爲さんか、蓋し事物の狀をして反つて劣惡ならしむるに過ぎざるべし。

若し此の見解にして證明し得らるゝものとすれば、問題の解決を易からしむるものなり。少くとも神の責任問題に關して然りとす。害惡の存在せざることが、永劫必然の眞理と相矛盾することなるを知らば、吾人は世に害惡の存在することを忍ばざるべからず。不幸にして此の主張は、唯だ道德上の害惡にのみ明かに之れを適用し得るものなり。そは道德界は自由の體系を含意するとすればなり。されども現在の程度に於ける、苦痛の存せざること若しくは全然其の存在せざることが、或る永劫の眞理に牴觸するものなりとの問題は、不幸にして斷言すること能はざるなり。吾人が知り得る唯一の必然、即ち合理的必然の點よりすれば、世界の全秩序は善にもあれ惡にもあれ、純然たる偶然的のものなり。齒痛、神經痛、疫病、毒齒、毒液及び寄生虫等が終には如何なる利益をもたらし來ることあるにもせよ、永劫の眞理は其の存在に對して批難を免れざるべく、若しくは其の不

在によりて、永刧の眞理を害すとする證明を有せざるなり。此等の事實は凡て偶然の記號を有し必然の記號を有せざるなり。

傳承的樂天家は、其の出來得べきだけ最善なる體系といふ彼の總念によりて、更に問題を混亂せしめたり。神若し最善以下の事をなしゝとせんか、神の善は完全ならざるべし。是れ考ふべからざることなりと論ぜり。こは固より抽象的の議論たるを失はず。されば此の體系は出來得べきだけ最善なるものなり。されどもこれも亦た矛盾にあらずんば空妄なる抽象に過ぎざるなり。之れを量的に考ふれば、出來得る限りの最大數といふ總念と等しく矛盾たらざるを得ざるなり。元來如何なる有限なる體系に就いても次の如き問を發し得るものなり。何故に此の如くにして他の狀態にあらざるか。何故に今の時にして彼の時にあらざるか。何故にこの平面にして他の平面にあらざるか。何故に此の量にして之れより多からず、又た少からざるかと、吾人若し質的に之れを考ふるもなほ量的引照を免がるゝこと能はざるべし。其の他吾人は僅少なる存在者を有する宇宙は、生命と幸福との充滿する、他の宇宙と擇ぶところなしといふことを得ん。

出來得るだけ最善なる體系といふ總念中に存する他の不明瞭なる點は、善は手段的に善たり得る事實にあり。かゝる場合に於ては善はそが仕事に適應するが故に善たるなり。器械は其の目的に適應する時始めて完全なりといふべし。かゝる意味に於て抽象的に考ふる時は、極めて不完全なる體系も、そが爲すべき働に對して適應間然することなきものなり、缺點すら方便としては完全たり得ることあり。例へば眼の如し。視覺の器械に比すれば、(望遠鏡、顯微鏡の如く)正當なる眼力の不足も眼より見れば反つて其の不足こそ便利なるものなれ、之れと等しく事物の秩序も、それ自らを目的として見るときは、極めて不完全なるものも、人類の品性と智力とを發展せしむる手段としては、完全なるものあるなり。

此の如く出來得る限り最善の體系といふ文句は、元來不明瞭なる性質のものにして、其の意義を明かにせんか、蓋し矛盾に陷らざるべからざるなり。發して以て有益なる質問は、唯だ現存の體系は創造の善と兩立し得るや否やといふにあり。

樂天家は此の議論に於て抽象に陷りたり。然かも厭世家は更に甚だしきものあり。少年討論家の愛用する抽象的空論的二律背反に加ふるに、厭世家は害惡の問題を抽象的、ヒステリー的に論ずるを常とす。特に彼は苦痛は、抽象的に空無なること、そは感覺性を有する存在者によりて感ぜられたる時にのみ、始めて存在するものなることを忘るゝ傾きあり。彼は過去、現在、未來に於ける凡ての存在者の苦痛を堆積し、己の視覺より凡ての幸福を隱蔽するほどに、之れを大ならしむ。恰も永く病院に病を養へる者が、世界のあらゆる病苦を一つの思想に積み重ね、深く之れを感じて、世には何處にも無病健康なるものなしと論決するに異ならざるなり。其の迷誤は此に止まらず、厭世家

自ら其の位置と境遇とによりて感ずる苦痛を、他人に歸するに至る。彼は其の目擊する貧困、無學醜惡の狀に於て、如何に自ら感ずるならんかと自問し、凡て生ける人類は全く不幸困苦の中にあらざるべからずと論結するものなり。かくして彼は書齋に於ける博愛家の迷誤と稱せらるゝものに陷る。かく憐憫を受けたる人々は、彼らの見地よりすれば、普通可なり愉快なる生活を爲しつゝあるものなり。彼らの困難は供給の缺乏にあらずして、要求の缺乏にありとす。厭世的迷誤は苦痛の總計を抽象の人に歸するに至りて、其の極に達せり。かくして深甚なる修辭上に於ける苦痛の條件は凡て備はれり。されども吾人若し議論の進歩を見んと欲せば、抽象的苦痛の總計と、之れを苦しむ抽象的の人とを棄てゝ活ける人を請ひ來りて、其の證明を求めざるべからず。抽象的の人は哀痛すること能はず、獨り具體的意識ある人のみ之れを感ずることを得べし。世界が惡しゝといふは、其の構造が必然的に人生をして、苦痛にして生存するの價なからしむるが如きものなりとの意ならざるべからず。さらば此の問題は單に人生の價値如何といふことゝなるものなり。此の問題は人各々自ら之れを決せざるべからず。議論の無益なるや明かなり。此の如き空論に耽るは恰も己が午餐を愉快に食したりしや否やを決せんが爲めに、之れを學說に訴ふるものと何ぞ擇ぶところあらん。

樂天家は曰く世界は善なりと。厭世家は曰く世界は惡なりと。然れども世界の全體と特に其の結局とを知悉するにあらざれば、最後の判斷を之れに下すこと能はざるべし。吾人がかゝる知識を有

し得ざることは調査によりて明かなり。人類の世界に於ても、死後の生命に關する知識の缺乏は吾人をして堅確なる判斷を下すに十分なる材料を供せず。基督敎の見解によれば、人類の歷史は主として見えざる世界にありとす。人類の大多數は此の見えざる世界に存す。世界の現住民は、見えざる世界に逝きし多數の者に比ぶれば、眞に一握に過ぎざるべし。吾人は生れしと見る間に死し、新しき時代は之れに代るなり。吾人の世界は植物を植ゑつける冷き器物の如し。一たび芽を出さば直ちに他の土地に植ゑかへらるゝなり。他に例を取らんかそは唯だ現在の學生のみを有し、其の卒業生に就いては何等知ることなき大學の如し。是れすべて人生の未成、未熟的なる性質を帶ぶる所以なり。されば此の世に於いては、事物が完成の域に達し得べきや否や、蓋し疑ひなき能はず。何となれば時代々々は多くの場合に於て事を始め得るも、其の時代に於て十分成就すること能はざればなり。こゝは如何にありとするも、吾人は幕のかなたに如何なる事の行はれつゝあるか、卒業生は何を爲しつゝあるかを知るにあらざれば、人類の歷史の價値に對して、何等の判斷を附し得ざるや明かなり。されば周到なる論理は、こは管轄外の事なりとて、此の訴訟を却下するならん。然れども訴訟人が其の爭を固執し審判を要求して止まざるが故に、吾人は更に少しく之れを査察せざるべからず。

思索界に於ける現代思想の風潮は、樂天家に與するものゝ如し。これ議論の優勝といはんよりも

寧ろ主として快活の反動に歸すべきなり。進歩、發達、改良等の現代流行の總念は、樂天家をして萬物は次第に善きに進まんとすと主張するに便ならしむ。宇宙は未だ完からず唯だ其の創開の時期にあるのみ。されば未だ完全したる樂天說を見ること能はずとするも、少くとも判然たる改善論(メリオリズム)を見る。而して改善論は樂天說に外ならざるなり。故に彼れ厭世家を促がして進化の大法の意義を明かにせよ、之れを明解するまでは、妄に口を開くなかれといふ。厭世家はいふ。何故に世界の事物は直ちに完全なる狀態に造られざりしかと。然れども現代流行の思想はこれを陳腐なる思想の殘餘のみとなし、敢て之れに應ずるものあるとなし。若し進化にして生命の法則たらんか、現在は將來に比して不完全に、又た過去は現在に比して不完全に見えざるべからざるは理の當然の事なりとす。

かゝる思想の方法流行する中は、此の議論贊成せらるゝならん。然かもかゝる進歩は、何故にかばかりの勞働、奮鬪、苦痛の價を拂はずして、成就せらるゝこと能はざるかとの問に、答へたりといふべからず。此は世界は唯だ其の結果によりて判斷すべきものにして、然かも結果は善なりと假定すといふに外ならず。進化は害惡に對する創造者の責任を減ずべしとの想像は、實に幼稚なる思想といはざるべからず。此の思想は世界には偶然若くは自決の分子ありて、自己の力を以て新なる方向に轉ずることを得べしとの假定に基くものなり。然れども機制的の體系にはかゝる分子なし。其の創立者は凡て結果に對して責任を有するものなり。

進化的神義論に對し、極めて朴素的の著述は行はれたり。世界を以て良善なる神の創造なりとの事に、耳を傾けざる或る著者に取りては、進化哲學は其の困難を取り除くものなり　若し兩者の場合に於て、約束の虹光將來に懸かるものあらんか、吾人は何故に世界は徐々に造り出されたるが故に、一時の命令によりて創造せられたるものよりも罪少しとするかの理由を見ること能はざるなり。二種の理由は此の總念の基をなす。其の一は前既に述べたるが如く、こは體系自らの責任にして、然かも此の體系は其の最善を爲しつゝありとの想像にして、他は吾人が無人格の秩序より發出すると考ふるところの害惡は、目的より出づる人格の蒙らしむる苦痛なりと考ふるよりも、吾人を激せしむること少きが如く感ずる心理的事實是れなり。無人格より發出すとする害惡に對しては、吾人之れを忍び難しとすることあらん、されども人格より生ずるものとの考は、吾人の怒を激發せしむ。少くとも吾人を驅りて注意と反省とを促さしむ。されば有神的見地よりして厭世家たりしものも、進化論の立場によりて、樂天家となり得たる奇異なる事實を見るものなり。さりながら快活は望ましき事にして、人は不規則なる論法に由るも之れに達するを喜ぶものなり。

此の世界が善なりとの議論が、全く人間の利益を以て、最高のものなりとする假定に基けるものなる一點も注意する價値ありといふべし。善き若しくは惡しき世界とは何ぞや。明白にいはざれども、吾人の利害を以て此の善惡の標準となすものなり。吾人の利益を保存するところの世界は善にし

て、之れを顧みざるものは惡なりとなす。されども、何を以て世界は吾人の爲めに存在するを知るか。世界には吾人の知り得ざる目的ありて、世界は完全に之れを成就しつゝあるにあらざるか。吾人の不平は、蟻が宇宙を以て、己が巣窟たらしめんが爲めに造られたるものなりと假定し。蟻酸の利益と必要物とに不便なることあるを以て、世界を非難するが如き類にあらずや。厭世教は心が宇宙を測るは己を以てせざるべからずとする事實の最も著るしき適例なり。

此の問題の抽象的、先天的議論は明かに無用の事なり。出來得るだけの最善の世界、存在者の無限の差等、無窮なる存在界に於て、凡て有限なる者は、必然に從屬的なること等を省察することは、理論的にも將た實際的にも益なきことなり。吾人の論じ得る問題は、經驗の事にして、議論にあらざるなり。そは人生の價値と、世界に於ける吾人の生活が、吾人に與ふる印象、寧ろ神の良善、人生の價値に關し、人類の經驗が與へたる印象の問題なり。此の事柄は論理學若しくは言葉の證明によりて解決せらるべきものにあらず。社會、政治、倫理、宗教上、偉大なる歷史的表現の中に示されたる人生の觀察によりてのみ、之れを解決し得べきなり。かゝる事柄に關しては、人の證言のみを信ずる能はざるべし。何となれば思想自らも往々余りに曖昧にして其の意を捉へ難く、其の思想を言ひ表はし難ければなり。而して又た特に價値の評價は、行爲によりて示さるゝものにして、言葉によらざればなり。行爲が人の思想を顯示するは、言葉に優るものあるなり。されば言葉は行

爲、文學、制度、宗教及び人類歷史の全般に見る人生の清純、眞實なる表現と比較して、之れを試驗せざるべからず。

吾人が既に述べたるが如く、吾人の發し得る唯一の質問は、吾人が經驗する事實は、神の善と義とに對する信仰と兩立するや否やにあり。而して此の解決は學理を以て爲し得べきものにあらざるなり。吾人は十八世紀に行はれたる厭世教と樂天教とを以て既に陳腐に屬せりと思ふ。彼らの發したる問題は、彼らが發したりしまゝの形式に於ては解決し得らるべくもあらず。吾人は出來得べくば、樂天的の意味、換言すれば人生の價値と望ましきことを維持する意味に於て、經驗を解釋する謙遜なる務に自らを限らざるべからず。凡ての物は何故に今の有樣より異ならざるか、或は凡ての物は何故に今の狀態にあるか等の問題は、吾人之れを敬して默すべし。是れ蓋し最も至當の事ならん。吾人若し經驗の體系に於て、其の結構の道德的慈仁的なることを示し得んか、吾人の目的に對しては十分なりといふべし。吾人は今暫く問題を人類の世界に限ることゝせん。

此の見地よりして、吾人は神の義と善とに對する吾人の信仰を義とする言葉を有するものなり。吾人は最早や之れを證明せんことを努めず、唯だ之れを例解せんとするのみ、有神的推論が一般に吾人の有神的信仰の本源にあらずして、唯だ吾人が既に有する信仰に對する理由なるが如く、樂天教の議論も亦た吾人が樂天的信仰の本源にあらずして、唯だ既に有する信仰に對する理由たるに過

ぎざるなり。そは主として本能的確信に對する困難の點を除去する用を爲すものなり。更に吾人の記憶せざるべからざる點は、有神論者の多くは神との關係が、人格的、宗教的たること也、而して此の事實は深く吾人が議論の方法を改むるものなること是れなり。凡て吾人が一身上の關係を見るに、吾人若し略ぼ信賴するに足るとの理由を有せんか、たとひ之れを理解し得ざることあるにもせよ、なほ之れを信賴し、其の理解し難き點に對しては、其の闡明せらるゝ時を待つものなり。吾人は人を其の行爲によりて判斷す。然かも亦其行爲を其の人によりて判定す。社會の依つて以て立つところの個人的信賴の行爲も、敢て歸納と離るゝにあらざれども、單に詳細の事共を數へ立つることによりて、之れをかち得るものにあらず。此の中には歸納的論理以上のものを有するなり。人と相互の關係に於ける法則たる此の信賴は、又た等しく神と人との關係にも適用し得らるゝものなり。吾人が神に對する信賴も、亦た敢て歸納を離るゝにあらざれども、歸納によつて解し得べからざる個人的信賴の要素を含むものとす。神の義と善とに對し、十分の理由を有すと考へ、吾人は出來得るだけ其の理由をたどり行き、餘は神に信賴する事を爲す。宗教的關係といふも亦た此の信賴を含意す。されば懷疑若しくは批評は自ら不敬たらざるを得ず。吾人若し宇宙の複雜非常にして、其の延長も亦た無限なるを考へ、人生の短くして知識の貧きを思はゞ、吾人が造物者を批評せんとする考、神は何故に一層吾人の心と嗜好とに適する世界を造らざりしか、何故に善良なる趣味に適

はざるか、特に何故に人の批評に向つて十分なる說明を加へざるか、神は此等の問を辯明せざるべからざるが如く考ふるは、殆んど奇怪の觀なくんばあるべからず。吾人若し信仰に達せんと欲せば、個人の純然たる歸納に依るの外更に簡單にして確實なる道の存するや明白なり。吾人は人類の大なる歷史的產物に注意せざるべからず。決して論理的思索を事とすべきにあらざるなり。

吾人は如上の條件を附したれば、是れより進んで經驗を研究せんと欲す。固より一見すれば世界は恐ろしく驚くべき光景を呈せるものなり。知識の增進に伴ひ、全知全能にして完全に善なる神といふ吾人が有神的前提は、此の種の世界より全く異なりたる世界を期待せしむるに至る。無機界の奇異なる狀態、下等なる生物中、多くの者の一見無意味なること、爪、牙、毒液等の一定の設備を見る事は暫く措き、全く人類の世界に問題を限るとも、吾人は往々驚くべきものあるを發見するものなり。苦痛と死とに到るところに其の威を振ひ、哀痛の叫びは絕えず天に上るなり。此等の固定したる害惡の要素以外、飢饉、疫病、常に人を亡ぼさんと欲して人類の踵を追ふ。而して亦た遺傳、及び社會的利害共同の法は、共に長く人類の滅亡を助くるものなり。之れに加ふるに人類の歷史は自ら恐るべき光景を現はすものなり。多くの人種間戰爭、離反、殺戮絕ゆることなし。如何に殺戮の波濤は疊々として地上に漂ひしか。吾人若し人類の歷史をたどらんか、混亂、流血、衝突の騷擾は、常に吾人の身邊に存するものなり。又た人種の多くは墮落したるものにして、其の最善なるも

のも亦た到達し得たるところの德性も貧弱ならざるはなし。人々は如何に迷誤、暗黑の中に彷徨したりしよ。如何に彼らの心は無識と迷信との爲めに暗まされしよ。如何に彼らは多大の必要物によりて逃れ難き幽閉の苦に遭遇したりしよ。多くの場合に於て、吾人は歷史を有せざるなり。唯だ目的なく結果なき漂流を見るのみ。思想なく、先見なく、進歩なく、單に動物的欲求と本能とを有するのみ。是れすら多くは滿足せられざるなり、――以上は嘗て此の地上に生存したる人類、若しくは現に今日生存する人類多數の歷史を概括したるものなり。固より宇宙的倫理は（もしかゝるものありとすれば）人類の倫理と積極的にも消極的にも十分その類を異にするものなれば、別に吾人の思索を費す要あるものなり。何んとなれば、積極的に言はんか、人類若し苦痛を與ふる點に於て、宇宙を摸倣するものあらんか、彼は即時に殺さるゝに至らん。消極的に言はんか、人若し一見吾人の苦痛と悲哀とに無頓着なるが如き宇宙の態度に學ぶところあらんか、其の人は怪物として呪はるゝに至らん。

こは敢て其罪惡を訴ふるものにあらず、たゞ一般に承認せられたる事實を列擧したるのみ。されば解釋の點に於て、獨り意見の同じからざるものあるを見る。吾人は之れを論ずるに當り先づ人との關係上世界は何の爲めに存するかに就いて或る種の概念を作らざるべからず。若し人生に於ける唯一の善は、唯だ受動的感覺性の愉快なる感情に止まり、人生の目的は、單に之れを生ぜしむるに

すぎずとするときは、世界は實に望なき失敗といはざるべからず。されども主要永刧の善は　能動的性質のものにして、自覺ある發展、成長する自立心、進歩、征服、旨くエネルギーを發して、生の膨脹を感ずること等にありとせば、事柄は自ら別種の狀を呈するものなり。人生の目的は道義の發展にありて、人は主として其の責任を有し、自ら勉めて其の救を全うすべきものなることを思はゞ、特に其の然るを知る。かゝる見解に依るときは、世界の善は手段的のものにして、其れ自ら全備したる完全にあらざるなり。そは眞實なる人類の發展の條件を供へ、人をして無限に向上改善せしむるに資するものたらざるべからず。

之れに加ふるに如上列擧したる事實に對し、吾人が抱く恐怖、驚愕の多くは、不當なる擬人說に基くものなり。神の其の自然界に於ける作業に對する關係は、人に對するものと自ら異なるものあれば、宇宙の倫理は人間の倫理と相比すべからず、其の似たる點は、唯だ一般の原理のみ。死は生の法則にして、生死の力は吾人の手中にあらずといふ單純なる事實は、具體的に人をして大差あるものとならしむ。リスボンの地震、若しくはギャルベストンの洪水若しくはモンペレーの爆發等人をして容易に神經病たらしむるものも、日常の出來事と何ら異なる理論的の意義を有するにあらず。前者は想像を印刻し、弱き神經を激動す。是れ其の差のみ。

此の見地よりすれば、世界の秩序は、あながち暗黑なるものにあらず。物質界だけの不完全も、

人類發展の手段として見るときは、亦た完全なりといふべきなり。人類に障碍を與ふることなく、人は何らの豫考と努力とを用ひずして、凡ての要求を即時に供給せらるゝが如き世界あらんか、それは人類を痲痺せしめ。到底堪へ得べからしむ。かゝる世界は人をして意志の活力を働かしむることなく、又た自己實現の地を供ふることなし。勤勞の大なる命令は吾人本來の怠惰心のみ、之れを厭ふものなり。人の現に在るが如きこそ、人類進歩の最上の條件なれ。吾人が正當に爲し得る唯一の要求は、吾人の勤勞が適當なる報酬を以て應ぜらるゝ世界なりとす。物質界は概して善良なる奴僕なり。されども吾人若し怠惰、無識の爲めに、物質界をして吾人の主人となさんか、吾人が罪人の道の困難なるを發見する蓋し至當の事なり。

何處にても人は己に對して責任あるものなり。物性と人生とを問はず、吾人は出來合ひの物に接せざるなり。吾人の接するは將成態にあり。吾人は之れを引き出ださざるべからず。五穀は成長せんことを待てり。されども吾人若し勤勉、愼重、豫考を缺くものあらんか、雜草、荆棘、自ら我物顔に繁生することあらん。吾人は望むもの、從ふものを導き、望まざるもの、從はざるものを、曳きずり行く法則の下にあるものなり。其れ自ら惡なりとする生命の法則あることなし。法則が禍を生ずるか、將た又た福をもたらすかは、全く人自身に依るものなり。かれ若し自然の膝を枕として安らかなる眠を貪らんことを求めんか、彼は自然の爲めに荒々しく振り落さるゝならん。然かもか

れ活動することあらんか、自然は彼の用を爲すことを見ん。吾人が全體の微弱と智力の制限すら自由を訓練して、自制力を養はしむる世界に於ては　蓋し賢き設備なり。といふべきなり大人の膂力に加ふるに、品性と智力とを具へたる、若しくは野蠻人の身體に、開化したる肉の活力を與へたる嬰兒ありと考へ見よ。訓練なき力の危險なることは、僅少の無政府者の例を見るも明なり。

人の苦む重なる不幸は、己自らなしたることの結果ならざるはなし。吾人が肉體の苦痛すら醫家の說によれば、多くは吾人が生活の不自然、不適當なるに基因するものなり。人の身體は其の人か若しくは祖先から、生理の法則を破りたるものにあらざれば、決して人を苦むる機械とはならざるなり。かの恐るべき不幸の富源たる遺傳の法則と雖ども、亦た其の自然の作用に至りては、最も美はしくして、又た仁慈的のものたるなり。若し人善にして賢ならんか、吾人は如何なる人界の法則と雖ども、決して之れと相離るゝことを望まざるべし。此の法則を變じて呪詛となさしむるものは蓋し人の罪なり。而して現在のまゝなるも法則は人に害を與ふるよりも、寧ろ利益を與ふること多し。然らずんば社會は到底改善すること能はざるべし。社會の一致、利害共同の法も亦た然り。利益の普遍的社會、是れ神の理想にして、此の外別に價値を付すべき道德の世界存することなし、絕對的自己依存（セルフデペンデンス）は愛の生活をして不可能ならしめ、社會を驅りて元子的自我主義に陷らしむ。されども利害共同（ソリダリテー）の含意たる交互依存は、其の生活をして又た禍の多產なる母たらしむべし。愚、非理、

我慾の世界に於ては、遺傳性と利害共同性とは、相結びて人類の滅亡を助くるものなり。されど是等兩者は愛と智慧との世界に於ては、如何なる作用をか爲す。これ明なることなり。

他の害惡も往々其の結果によりて之れを辯護せられたり。人は其の性。唯だ奮鬪、苦痛によりてのみ完全に進み得るものなり、德はたゞ誘惑に抵抗することによりてのみ堅確なるを得。力は障碍抗抵によりて成長し得るなり。高尙なる品性の發現は主として悲哀の土地に生ずるものなり。吾人若し人類の歷史よりして、苦痛によりて完成せられたる、英雄的、聖徒的品性を取り除くことあらんか、歷史中の高貴なるもの、恭敬すべきもの、悉く去るに至らん。吾人若し文學よりして、凡て悲哀喪失の生じたるものを取り去ることあらんか、文學のインスピレーションは長へに亡ぶべし。死の現在すら、他の方法によりて得られ難き、嚴肅なるやさしさと威嚴とを人の感情に附するものなり。人の本性現在のまゝなる以上は、其の生存の一般的條件の何れをも變化するときは、不幸之れに伴はざることなし。暗黑なる事物も亦た道德的秩序の中に、其の用を爲すものなり。人生の短きと、不定とすら、なほ之れを棄つるときは、個人が道德上の損失を免かれざるべし。然かも社會に取りては、人生の短時は、進步發展の大條件たらざるべからず。宇宙の批評家が、宇宙の秩序に向つて提出する、多數の一般的改善と稱するものも、其の實人類の最善なる發達に向つては、反つて不幸の事たらざるなきを知るに至るは、蓋し彼に取りて敎訓たらざるべからず。さらば萬物の秩

序は其の始めに見ゆるよりも、熟考之れを久しくするときは、更に多大の智慧を發見するものなり。世界の秩序は其の住民たる人類に向つて不適當なるものにあらざるなり。

人生の悲憂は世の體系に依ること極めて少く、人の罪と愚とに依ること極めて多きことは、世人が寸毫の遲疑なく、其の全心を盡して神と義とを愛し、又た己の如く其の隣人を愛し始むることを爲さんか、忽ち世に變化の起るべきを思はゞ、自ら明白なるべし。此の一變化は直ちに吾人が凡ての悲憂を改善せしめ、又た速に其の多くを除き去るものなり。現に罪惡制止の爲めに費されたる社會のエネルギーも、之れを社會の積極的奉仕の爲に用ふることを得べし。既に人類の罪惡と暗愚とを除去する爲めに、費消せられたる凡ての富も努力も亦た之れを公益の用に供するを得ん。罪と愚一たび取り除かれんか、靈魂の最惡なる不幸は、直ちに終りを告ぐるに至るべし。多くの疾病亦た消失し、生產の力も增進して止まるところなかるべし。之れに加ふるに世界一般の勤勞を以てせんか、人類の富は優に各員をして、其の生存の條件を充たすに足るものとならしむること速なるべし。此等の狀態の下に、知識は自ら進步し、知識の寶は、速に世界一般の所有となるべきなり。人の自然界制御も限なく擴張せらるゝものあらん。之れに準じて疾病と苦痛とは除去せらるべし。自然界は人の用に服すべし、人は營々たる賤役を脫して、己が高尙なる性情を開發する鍛鍊を得るに至るべし。美術、工藝盛なるべし。地に充つる潛在の美は現はれて。此の地球は蓋し神の樂園と化する

に至らん。

人間の社會に於ては、其の結果は、更に幸福なるものあらん。善意廣く世界に行はれんか、平和は世界に充つべし。よし爭の起ることありとするも、そはかの金言 愛人の〻により平定せらるべし。凡ての嫉妬、忿怒、怨恨、惡口、惡念等起ることなかるべし。悲哀の根源たる凡ての虚榮、輕侮、傲慢、不遜等は其の跡を絶つべし。財産若しくは能力の不平均も人をして不平を生ぜしむることなかるべし。何んとなれば强者は喜で弱者に仕へ、其の荷を負ふべければなり。吾人が地上の運命に附着する悲憂は、同情によりて輕減せられ、又た出來得る限り分配せらるべし。貧はたとひ世に存在することありとするも、そが罪惡、暗愚の結果にあらざりしとせば、決して人を窘窮するが如きことなかるべし。又た人力の達する限り滿足し得られざる要求の存することあるなし。誠實、善意のたゞよふ世界の大氣中に於ては、友情榮え萬人の靈は友愛の歡喜によりて膨脹せん。

かゝる終局を來たす妨碍となるべきものは、人自身に外ならず。物質上固有的に之れを制御し難きもの存することなし。困難の點は全然人の性質に存するものなり。

人の性は現にあるが如きものなれば、人々の關係に於て、事物一般の秩序にかゝるもの存することは、蓋し正當の理由あるなり。道德的の仁愛と智慧との存在は明白なり。固より吾人は人は何故に現にあるが如きものなるか、何故に他の方法は用ゐられざるか等の問を發し得。されども、かゝ

る問は吾人既に之れを不問に附すべきものなることを覺ること久し。吾人の望み得るところのものは、唯だ現在の世界に道德的、仁愛原理の存在を示すにあり。

此の問題は吾人が既に述べたるが如く、先天的見地より解決し得るものにあらず。又た無限の力と善との抽象的範疇を混合することによりて、論明し得らるゝものにあらざるなり。純然たる形式的方法によるの外、吾人は如何なるものが、善と兩立し得べきかを決すること能はず、又た善其の物の性質すら之れを定むることを得ざるなり。生活の價値は唯だ人生に於てのみ表示せらる。而して人生に於てのみ其の價値を試驗し得るものなり。危險、過勞、試練等は無限の仁愛と兩立し得ざるべし。無限の仁愛は吾人自ら何らの努力を用ふることなく、直ちに吾人を幸福ならしむるを得んとは、これ抽象的思考に過ぎざるものなり。かゝる總念こそ此の問題の空論的議論に伴ふものと見ゆれ。こは恰も人生に於ける唯一の善は、受動的快樂にして、唯一の惡は、受動的苦痛なるが如し。人生其の物は凡て此等に對する答なり。人生の主要永續的の善は受動的感覺に存せずして、活動することにあり。單に苦痛の現存することが、人の信仰を動搖したる例は、極めて少なかるべし。之れが爲めに動搖したる者は、蓋し飽食暖衣の思辨家のみ。苦痛の臥榻は往々豪奢の枕、宴席の首座よりも反つて愛の信賴を顯はす場所たることあるものなり。知識を增すは憂患を增す。されども吾人は憂患を避けんが爲めに、知識を棄つるものにあ

らず。愛情も亦た之れに伴ふ鋭敏頑強なる苦痛を有すれども、之れが爲めに誰か愛情を顧みざるものやある。此等の事實に對しては論理學も、器械的心理學も、之れを如何ともすること能はざるべし。唯だ人生のみ之れを啓示し、其の矛盾を除くを得べし。吾人が既に論じたるが如く、道德的、能動的なる人に向つては、世界の善とは之れをして、どこまでも善化せしめ得る事、又は世界が眞實なる人類發展の條件を供給する事にありとなす。かゝる心を持し、世界の進歩の爲めに力を盡す者は概して樂天的の氣分を有するものなり。されども勢力を失ひ意氣沈衰して能動的にあらず、寧ろ受動的の生活を爲すもの、其の理想は副道德的にして、自ら責任を逃れて他に依らんとするものは、多く厭世家となる傾きあり。之れを略言すれば、理論的樂天教と厭世教とは空論的抽象にして、之れを論じて益あるものにあらず。完全したる樂天教も、結局の厭世教も、共に知識の證明を得るものにあらず。されども經驗は、どこまでも改善の出來得べきものなることを示す。而して吾人は暫く此の事を以て滿足せざるべからず。實際的樂天教と厭世教とは、理解に屬すといはんよりも、寧ろ意志に屬するものなり、樂天教は健康、希望、勢力を意味し厭世教は疾病、失望、死亡を意味す。

かくして學理的辯論の無益なること、更に明白となれり。世界を義とすることは、思索によらずして、寧ろ經驗に、書齋に於てせずして、寧ろ人生に於てすべきなり。吾人若し人生が吾人に希望と向上心とを與へ、吾人が生活の價値十分なりと覺るところあらんか、議論は既に終局したりといはざるべからず。吾人若し吾人が最も喜び忘るゝことを好まざるものは、吾人が爲し來りし奮鬪、征服犧牲なりとせんか、最早や此等の正當なるを辯明する要なきものなり。吾人は自ら此等を擇びたるものにあらず、されども吾人は如何にするも此等に由りて到達し得たる、更に深玄にして豐富なる生命を棄てんとするものにあらざるなり。されば吾人は議論の事にあらずして、經驗に屬するものなり。强ひて好まざる心に向ひ結論を下し得るものにあらず。人は各自ら人生の善なる事を覺り得るなり。されば病者は自ら醫せざるべからず。如上一般的の考察は、全體としての體系に向つて少からざる光明を放つものなれども、決して個人の運命の複雜なると、歷史の暗黑面とを說明し得るものにあらず。こゝに吾人の視力は盡きぬべし。吾人は信仰の力に賴り、吾人の生命は吾人を造りし者の手にある事を信じ、たとひ理解し能はざることも、なほ信賴し得るものなることを覺るべし。

吾人が現在爲し得るところのものは、唯だ此の實際的解決あるのみ。是れ以上を現在吾人は了解すること能はざるべし。學校及び家族の訓練に育つ兒童は、未だ人の到るところに遭遇する、抑壓强制の理由を解し得るほど、人生の價値に對する經驗を有せざるなり。唯だ成熟したる生涯のみ、之れを明かにする事を得るなり。それまでは彼は往々行路難く、人生慈悲を缺くが如く遇せらる。吾人は又たとひ說明を付するも、之れを理解し得るだけ、心理的、道德的の發達を感じ得ざりしならん。吾人は感覺的の善を過重す。而して吾人の高尙なる事物に附する見識も亦た未熟貧弱なる

を思はゞ、蓋し前論の適切なるを感ずべきなり。認識界に於ては、實際的の確信は極めて主要なるものにして、之れを推理に委すべきにあらず。かゝる睿智の自發的作用は、吾人の爲めに固定せられたるなり。道德界に於ても同樣の事實を見る。理論を離れて、人生は其の構造と傾向とに於て、樂天的たるものなり。今や上流思索界に著しく行はれたる、厭世的思潮の衰退を見るものあるは、特に此の言の明かなるを示すものなり。快活の心は、復歸し來りぬ。職業的厭世敎は急に一種の病的文學者の手に移らんとせり。然かも世は彼等を重視することなく、彼らも亦た自ら眞面目なるにあらざるなり。

之れなくんば人生の進行を見ること能はざる、實際的樂天敎を維持せんが爲めに、神はその大なる設備として、人類に消滅し難き希望心を賦與し給へり。希望の存する間は、如何なる事にも之れに堪ふることを得べし。然り大膽に新生の精力を以て、之れに堪ふることを得べきなり。約束の虹光將來に懸るものあらんか、人生は全體として、常に樂天の性質を有するものなり。こは實際的樂天敎なり。されどもこも亦た時に干滿なきにあらざるべし。豫言者詩篇の作者及び多數の聖徒らは神の道德的善と人生の價値とに就いて、厭世的疑惑を抱くことの如何なるものなるかを熟知したりき。約日記の著者は容易なる樂天家に非ず。詩七十三篇の作者は惡人の繁榮を見て心を惑はしたりき。當時起りし事柄は今もなほ起るなり。實際的樂天敎すらなほ爭論の中にありて、其の成立を見

るに至るは、蓋し奮鬪の後にあるべし。されども個人の心中漸次增進し、社會に於ても一代は一代より强力となりつゝある信仰は、吾人は父なる神の手中にあり。彼は今迄吾人を神の前に導き給ひたれば、其の始め給へる聖業を成就し給ふべしと信賴し得といふにあり。此の信仰の存せん限り、たとひ人生は兇猛の狀を呈し、不安の經驗を持することありとするも、なほ人は讃美を唱へ祈禱を爲しテイデウムス(讃榮の歌)を頌し得るなり。若し此の信仰にして永刼に亡び失せんか、これ樂天敎の一切終焉にして、唯だ無思慮にして且つ無精なるあきらめあるのみ。地の堪ふべく、又た義とせらるべきは、天と關係を有すればなり。若し約束の地ありて、人は永久に生くるものならんか、彼は此の約束の地に入るの準備を終るまで、荒野に漂泊するを妨げざるべし。されども之れを終局として考へんか、此の見るべき人生を義とすること能はざるべし。

此の如く樂天敎は經驗により、又た經驗と共に始まるものなれども、一般の世界觀に到達し、學理的推論的となるにあらざれば、決して完成することを得ざるべし。此の方面は次章に於て論ずるところあるべし。かく言へばとて、學理が世界の善なることを證明すといふ意にあらず。唯だ事物の一般的見解を持するにあらざる限り、吾人が生得の樂天敎は、自ら矛盾に陷らざるを得ざるべしといふにあり。人類界の事は、是れにて筆を擱くべし。動物界に於ては害惡の問題は、唯だ苦痛の問題なり。こゝには人格の感ずる苦痛は、全く缺けたるが如し。人格の苦痛は事物の前後を考へ、

過去の記憶をたどり、將來の運命を慮るより起るもの、且つ又た吾人が情感及び道德性の含意より生ずるものなり。若し此等の物取り去られんか、吾人自ら生起せしめたるものを除きたる後は、吾人が物質的の苦痛は蓋し僅少なるべきなり。若し以上のもの下等動物の如く取り除かるゝことあらんか、問題は動物的擬人說の主張するが如く、しかく暗黑なるものにあらざるなり、動物の苦痛の範圍及び性質は、吾人の之れを知らざるところなり。多くの事實によりて之れを考ふるに、高等なる有機體にても、動物は人の如く苦痛を感ずるものにあらず。而して單純なる體に至りては、吾人は何ら知るところあるなし。されば此の問題は吾人の論究し得べき範圍にあらざること明白なり。動物の虐待は、吾人の爲めにも、動物の爲めにも、許すべきことにあらざるなり。吾人の安全と便益との要する點以上、吾人は之れに干涉することあらざるべし。されども吾人は動物的生活全體の、形態と法則との理論的說明を要する實際的の利害を有せざるなり。吾人は全く其の內的意義を覺り得ざるが故に、始めは動物的擬人說に自失し、終には動物的創造の多くの方面に顯はれたる惡趣味に驚くに至らん。

人類の經驗の總結果は、神の道德的良善に對する信仰是れなり。此の問題は抽象的、空論的のものにあらず、具體的歷史的のものなり。此の信仰と之れに含意する凡てのものは、人性の變化せざる限り、經驗の矛盾に陷らざる以上永久に存在すべきものなり。事實が論理的、抽象的に考へらるゝときは、此の信仰を强ひもせず、又た禁じもせざるなり。事實は之れを許容して幾分か其の例證を示す。而して心は事物の作用の根柢に存する完全なる理想を信ずる心を抱きて、最高なるものに達せざれば、滿足せざるなり。

思索的神學は、世界の原由に關し、形而上學及び倫理學上の屬性を列擧せり。仁愛(ラブ)、慈悲(マーシー)、正義、公正、聖潔等は特別なる屬性として列擧せられ、其の關係を定むるに就きて、精妙なる議論を爲せるもの少からず。吾人は此等の問題に論及する要を感ぜず。神の道德性は凡ての宗敎に取りて聖なる愛として、十分に決定せられたり。こは思索的の目的に對して十分ならん。此等の要素は共に相離るべからざるものなり。聖なきの愛は倫理的內容なくして、唯だ幸福を希ふことなり。而して愛なきの聖は、生命なき否定に過ぎざるべし。愛は定義を要せず。されども聖は愛の如くに明かならず。消極的にいへば、聖は惡の凡ての傾向と、惡を喜ぶ心絕えてなきことを含意するものなり。積極的にいへば、善を好みて、之れに獻身することをいふ。惡を知るは固より神の思想に存せざるべからず。されども完全なる聖は神的感覺性、惡に應ずることなく、又た其の意志は之れを實現することと決してあることなきを含意す。又た積極的に道德的完全の理想は神に於て實現せられたりとの意なり。而して此の理想は愛を以て其の主要なる要素の一となすことを含むものなり。

此の理想の如何なるものなるかを判定せんと欲せば、吾人は唯だ德性の直接なる證明に依るの外

なし。法律は良心の命に依るにあらざれば、何事をも此の理想の永刧なる一部分となすこと能はず。良心の禁ずるところは、何物も之れに加入することを得ざるべし。單純なる感覺性の無道德的善惡と、倫理的生活の道德的善惡とを區別するは、實に此の良心の聲なり。

道德的實在者として神の絶對性を主張するに當り、道德的生活の性質上一の奇異なる困難を發生す。此の生活は社會を含意するものなれば、純然たる單純孤立のものには、何らの意義なきものなり。對象なき愛は空無なり。公義といふことは、人と人との間にあらざれば意義を生ぜざるべし、慈悲は多數と集團とによらざれば、成立すること能はざるなり。故に神を單獨のものとなすときは彼は將成的に道德的實在者なりといはざるべからず。將成的より現實的なる道德的存在に移らんとするには、無限者は其の對象を有せざるべからず。而して適當なる道德的存在者に移らんとするには、適當なる對象を有せざるべからざるなり。

此の困難を免がるゝ方法は多く提出せられたり。第一吾人は絶對にして純粹なる神は、唯だ形而上學的のものにして、道德的のものにあらずとすることなり。即ち此の見解によれば、神の道德性は其の宇宙的作用に附隨する偶發性にして、其の本來の固有性に屬せざるものとす。神の形而上學的存在は絶對なり。されども其の道德的生命は創造に對立するものにして、之れを離るゝときは、何らの意義を有せず、又た成立すること能はざるべしと。

此の見解の直接なる含意は、爰に第二說として顯はる。即ち神は其の倫理的生命に於いては、絶對にして自足ならず。其の倫理的將成力を實現し、眞實なる道德的存在に達せんが爲めには、有限者の存在を要するものなりと。然れども此の說は神をして自己の完全なる實現の爲めには世界に依存せしむるか若しくは神が其の十全なる自主に達するの手段として、宇宙的作用を必要とするものなり。何れにしても道德は形而上學に從屬するものなり。神の適當なる絶對性は拒否せられ、汎神的傾向著しく顯はるゝなり。第三の見解は神の唯一の中に人格的生命の集團を設けて、此の困難を免かれんとす。かくして倫理的生活の條件は神の性其れ自らの中にありて、神の倫理的絶對性も亦た確實にせらるゝものなり。然れども此の唯一の中、如何にして集團が成立し得るかは、最も深玄なる秘密の一たらざるべからず。唯一の解決法として暗示せらるゝ說は、必然的創造といふ總念にあり。此の如き創造は無始無終にして、神の性に依るものにして其の意志に依るものにあらずと。吾人若し神の性は、常に又た永遠に、己以外の存在を生ずるものとせば、此等他の存在は數に於てこそ神と異なるものなれ、實は神の固有なる含蓄なりと謂はざるべからず。これ數的複雜と有機的單一とを併せ有するものなり。されば汎神說は神と世界とは數に於て殊別なりと雖ども、有機的本質的には一なりと主張するものなり。かゝる概念は一と多、唯一と複雜等の如き、形式上の觀念を言語上に於て混用すればとて、之れを疑ひ得らるべきものにあらず。形式の上よりいへば、此等の

觀念は相反對せり。されども實有は吾人の形式的思想を以て理解し能はざるところの、區分し難き總合法を以て、吾人の形式的反對を一致せしむる道を有す。

されども有限なるものゝ現實界を神の中に推し入るゝときは、思索的の禍害と破船とに遭遇すべしとは、吾人の既に論明したる所なり。此に至りては神が必然的なる創造に依りて、永久に己と交はる集團を設けたりとの說を棄つるか、然らざれば有限界を離れて神と同じく永遠なるペルソナを以て、其の對象となすかの外、他に道なかるべし。若しこは多神教なりといはんか、多神教は交互獨立なる多數の實在者を含意すと答へざるべからず。若し此等依存的實在者は創造せられたるものなりとせば、彼らの存在は神の意志に依らずして、神の性に依るものなりと答へざるべからず。故に彼らは神と共に存在し、神は彼らなくして存在すること能はざるべし。汎神說に於て世界は神なりといはゞ、吾人は此等のペルソナは數に於て異なれども、體に於ては一にして、又た神なりといはざるを得ざるなり。若し創造といふ語が意志を含意する嫌ありとせば、吾人は古代神學的思索の極めて精妙なる用語を以て、之れに代へ、永遠の生出若しくは發出といふを得べし、此等の用語は問題に對し、何ら光明を放つものにあらずと雖ども、神の性の永久的含意と神の意志の自由なる決定とを識別する用を爲すものなり。

吾人は終りの項をしてかゝる思想を明かにせしめんとせり。されども吾人は未だ其の最善の說明

に達せざるや明かなり。吾人が絕對意志の概念と本體學的必然の拒否とは、神の意志と神の性とに關し、吾人の用語の含意するが如き判明なる區別を許さざるものなり。此の思想をして調和を保たしむる唯一の道は、唯だ之れによりて、神は神たり、又た世界體系は存在することを得る、神の二重の意志を判別するにあり。前者は絕對の意志として神の性によりて限定せられ、又た神と共に永遠なるものなり。第四章の終りに於て論述したるが如く、絕對の意志は常に現存して、神の必然に實有と確實とを與へざるべからず。されば神の存在は他の實現したる事物と等しく、永久に神の意志に根ざすものなり。若し此の意志を存せざらんか、神の必然は力なきものなり。意志は神性の論理を作り、若しくは變更するものにあらず、之れを實現するものなり。此の論理若し神が倫理的絕對の神たらんが爲めには、己に對し適當なる他者と友とを有せざるべからずといふにあらば、神の神たる意志はかの他者が、永遠の出生者なることを含意するものなり。此の意志は世界の之れに存在するところの意志と、全く別なるものなり。後者は神の自己實現に對して、何ら必要なるものにあらざるなり。

神の倫理的絕對を考察するにより、吾人は基督教の三位一體說を暗示するところの思索にまで導かれたり。多くの思想が唯一と三一との觀念が、形式上相反對するものなるにも拘らず、なほ此の說を固持する所以のものは、蓋し其の故なきにあらざるなり。されども吾人は此の問題を論ずる義

務なし。何れにしても哲學的思索は判然たることを斷言せずして、唯だ難點の所在を示し、其の解釋の道を暗示し得るのみ。

第七章　有神論と生活

以上說き來れるところは、主として人を沈思熟考する存在者として見たるものなり。然れども人は唯だ沈思熟考するのみならず、又た沈思熟考が其の主要なる作用にもあらず人は又た意志なり行爲なり。されば彼は勤むべきもの、實現すべき目的、生活の標準とすべき觀念を有せざるべからず。實際の生活に於ては、有神的信仰の重力の中心は、其の信仰と此等の目的及び理想との關係にあり。神なくんば吾人の理想は崩壞し、之れに到達するの望なく、活動の原動力は全く亡びんとす。されば神の存在は思索的理想的理由によりて認定せらるゝものにあらず實際的生活の必要に迫られて認定せらるゝものなり。此の種の推論は屢々神の存在に對する道德的推論と稱せらる。されども實際的議論といふこそ更に適當なれ。

此の推論が證明的の價値を有せざること明なり。これ本來かくあらざるべからずと思ふところのものより、實際あるところのものに論及し、吾人が主觀的利害より客觀的事實を結論せんとするものにて論理學上決して確實なるものにあらず。此の推論の確實となるは、吾人の本性が要求するところのものは、實有が何とかして之を供給せざるべからずとの明白なる又は暗々の假定に基くものなり。されば此の概念を主として說明せる者の一人たるカントは明に其の思索的勢力を拒否したり

き。之れに反して彼れは思索によりては證明も反證も共に成立すること能はざるべきを明示したりとなせり。此の思索的理性の均衡に於て、實際的の利害は一方に重味を加ふることを得べきなり。故に吾人の爲し得るところは、有神論は吾人が道德の要求にして、實際的生活に必要なることを示すに止まるものなり。此の主觀的必要を認めて、客觀的事實の證明となし得るや否やは、人各自から之れを決せざるべからず。吾人が心理的生活の全體が、かゝる假定に其の根據を据うるものなることは、吾人が既に十分論明したるところなり。

道德的推論は屢々說き誤まられたり。そは時として證據なりとして提出せられ、容易に反對批評家の攻擊を受くるものとなれり。何となれば道德的推論が證據となるは唯だ有神的信仰の基礎によりてのみ吾人の利益は保存せられ、吾人が最高の生命は維持せらるといふ意味に於てのみ。斯の如き推論は問題の實際的關係を示すが故に、實際には重要なれどもそは決して證據にあらざるなり。又た此の推論は時に快樂說の色彩を帶びて、甚しき利己主義に陷れる例少からず。之に比ぶれば無神論と雖もなほ道德的に優越せる所あるが如し。故に吾人は無神論有神論と實際的生活との關係を攻究せざるべからず。固より質問は單に理論の含意に關するものにして、理論家の性格に關するものにあらざるなり。吾人が論究の題目は、有神論と無神論とにして決して有神論者無神論者にあらざるなり。吾人は先づ無神論より始むることゝせん。無神的議論の大部分は、無神論は世界及び生活の

問題を解釋するに積極的適當なることを示すといふよりも寧ろ有神的議論の過失を詮議するにありとは、吾人が既に之れを緒論に於て指摘したるが如し。認識論を論ずる際、吾人は更に無神論は常識に基く出來合せの認識論を用ゐ、敢て此の問題の複雜なるを覺らざるが如く、特に自からの立場よりして認識の說を立てざることを論述したりき。同樣の朴素的行爲は此處にも再現せられたり。無神論は概して普通の道德及び實際の原理を當然の事として借り來り、殆ど自からかゝる原理を說くことに留意したることなし。然れども學說は其れ自からの基礎の上に建立せられざるべからず、無神論は有神論を輕蔑する點に於て成功したり。然れとも自己積極の說を立つるに於て甚だしく失敗したるものなり。そは盛に科學を談ず。然かも自から認識論を說かざるべからざるに至るや、其の結果は科學にあらずして、とりとめもなき無識に終るものなり。無神論の强さは自からの不信仰に對し、積極的の推擧を爲すにあらず、寧ろ信仰に對する批評を下すにあり。吾人は今之れを示さんと欲す。無神論は凡て道德的理論を破壞するものなりとて、直ちに之れを拋棄するも敢て不都合なりといふべからず。然れども之れにては眞の難點を示すに足らざるべし。之れを爲さんには問題を分解し稍之れを詳論するの要あるものなり。

實際的倫理說は數多の殊別なる要素を含む。即ち正邪に關する形式的道德上の判斷と、實現すべき目的、若しくは理想と、服從すべき命令と是れなり。第一類には吾人は唯だ行爲の道德的形式を

有するのみ。第二類には行爲の具體的內容を見。第三類には前二者の內容を義務として示されたり。傳來の倫理學が常に陷るところの缺點は、此等要素が齊しく必要なることを覺り得ざりしことにあり。其の結果は一方に偏したる無數の學說を生じ、互に相爭ひて混亂の狀を極めたり。判斷の體系、義務の體系等の如き此等要素と無神論との關係果して如何、吾人は爰に先づ後者より論ぜんとす。

無神論と義務

此の問題を論ずるには、吾人は無神論に含まれたる自動論を攻究せざるべからず。此の含意恐らくは嚴正なる意味に於て必然ならんと雖も、凡ての思想を亡滅せしむる意見を承認するにあらざれば、之れを免るゝことを得ざるべし。されば無神論と自動論とは普通合同せられたり。故に吾人は義務の體系を構成せんとするの際、直ちに自動物は如何にして義務を有し得るかの問に接するものなり。此の問に對して何らの答なし。之に對する傳來の遁辭は、道德上の判斷は審美上の斷定の如く、自由の問題と關係なきものなり。美と醜とを決定するに當り吾人は自由若しくは必然を思考の中に入れざるが如く、正邪を定むるに於ても亦然りと。倫理學をして唯だ道德的判斷の體系たらしめば、此の說或は一理なきにあらざるべし。然れども倫理學は又た服從せらるべき命令の體系にして、柔順は之れを善行とし、不柔順は之れを非行となす。而して此等の總念に對しては自由の概念は絕對に必要なるものなり。

同一の遁辭は時に又た他の形態を取るものなり、曰く吾人は人を判斷するに其の現狀を以てし、少しも其の如何にして此に至りしかを問はざるなり。必然によりても醜なるものは何處までも醜なり。必然によるも惡なるものは何處までも惡なり。故に人物に關する吾人の判斷は、其の人の自由を信ずるによりて左右せらるゝとなすは誤解なりと。

之に對する答は左の如し。吾人は人を判斷するに二重の標準を有す。即ち完全と實力と是れなりと。不完全に關する判斷は前者に依り、有罪無罪、善行、非行に關する判斷は後者に依るものなり。然れども人如何に不完全なるにもせよ、其の實力に超過するものに向つて責任を有すること能はざるべし。されば凡て無神論の立場よりすれば、自動體は如何にして義務を有し得るかの問依然としてなほ存せざるべからず。

此の問題は無神的倫理學を合理のものとなすに甚だ重大なるものなるが故に、普遍的必然說若しくは之れに附隨したる諸說は、凡て之を研究せられたきものなり。若し此の問題にして答へられなば次に起るべき問題の順序は、若し必然の力、反對の方向に傾かんか、自動體如何にして義務を行ひ得るか。若し必然の力、義務と同一の道を取らんか、自動體如何にして義務を行はざるべきとい

ふにあり。他の興味ある重大なる問題は、數多の自動體の間に於ける道德上の差異は何を理由となすかにあり。然れども多分此等の問題は、凡て宇宙的必然說の非論理的なると處理し難きとにより て、迅速なる答を得難きものなれば、吾人は進で道德的判斷の體系としての倫理學と無神論との關係を攻究するを可なりとせん。

無神論と道德上の判斷

正邪に關する吾人の形式的判斷は、直接有神的信仰に依るものにあらず。此の點に於て道德上の推論は最も多く說き誤られたり。公義、眞實、慈悲、感恩の責任は、如何にして神の存在に依るものとするを得べきか。吾人は如何なる面目を以て、無神論は此等の道德をして、現在よりも緩漫ならしむるものなりといふを得ん。此等は絕對なる道德的直觀なり。何人の之を顧みざるも、此等の道德はなほ依然として正當なるを失はず。此等にして有神論に依るとするも、そは慥に間接ならざるべからず。此の點に於て吾人が道德上の判斷は、吾人が眞僞に對する判斷に同じ。有神論を拒否するも不正を正になすこと能はざるは、恰も僞を眞となすこと能はざるが如し。

此の議論は極めて明瞭なるものゝ如し。堅固なる有神論者はたとひ論理によりて最早己が有神的信仰を維持すること能はざるに至るも、彼は其れによりて、凡て眞實名譽の責任を破るも自由なり

と考ふることを得ざるべし。議論は凡て之れを以て終るが如きも、更に考一考せんか、吾人の思想が最高の理性、神聖なる意志たる神の概念に達せざれば、合理的及び道德的判斷の場合に於て、等しく吾人の天性は自家撞着に陷るか、若しくは懷疑說に對して能く自からを防衞すること能はざるに至るべし。至上の理性にして聖き意志たる神の概念に達せんか、理性と良心とは、吾人の中に於ける心理的事實たるより一轉して、普遍なる宇宙の法則となり其の主上權確立せらるべし。されども若し吾人の理性と良心とが人間と地上の發現に限らるゝ間は、そは詮ずるところ唯だ吾人が思考の方法に過ぎずして、個人の私見たるを免がれざるべしとの懷疑說の攻擊を避くるの暇なかるべし。かゝる結論が絕えず無神的前提より論結せられ、又た屢々無神論者自から之を爲せるは歷史の示すところなり。正邪の區別明ならんか、普遍的自動力を以て眞なりとする故に、之を實際の生活に適用すること能はざるの事實によりて更に如上の結論を强めたるものなり。故に無神論を唱ふる倫理學者は、普通正邪、善惡の區別を以て功利及び非功利の區別と同一視するに至れり。此の區別の存在するは明白の事なり。而して漸次吾人は正と邪とは此の異名同物なることを記憶するに至る。猶豫なく吾人は之を用ゐて吾人が使用する用語を增加し同時に道德上の區別を保存せんと欲す。

されば道德的責任の絕對性を固守する無神論者を見るは眞に滿足すべきことなり。然れども此の種の數は多しとすべからず。又た其の主張も論理的の見識といはんよりも寧ろ其の性情の善良なる

を示すものたり。彼らは必然說の中に含まれたる懷疑說を攻究せざるべからず。而して必然說によれば凡て意見なるものは、そが存續する限り決して其の間に善惡の區別あるべからず。有神論も亦た無神論を生じたる同一必然の力によりて生み出されたる結果なることを記憶せざるべからず。彼らは更に又た無神的前提は、屢倫理的懷疑說と、又た廣く厭世家の間に行はるゝ倫理的不可知說(無頓着主義にはあらざれども)とを辯明せんが爲めに提出せられたる、歷史的の事實を攻究せざるべからず。若し論理的推論可能にして又た必要ならんか、如上の事實は研究せられざるべからず。而して此等の結果を避くるの道も亦た指示せられざるべからず。無神論をして生活の合理的學說たらしめんと欲せば、自己の前提と原理との上に之を辯明せざるべからず。通例利己主義に基く學說上より利己的行爲を責むるといふは滑稽の事なり。如何なる信仰と行爲と雖も凡ての見解と行爲とを以て必然の事なりとする學說の上より、之れを非難することは如何にも奇異の觀なきを得ず。凡ての信仰は不可知なる原因より生じたりといはるゝとき、たとひ此の不可知なる原因任意に之れを生じたりとせんも有神的信仰は虛僞なりといふを聽くに及びては吾人は實に惑なきこと能はざるなり。されば論理的推論を出來得るものと想像し、無神論は此の問題に關し眞實なる論法によりて、自己の理論を確立せざるべからざる特種の責任を擔ふものなり。有神論も亦た其の難點を有するや無論の事なり。されども吾人は之を放擲する前に、無神論の果して有神論に劣るなきや否やを確證せざるべ

からず。されども吾人が已に論述したるが如く、不幸にして無神論は主として有神論を罵るに務め、思想と生活に對する千古の問題に關し、自己の解釋を下すべき明白なる責務を忘却したるものなり。されば首尾貫徹したる無神論は、一般思索上の懷疑說を防ぐこと能はざるが如く、又た倫理上の懷疑說に對して自から防衞すること能はざるべし。然れども吾人は此の點を言ひ張るの要なし。何となればたとひ此等形式的原理が、全く疑を容るゝの餘地なきとせらるゝも、吾人は未だ完全なる道德的體系の條件を具備したりといふこと能はざればなり。かゝる體系は啻だ形式的原理のみならず、其の適用を制約する倫理外の概念を要するものなり、其の中最も重要なるものは、吾人の世界觀、人生觀、人生の意義及び歸趣に關する吾人の概念、又た人格と其の本來の神聖なることに關する觀念の如きものなり。此等の要素は良心の直觀を表示するものにあらず、事物に對する吾人が一般の學說より生ずるものなり。此等の要素中變更を生ずるものあらんか、たとひ形式的原理は同一なるも實行に於て之に伴ふ變化を來さゞることなし。

例證數ふるに遑あらず。慈悲の法則は性情として絕對なるものならん。されども其の實際の適用は、一方に於て深慮ある用心と、他方に於ては慈悲を受くる者の性質と意義とに關する吾人の概念によりて制限せらる。此の事は吾人が牛馬を遇する場合に顯はるゝものなり。吾人は大體彼らに對し善意を有す。されどもそは動物的生涯の意義と價値とに關する吾人の概念によりて制約せらるゝ

ものなり。されば吾人は吾人の安全健康若しくは便益を先として、動物の利益を後となすも些の憚るところなきものなり。獨り人類に對する高尚なる概念のみ、人權の神聖なるを覺らしめ、人をして之れが爲めに努力奮勉せしむるの熱心を惹起せしむ。かの黄金律（愛人の道）も亦た生命の眞義尊嚴に關する概念によりて制約せられざるべからず。然らざれば酒を嗜み食を貪るものゝ世界に於ても完全に遵奉せらるべければなり。個人と社會との關係に就き。プラトーの概念を懷くときは、小兒殺戮に關するプラトーの說は正當なるが如し。人と其の歸趣とに關するアリストートルの說を以てすれば、アリストートルの奴隷說は全く維持し得べきものなり。古代の人種的概念の立場よりすれば、之に附隨する人種的道德も亦た全然許すべきものなり。人格の神聖てふ概念なかりせば社會の救濟は博愛、慈善の法によりて、怠惰無賴の徒を改良せんよりも、寧ろ彼らを殺戮するを以て便法となすも未だ知るべからず。吾人は屢々世人が巧に基督敎の慈善事業は、弱者、病人及び貧困の徒を憐れむを以て誤てるものなりと推量するを聽けり。彼らは適者生存の便法を行はしむるは啻に安價なるのみならず、又たつまりは優良にして且つ更に人道的なりとせり。推量は實に轉じて肯定となれり。基督敎が實際弱者不具者を憐れむは、罪科以上更に有害なるものなりと。其の『奴隷の道德』は卑賤、微弱なる者の階級が、自から社會組織の中より取り除かるゝことを免がれんが爲めに案出したる偉大なる謀反なりとせられたり。抽象的道德の原理若しくは人類に對する抽象的熱心の

立脚地よりすれば如上の思ひつき（弱者滅亡の）は、社會の罪人及び無用の徒に對しては、正當なる方法にあらずとする理由の、擧げ難きものあらん。反對は抽象的なる道德性の中に存するものにあらず、寧ろ吾人が基督敎より學び得たる人類の哲學に依れるものなり。基督敎は新なる道德上の原理を敎ふるによらず、唯だ神と人と其の相互の關係に就き新なる概念を啓示するによりて其の偉大なる道德上の革命を行へり。凡ての人を共通の父なる神の子となすにより、基督敎は古代の人種的概念と之に基く野蠻的道德とを一掃したりき。凡ての人を永生の嗣子となすにより、基督敎は人をして決して失ふこと能はず、又た無視すること能はざる神聖なるものとならしめたり。道德の法則をして神聖なる意志の發表なりとなし、基督敎は此の道德法を無人格なる抽象の地より離れしめ、之れに最後の勝利を保證したりき。道德の原理は蓋し以前と同じからん。されども道德の實行は其の異なること甚だ大なり。蓋し地の上に天を有するときは地も亦た自からその體面を一變するものなり。

此等の例證によりて之を考ふれば、人生を實際に指導することは唯だ形式的倫理の原理を知るの要あるのみならず、又た其の適用の制約たる倫理以外の概念を知るの要あること明なり。此等の例證は又た一般事物に關する學說を離れて、行爲の法則を受くること能はざるを示すものなり。一たび人生の意義と結果とに關する概念に大變化起らんか、從つて早晩倫理の法則に變化を生ずべきや

明なり。吾人若し人間は內臟の作用に過ぎずと考へ、意志は內臟の死滅と共に消失するものなりと信ぜざるべからざるときは、倫理學をして內臟の標準に調整せしむるの傾きあるものなり。

されば實際の道德法も、合理的の事として、唯だ道德的直觀に依るのみならず、又た吾人が事物一般の學說に依るものなり。此の事實を忘却するは、常に直觀的倫理學の弱點たりしなり。直觀的倫理學者は功利主義に陷らんことを恐れて、行爲の目的と結果とを考案の中に加へんことを憚りたり。其の結果彼等は純然たる形式的原理に依るの外なきなり。此の形式的原理は其の範圍に於ては善にして且つ必要なるものならんも、實際の生活を指導する力となすに足らざるものなり。吾人は德を修め良心に從ひ、正當なる動機によりて行ひ、吾人の行爲の規則をして普遍的法則たるに適するが如く行ふべしと敎へられたり。然れどもこは單に行爲の形式に關はるのみにて行爲は己れ以外に目的を有せざるべからず。又た此等の目的は凡て事物の性質に一致せざるべからずとの事實を看過したるものなり。加ふるに此の說たるや狹隘なるを免がれず。個人の道德上の義務は唯だ德を修め良心に從ふのみに止まらず、寧ろ主として善の客觀的實現に存す。唯だ良心に從ふといふは德の最も狹きものにして又た目的の最も低きものなり。價値ある道德上の目的は、道德的人格者の社會に於て、實現せらるべき義と幸福の國てふ思想に於て見るを得るのみ。然れども之をして實現せしむるの保證たるべき人間以上の勢力を隱然假定するにあらざれば、何人も此の目的を以て努力すること能はざるべし。道德的宇宙の永存と最後の勝利及び道德的主體の永續と其の道德的理想に絕間なく近接し得る事を假定するにあらざれば、唯だ良心に從ふことゝ、深慮の箴誡に超越せる道德法を合理のものたらしむるの道なかるべし。此らの低き制限を超越する道德は必ず宗敎に賴らざるを得ざるなり。

自動體は如何にして道德的意義をもてる義務を有し得るかとは、無神論の到底說明し得ざる難問なるべし。そは又た自己の原理に基きて滿足なる道德法を說き又た之れを辯護すること難かるべし。基督敎の概念普及せる世界に於ては、無神論は借用せる資本(基督敎の思想)を以て行動し得べし。然れども己れ自からの力を以て立たざるべからざるに至るや痛く困難を感ぜざるを得ざるなり。實踐的倫理は日常箇々の行爲に對する理想を明かにするのみならず、全生涯に向つて、吾人が道德的體系をして一致完全なるものとならしむる理想を提供せざるべからざるなり。吾人は今此の點を論ぜんとす。

無神論と道德上の理想

無神論と行爲の理想との關係は如何。無神論は如何なる理想を自家撞着なくして提供し得るか。無神論の立場より人生を觀察すれば瞬時に此の問に答へ得べきなり。即ち盲目的勢力といふもののあ

りて絶えず目的なく、計畫なき運動をなし、自からを知らずまた他に覺らるゝことなき、測るべからざる必然力によりて、常に結び又た解くことを爲すものなりと。結果は其の數枚擧し難きものゝ中貝類より人類に至るまで千態萬狀を呈する、『巧に作られたる粘土の塑像』が、半嚴半戯の行列を爲すが如きものなり。此等の形狀は何れも何ら異なる意義を有せず。何となれば此の說に依るときは、何物も意義を有するものなければなり。凡ての點に於て此等の形狀が自働的ならざることは、蠟人形の行列が自働的ならざるが如し。人間の形狀に到りて吾人は奇異なる幻象を發見するものなり。人多くは必然的に神を信ず然かも神は存在せざるなりと。人多くは必然的に己れの自由なるを信ず然かも彼らは自由にあらざるなりと。多くの人必然的に己が責任を信ず。然かも彼らはまた何物も責任あるなしと、彼らの多くは必然的に正邪の區別を信ず。然かもかゝる區別の存することあるなしと。多くの人は必然的に義務を信ず然かも自動體は義務を有すること能はず、若しくは必然力の定むる所に從ひ之を行ふと能はず、或は之を行はざること能はざるなり。彼らは悉く倫理的思想と推論との出來得べきことを信ず。然かも此の假定は全く理由を有せざるものなり。加ふるに此の行列の人員は絶えず減少す。しかして死亡は個人として彼らの終焉たるなり。此の陰氣なる秩序は、暫時根本的無意識によれる、絶えざる新しき形狀の再現により繼續せらる。然かもかゝる道程も亦たいつかは終を告げ、何ら其の記號を殘さゞるに至るべし。是れ無神論に基く人生の歴史意義及び

結果なりとす。吾人は無神論の道德的理想に就いて更に言を加ふるの要なかるべし。吾人若し其の理想に就て語らんか、是れ根本的自家撞着なるものゝみ。然かもそは自己の責にあらずして奇を行ふ僻ある根本的必然力に依るものなり。

かく論じ來れば吾人が已に論述したる中に含意したる他の事柄に導くものなり。倫理學は單に書齋の事にあらずして生活に關するものなり。若し實行の之れに伴はざるときは、高尙なる學說も益少かるべし。されば倫理學は唯だ理想を夢みるのみならず、又た此の理想を實現せしむる靈動力(インスピレーション)を與へざるべからず。吾人は又た此の立場より無神論を論ずることゝせん。

無神論と道德上の靈動力

此の靈動力の事に關し、宗敎的と非宗敎的との別なく凡ての倫理學は主として實際上の困難に遭遇するものなり。人に爲すべき事を語るは、人をして實際之れを爲さしむるよりも更に容易なりとは、世人の既に熟知するところなり。吾人生ける男女の人々と近接するときは書齋に於て知り得ざる問題に接觸す。惡しき意志の外大なる實際上の困難は、光明の缺點にあらずして、寧ろ生活の下層に於て一般に道德的觀念に對する無感覺、無責任なると、生活の上層に於て、何となく意氣の沮喪するにありとなす。下層に於ては、動物なる人は不道德的にあらざるも、副道德的生活を送り、

食色の慾、衝動力によりて左右せられ、低級なる傳說、卑陋なる環象によりて化成せらる、又た其の生活は沒趣味、賤劣なる外形主義にして心理的道德的の醜陋實に甚しきものなり。上層に於ては人生に接觸して覺醒したるの結果、何となく勇氣沮喪し、吾人が生存の現狀に於て、果して價値あるものゝ獲得し得らるゝや否やの疑、實に之れが原因たるなり。吾人は現世以外に眼を注ぐことなく隣人と和ぎ相助けて平和に生活することを得べし。然れども一たび生活に意味を與へ、之れをして尊貴ならしめ、生存をして價値あらしむるものとなす最高の目的に向つて吾人が眼光を注ぐときは忽ち暗中物を探ぐるの感なきこと能はざるなり。吾人はよろしくかくあるべき事に就いては稍明に知ることを得。然れども其のよろしくかくあるべき事が實際存するや否やを確認すること能はず。道德上の理想は疑もなく美はし。然れども其の實行せらるべきや否やに至りては然か明白なるものにあらず。人生は短かく又た寧ろ倦怠を生ぜしむ。此の偉大なる宇宙的秩序は道德的の目的に向つて構造せられたること明かならず。宇宙は多く道德には無頓着にして時には之れに反對すゝが如き觀あるものなり。吾人は目に見ゆる現世の範圍內に生活の法則を見るの外道なきものなり。然れども此處に於てすら理想は餘り力あるものにあらず。利害を打算して德を修むるは賢きことなれども、善に熱中するは世俗的の立場より見て賢きことにあらず。大體現世の生活は、餘りに義に過ぎざる善い加減の理想を除く外、理想に都合よきものにあらず。吾人は寧ろ其の反對を希ふ。

即ち德義は宇宙に行はれ、吾人の理想は唯だ榮光ある實有の影ならんことを望むものなり。然れども之を望むもの何の益かあらん。實際はかくあるにあらず。吾人は忍びて吾人の最善を盡さゞるべからず。

人間も亦た具體的に見れば吾人の勇氣をして沮喪せしむる思考の對象たらざるべからず。多數人類の現世に於ける命運は實に憐むべきものなり。その粗野なる形容、蹣跚たる步態、優越したる動物なること、心理的生命若し之れが均衡を保たざるときは、肉的賤役によりて動物化せらるゝこと、是れ吾人の明に見るところなり。內的生命も亦た慾情と粗野なる感覺の刺激に伴ふ、魯鈍曖昧なる心性以上に超ゆること能はざるが如し。實際內的生命に於て多くを望むべからず。逝ける時代は現在の人類を囚へて其の活動を許さず。惰性の力强くして之れに勝ち難く人生は短くして其の去ること速なり。以上は人生の具體的狀態にして、道德學者は之れに應ずる策なかるべからず。彼らは現在生活の痛く賤陋なるを救ひ。智、力、美を嘲り速に現世の願望を挫き、又た人生の希望を失はしむる死の遍在的譏誚に對し、能く之れに打ち勝ち得るインスピレーションを提出せざるべからず。

かゝる考察より生ずる絕望落膽を防がんが爲めに、人類の上層に在る者は昔より神を信じ來世を望むもの、年と共に多きを加へたり。かゝる信仰の基礎を以てするにあらざれば、世界は合理的たること能はざるべし。此の現世の生活は始めにして終りにあらず。眞の生命は肉の生命にあらず

して靈の生命にあり、眞實永存の宇宙は道德的無形の宇宙にして、此の現象的變化の外界にあらず。義は萬物の根柢にあり。故に吾人は其の最後の勝利を信じ、更に發達したる生活に於て、之れを見ることあらんを期す。偉大なる神、造物主は吾人が不變全能の友にして、萬物は一見混亂、不都合の如く見ゆとも、神は之れに働きて吾人が最善のものたらしむ。今あるもの後あらんもの、生も死も何物も吾人を神の手より奪ひ、又た其の慈愛の意志を妨ぐるものあることなし。かゝる言若し信ぜらるるとせば、問題は慥に困難を減ずること少からざるべし。之れによりて人心は慰められ靈動せられ、其の瘡痍は醫せらるゝに至るべし。然れども無神論は果して靈動力を與へ得るや否や。人に告げて汝は自動體なりといはんか、そは決して道德の奬勵となることなかるべし。彼の行爲は一として內臟の產物にあらざるはなしと保證せんか彼らは責任の倫理に對し惑なきこと能はず。又た高尙なる行爲を奬勵すること難かるべきなり。良心自からも單に明瞭ならざる動物的起原を有せる心理學的事實に過ぎずと暗示するときは、其の權威を增すことあるべき筈なし。死は個人に取りて萬物の終りにして、又た漸次人類全體に取りても萬物の終りなるべきものなりと敎へなば、人をして靈動勇奮せしむること能はざるべし。人生の不幸は無より出でゝ無に歸すといふも、不幸は決して減少せらるゝことなかるべし。不幸も亦た悉く働きて吾人の益となることを信ずるは吾人が信仰の試練なり。然れどもこは唯だ疾風の無暗なる襲擊に過ぎずとするも、不幸は決して其

の力を輕くすることなかるべし。

吾人は最早道德的靈動力の本源として無神論を論ずるの要なかるべし。

無神論が倫理學を構成する困難の點は、之れを次の如く概括することを得べし。

第一倫理學は義務の學として、之れを自動體に望むは背理の事なり。義務、責任、善行、非行、有罪、無罪等の道德上の觀念は此の說の立場より見るときは、一種の迷妄に過ぎざるものなり。第二無神論の見地より見れば、倫理學は正邪に關する判斷の學として、願る不安定なる平衡のものたらざるべからず。何となれば無神論は凡て必然說の懷疑的含意を免るゝの道なければなり。人々の間に適當なる道德上の差異あることを拒否する必然なるものは、實際の生涯に適する吾人が道德上の判斷を空しからしむ。第三無神論は個人若しくは人類全體に向つて善を持續すること能はず、唯だ無に終るのみ。此等の點の何れに於ても基督敎の有神論は宜しきに適ふものなり。自由なる造物者と自由なる被造物とを說くが故に、道德の政治をして意義あるものとならしむ。人の德性をして宇宙の根柢に存する、全能にして永遠なる義の發現たらしむるが故に、吾人の道德上の確信をして些の疑なからしめ、又た之れを亡ぼすの恐れあることなからしむ。最後に有神論は人に價値ある務めを與へ、奪ふべからざる神聖を附するところの人と其の歸趣とに關する概念を敎ふるものなり。單に良心に從ふといふ禮儀の道德は、變じて神の法則と國とに忠順なることゝなるものなり。然る

ときは吾人は吾人の内に在る最高最善なるものに信賴することを得べく、そは決して吾人を邪路に導くことなかるべきを確信せしむるものなり。吾人は今神の子たり、即ち彼れに似るものとならんとの信仰によりて、現在生活の混亂より凡ての疑惑躊躇を取り去ることを得べし。

倫理學に於て絶對なりと稱し得べき唯一の要素は純然たる形式的のものにして、唯だ人生に對し消極的の指導を與ふるに過ぎざるものなり。實踐の倫理學は此等形式的の原理を超越して、人生及び世界に關する一般の學說の中に無上なる道德上の目的と理想とを求めざるべからず。吾人は現世に於て到達し得べきものに、吾人の理想を制限するか、若くは更に大なる理想に達し得べく、且つ其の理想の壞滅せざる樣に生命を延長せしめざるべからず。道德に關する學說にても、其の第一の義務は合理的なるにあり。しかして不可能なることの爲めに生活するは、決して合理的の事にあらず。存在者の性質及び歸趣に關する吾人の概念は、此の存在者が當に從ふべき法則に對する吾人の概念を限定せざるを得ざるなり。

或は此の說は汚れたる利己主義なりといひ、來世を信ずるは純潔なる忠順の心を汚すことあらんを恐るゝものあり。こは眞面目に論議すべきものにあらず。そは議論より生ずる一滑稽たるのみ。此の滑稽は特に彼らが道德性を說くとき、極めて善良なる人なるが如きも、實際は概して甚しく利己的、現世的なる事實によりて見ることを得るものなり。斯かる見解は、聖書の批評家が己が口一

杯に牛羊の肉を嚙みつゝ、彼の神殿の祭用に捧げられたる動物の犧牲を慘酷なりとして惻隱の情、憤怒の念を生ずるものと異なることなし。然れども事實義務は合理的なるが故に、其の神聖の度を減ずるものにあらず。神の存在と靈魂不朽の信仰とを拒否すればとて生活に對し新なる神聖を付與し、悲哀に對しても新なる憐憫の心を加へ、義務に對し更に大なる靈動力を與へ死に對し特種なる神嚴を增すものにあらず。地上にある兄弟は天に父の在ますを認むればとて左程の害を蒙むるものにあらず。

此の反對の根柢に橫はる感情にして、唯だ議論に唱へらるゝにあらず、果して實在のものたらしめば、こは全く吾人の道德は報酬を受くべきものなりとの要求と、善惡の待遇を同一にし、吾人の性質の優勝なる一半をして背理無意義なるものゝ如く處置する體系に對し、吾人の天性が自づから反抗を試むることゝの區別を爲し得ざるに基くものなり。神も來世も現在の道德に酬ゆる爲めに必要にあらず、唯だ之れなくんば吾人の天性は調和し難き混亂に陷り、終に悲觀絶望に沈まざるを得ずといふのみ。吾人が此の信仰を要するは、吾人が利己的滿足の故にあらず、唯だ天地の合理なるを保たんが爲めなり。吾人が此の信仰を持するは之れが爲めなり。知識以上に進み、又た悟性の爲めに遠大なる公準を作らざるべからざるが如く、吾人は生活と良心との爲めに、同一の論理的權利を以て同樣の事を爲すものなり。高貴にして間斷なき努力は、之れに對合するところの高貴にして

永久なる希望なくんば不可能なることなり。唯だ形式にのみ注意して目的を忘却する道德說は行爲をして單に禮儀たらしむるのみ。自から稱して崇高なりといふも、そは單に致命(フェタル)の一歩によりて其の崇高を失ふに至らむ。

前の時代は此の事に關し少からざる經驗を有す。前時代の始めに於て、宗敎は陳腐なる科學と關係せられ、爲めに宗敎と科學との衝突は、當時一般の信仰となりぬ。稍冒險なる人々は今まで宗敎の一部分なりと誤解し居たる陳腐の科學を取り除きしことによりて稍安心を得たり。これ蓋し當然の事なり。實際的の利得は之れによりて害せられざるべしとは、暫時一般人士の信仰なりき。吾人既に迷信を取り除きたり。是れより人類は慥に繁榮に向ふべしと考へられたり。然れども此の朴素的信仰は、一たび事實明白なるに及びて、痛擊を感ぜざるを得ず。見えざるもの見ゆるものゝ權利に干涉を試みしとき、見えざるものを取り去ることは安心の事たりしなり。然れども其の取り去られたる後、此の見えざるものは人の思想と生命の中に用をなすものなり、こは世の看過したるところなりとの考吾人の心中に顯はれ始めたり。見ゆるものゝみにては人類の要求を充たすに足らず。爲めに厭世觀は侵入し來れり。かゝる不信の說：一たび其の新奇を失ふに至るや疑問は玆に起らざるを得ず。曰く此の信仰は果して人類を破滅するものにあらざるなきか。吾人は自己作製の怪物に對せるフランケンスタインの經驗を繰り返すの恐れあらざるかと。(フランケンスタインは人間を作製

したり。靈魂なければ之れに電氣をかけて生氣となす。此の怪物甚しくフランケンスタインに累を及ぼす)。吾人は『空虛なる花瓶の香』に生活するものとせらる。而して人生の理想的分子は、再びかの消散したる夢(神來世の信仰)に賴らずして、之れを保持し得るや否やの疑問起らざるを得ざるなり。

此の新說の預言者と使徒らが人類を助け其の瘡痍を醫する爲めに、果して何を爲し得るかと問はれなば、彼らは實に其の答へに窮せざるべからず。彼らは長く其の徒の勇氣を維持すること能はざるのみならず、又た自己の勇氣すら之れを保持し得ざるものなり。彼らの家は荒敗に歸せり。凡て人的なるもの德及び他愛心と雖も亦た賤むべきものゝ如く感ぜられたり。過ぎし時代の轟きは、凡て他の音響を壓して聽くを得ざらしめたり。道德は痲痺せられたり。情愛も其の短時なると無益なるとを思ひて凋落するに至れり。實に科學の自由は得られたり。然かも科學はたとひ人が、唯だ『巧に造られたる粘土の塑像』に過ぎずして、宗敎より切り放されたりとするも、何ら關するところなきものなり。是れ即ち前章に論述したる推論的厭世敎なり。現代の思索は絕望を生ぜしむる類のものなり。而して絕望は直ちに人心を襲ひたり。これ實に信仰の歷史に於て簡單なりと雖も然かも敎訓多き一節なり。しかしてこは又た吾人の思索的學說は、實際的關係を缺ぐものにあらざることを斷定したりといふべきなり。之れよりも更に批評的なる哲學は、生活自からの反動と共にかゝ

る思索的教說を倒し又た之れに伴ふ厭世觀をも除去したりき、

當時の進歩的思索家が、人類の宗教性に向つて宗教の外に何らかの備を設けんとしたる苦心の跡を認めて、吾人は聊か滑稽の感なき能はざるなり。神の無き代りに吾人は宇宙を拜すべしと勸められたり。而して所謂『宇宙的感情』は能く宗教に代らしめ得べきものなりとせられたり。かくして殆ど自然崇拜に逆戻りしたるの觀あり。又た人類を以て禮拜の無上なる對象に充て之れに多くの驚くべき官能と屬性とを付與したり。是れ祖先崇拜の反響なり。『不可知』なるものすら又た祭壇を有しおもに『宇宙的』種類に屬する多大の感情を以て禮拜せられたり。論爭は彼ら徒弟の間に於て盛に行はれたり。不可知なるものは『到底解し難き永久の謎』の如きものなりとし、或は『宏大なる石鹼泡の如く、破裂せざるも漸次ふくれて薄くなり、終に又た見ることを得ざるに至るが如きもの』なりとして之を嘲りたり。然れども『人類』の崇拜者たる者も亦た不可思議論者によりて、痛擊を受くること少からず。彼らは多くの巧妙なる嘲笑を加ふる中にも、歷史的人類を以て禮拜の對象となすは不適當にして、又た人心を靈動するに足らざることを指摘したりき。死は個人に取りて萬事終るが故に、來世の願望は利己主義なりと斷言するに多大の注意を用ひたり。然れども明日生きん事を願ふよりも來世に生きんことを願ふは、何故に殊更利己主義なるかを解すること能はざるなり。靈魂の不朽なる希望の消滅より生ずべき空隙を塡充せんが爲めに進歩を希ふ稍盲目的熱心を

喚起せんと試むるものあり。然れども進歩する當人絶えず亡び失せつゝある進歩の意義若しくは價値に對し吾人疑ひなき能はざるなり。ストラウスは其の無神論の告白『舊信仰と新信仰』に於てハルトマンの厭世教を罵倒し、背理瀆神の甚しきものなりとなす。而して彼は吾人は基督者が神に奉ぐると同樣なる崇敬の念を『宇宙』に向つて捧ぐべきものなりとせり。不幸にしてストラウスは他の節に於て人は機制的自然界に處して、如何に憐むべき狀態にあるかを述べたり。人は何時自然の爲めに粉末にせらるゝかを知らずと。此の言はハルトマンをして一矢相酬ゆるの機會を與へたり。曰く『吾人をして常に其の無慈悲なる機制の爪牙にかけて慘死せしめんとする物質的實體の集合に過ぎざる宇宙に向つて、宗教的敬虔と依賴の感情を生起せざるべからずといふは、寧ろ强力否寧ろ朴素的主張ならざるべからず』と。此の如く所謂進歩したる諸宗教は互に嚙み互に呑んで止むことなく、傍觀者をして歡樂と教訓とを併せ得しめたり。

無神的思索の宗教に對する態度は近年大に變化せり。無神論の立場よりいへば、根本的にして無意識なる必然が有神論と迷信とを生じつゝありといふ意なり。人は背理極まる宗教に對し此上なき不都合、不可解なる渴望を懷くものと見ゆるものなり、兎に角十八世紀の暴說は、知識ある者の間には既に時世後れとはなりたり。宗教を以て人性に基づく所なく唯だ偶然に加はりたるものなりとの舊說は、今や陳腐の說として顧みるものなし。宗教性を以て人類普通の事實となし其の妄りに看

過すべからざるものなるを認めたり。かゝる場合に於ける自然の假定は、此の事實の客觀的含意は少くとも明白なる反證の擧らざる限り、實在として認定せられざるべからずといふにあり。

此の假定を拋棄するときは、對象なき本能、官能なき機關、供給なき需要となるなり。かゝる見解を持することは如何なる認識論に依るも不可能なることなり。殊に進化論の立場に於て然りとなす。吾人は心自からは內的諸關係と、外的諸關係との齊整にして、一樣なる經驗は、一樣なる思想を生ぜざるべからず、自然淘汰と適者生存の法とは、思想と實有とを調和せしむるものなることを敎へられたり。然かし奇怪なる論理の變調によりて、吾人はまた人の宗敎思想に於て、內外の關係漸次齊整を缺ぎ、不適者不眞實者の生存するものなることを敎へられたり。

これ近時の無神論に於ける宗敎性の位置なり。無神論は宗敎性を度外に置くこと能はず。然れども如何にして之れと相携へて進むべきか、其の道を知らざるが如し。客觀的根柢を認定せずして、宗敎性を滿足せしめんとするの道は、極めて困難なる問題たらざるを得ざるなり。唯だ漫然宇宙的感情、他愛心、進步等を說くの外、何物をも爲すこと能はざりしなり。然れども觀念の根柢を有せざる感情は益なし。人生其の價値を失ふときは、他愛主義も亦た其の力を失ふものなり。進步の主體、無に歸するときは、進步といふも亦た疑ひなき能はざるなり。純然たる歸納的の立場より見れば、實際人は、其の最善なるものも亦た憐れなる者にして、其の果して進步の見るべきものあるや疑は

し。吾人は前時代より知識を增し體裁を改めたり。然かも品格は向上したるや否や明かならず。生活の優美は進み物質的の幸樂は增せり。然かも必しも道德の進步之れに伴へりといふべからず。兎に角人類が地上に於ける無限の進步といふ觀念は、全く肉體的存在の制約によりて禁ぜらる。進步も子孫も終には終局に至らざるを得ず。然る場合に於ては個人の滅亡するが如く、人類も亦た意味なき存在の紛擾は悉く消え失せ、寂として聲なく何ら痕跡をも留めざるに至るべし。これ『高尙なる直觀』の結果なり。これ『人類をして更に高遠なる知識と更に尊貴なる品性にまで向上せしめんとする雄大なる進步』の成れの果なり。かゝる見解には何ら人心の瘡痍を醫する力なく、又た靈感力もなきものなり。これ不安定なる平衡に立つものにして、有神論に立ち返るか、若しくは厭世絕望の淵に沈むか、二者の中何れかを擇ばざるべからず。

此の章に於て論辯するところは、神の存在にあらずして、寧ろ有神論の信仰は、吾人が德性と實際的生活との含意にして、無神論は生活をも亦た良心をも破壞するの傾きありと主張するにあり。此の論辯は確定せられたり。無神論が認識と科學とを破壞することは、前章に之れを論ずるが如し。無神論一たび自己の立場より生命、思想、認識の說を立つるの要あるを見るや、吾人は更に進んで論ずるの必要なきものなり。

結論

緒論に於て思想は或事を要求し、或事を禁じ、或事を認定することを示したり。其の第一類は承認せられざるべからず。何となればこれ理性及び其の含意の法則と範疇とより成立するものなればなり。第二類は拒否せられざるべからず。これ理性の本性に背反するものなればなり。第三類は蓋然及び實際的生活の廣大なる領域に屬するものなり。此の領域にありては、吾人は論理上の證明に依らず、蓋然の理由を參酌し、實際の必要を考量し理想的傾向の爲めに事物を假定して以て結論に達するものなり。吾人が根本的實際の信仰は形式的前提より思索的に演繹したるものにあらず。生活其の物を定式となしたるものなり。此の領域にありては、信仰若しくは是認は意志の分子を含蓄す。抽象的論理は吾人をして不決定の地に立たしむ。かゝる場合に於て利害の感、本能的傾向及び具體的經驗を有する生ける自我來りて思索的平衡を覆がへし結論を促がさしむるものなり。

吾人は既に有神論的信仰が、此等の三類に其の根柢を有し且つ其の何れをも缺くべからざるものなるを示せり。其の各々は價値あるものを貢献す。思索的智力は自から神に關する宗教的觀念に達すること能はず、然れども此の概念の根本的要素を示すことを得るものなり。之に加ふるに有神的概念が自家撞着に陷らず、善く思想の法則と一致せんが爲めに從ふべき形式の方針を定むるはこれ

又た思索的智力の偉勳なり。哲學的思索は多くの誤解を除き、特に思索上背理なるのみならず、歴史上道德を害せしこと少からざる汎神的誤解を排除するに於て消極的の功勞極めて大なるものあるなり。然れども唯だ知識上の目的を以て之を研究すれば、形而上學的の屬性を攻究するに止まるものなり。倫理的及び審美的屬性を有するものとして神を研究するの念は、純粹の智力より生ぜず、倫理審美の天性より發するものなり。悟性は唯だ見解の調和を保ち之れを思想の法則と矛盾するところなからしむる消極的官能を有するに過ぎざるなり。此等の屬性の積極的內容を論理學より學び得べきものにあらず。其の客觀的實有に對する信仰は畢竟するに宇宙は眞なるものゝ寓所なるのみならず又た善なるものと、美なるものとの寓所なりとする、吾人の直接なる確信に基かざるべからず。眞其の物も事實の眞としての外は全く理想的の要素にして、美なるもの善なるものと關係するより、其の意義を生ずるものなり。何となれば事實の眞は、眞なる事實の性質を離るゝときは、唯だ實利的の價値を有するに過ぎざればなり。宇宙若し水は攝氏の百度にて沸騰すといふが如き事實の集合ならんか、驚異、熱心、崇敬等の念を惹起せしむるに足らず、所謂『宇宙的感情』は宗教的情操と同じく存在の余地なからん。此の如き宇宙は之れを知るの價値なく、科學的興味も其の實際に關するものゝ外は直ちに宗教と等しく消滅するに至るべし。

論理的に之れを考ふれば、吾人が根本的信仰の全體系は、所謂僭稱的論法の誤謬に由るものな

り。之れを換言すれば吾人の結論は前提に對し、余りに大に過ぐるものなり。一團の理想は經驗の刺激によりて心中に發生せり。然かもこれ經驗を其の儘寫し出だしたるものにあらず。此等の理想は隱然吾人の心理的作用を限定するものにして、吾人が普通之れを意識せざるに乘じて、殊に其の作用を確實ならしむるものなり。吾人の所謂證明なるものは之れを經驗より演繹するものにあらず、唯だ經驗によりて之れを例證するのみ。理想に反對する事實は未だ理解せられざる疑題として暫く之れを棄て置くものなり。此の如くにして吾人は合理的宇宙若しくは完全なる智慧及び善の神なる概念を維持するものなり。吾人は選拔せる事實によりて之れを例證し終に之れを證明の如く見做すなり。こは固より證明にあらず唯だ先に存在せる概念の例證たるのみ。概念と概念によりて顯はされたる興味とを有せざるものは推論の價値を有せざるなり。

然らば論理學はかゝる推論の數學的證明ならざるを指示するの權利全しと雖も、此等數學的に證明せられざる理想は、實に吾人が心理的生活の眞實なる基礎たるを領會すること能はずんば、其の狹隘や眞に憐れむべしといはざるべからず。此等の理想に對し、隱然信認を有せざれば。吾人は一歩も蹈み出すこと能はざるべし。故に此等の理想が積極的に反證せられざる限り、他の證明なくも心自から之れを承認し之れを推し廣めて吾人が現代生活の次第に進み行く征服を試むるは、心全體の權利なりといふべきなり。此の大なる信仰と其の大なる結果との傍に在りては形式的論理學の形

式的反對論は殆ど醜陋唾棄すべき非禮の事ともいふべきものなり。

有神論は吾人の生活を支配するところの、此等理想の總計にして又た其の根源なり。最高理性の發現たる宇宙の知識上の理想は有神論に導くものなり。最高正義の發現たる宇宙の道德上の理想は有神論に進ましむ。『天地の萬物が之れに向つて進行しつゝあるところの未來の神的出來事』の實際上の理想は、有神論に進入するものなり。略言すれば有神論は何物によるも數學的に證明せられざれども然かも萬物の中に含蓄せらるゝものなり。之を證明せんとすれば、匿證佯爭の弊に陷らざること能はず。之れを拒否せんとすれば背理の弊に沈まざるを得ざるなり。

然れども論理の立場より見れば無神論も亦た有神論に勝るものにあらず。嚴密なる論法が凡ての具體的思考に害あることは吾人の既に論じたるが如し。事物は概して眞實にして佳好なりと假定するは稍知識を超えたる冒險的の言ならん。然かも事物が本來不眞實にして佳好ならずといふも亦た同一の譏を免がるゝこと能はざるべし。無神論の常に依りて以て立論したりし感覺的知識を以て、眞實唯一の知識なりとする假定は、たしかに普通用ひられたる意義に於て誤まれるものなり。吾人が既に論述したるが如く、明確にして拒否し難きことは、無神的思想の機制的要素にあらず。人格の共存、睿智の共通なる法則の存すること經驗の共通なる秩序の行はるゝこと是れなり。而して哲學の任務は此等の事實を解釋して、吾人が全性を滿足せしむるにあり。一たび此の事理を解せんか

無神論の到底行はるべからざるを知るに至るや必せり。無神論は『理性』『科學』『進歩』等の豪語を放ちながら憐むべし自家無神の主義を貫徹すれば、此等皆成立すべからざるを悟らざるものなり。一方には凡て妥當なる知識の含意を知らず、他方には自らを科學と同一視せしめんと試むるの笑ふべき企てなり。其の認識論は偶發的思想の粗笨極まれるものゝ中より拾ひ來りたる出來合はせのものにして、反對者が無神論の自滅的含意を指摘するときは、自說の前提によりて自からを明にすることを務めず直ちに其の含意を拒否する常識の後援を求めんとするものなり。固より吾人の論題は含意の眞僞如何にあらず、唯だ之れ果して無神論の含意なるや否やを明にするにあり。無神論者は都合よく此の點を忘却す。而して其の辯護は之れによりて完備せり。彼等の蕪雜なる實在論も亦た等しく批評的知識の反對するところなり。其の機制的實在なるものは、存在の本體的事實にあらず。睿智を離れて存在すること能はざる、實在化せられたる抽象的事物たるに過ぎざるものなり。そは吾人の天性を擧げて迷謬に至らしむるの傾向ありと宣言せざるを得ず。『外部の關係と內部の關係との對合、たる人心を進化せしむる宇宙は、此の點に於て奇怪なる非對合を生じたり。無神論者がこはかくあらざるを得ざるが故にかくあるなりといふ光明遍照たる定式は、僅に其の微光を放つのみ。盲目的なる力が明なる目的の爲めに働き、無智、智を生じ、無意識、意識を生じ必然自由と義務とを生ずとなすが如き概念は透明なるものにあらず。然れども無神論者は一々之を確信し此上

もなき論理的合理的の事となせり。

無神論の立てかたを概括して考ふれば、或は之れを忍び難き事と感ずるものもあらん。然れども熱心に之れを憤ふるの要なし何となれば無神論自からに依りて、論理的思想を成立せしむること能はざればなり。思想はその固有なる合理によりて出入し進退するものにあらず、唯だ必然によりて然るものなりと。無神論の著書に驚くべき論理を見るは蓋しかゝる理由の存するが故ならん。前提と結論との間に間隙あるは必然に因るものなり。又た明白なる結論を爲すも、奇怪なる躊躇を爲すも、同一の原因より起ることならん。論理を促がすに當り、忽ち感情に訴ふることも、亦た必然の然らしむるところなり。有神論の誤謬及び批評的なる心の頑固にして割禮を受けざるも亦た、前と同一なる基礎を有するものなり。或る學問の大家嘗て此の進歩的思想家を評していへることあり。『彼は凡て他の人の如く己も亦た彼の不可知なる原因が其の作用の手段とせる無數なる作因の一つなりと思惟することを得べし而して不可知なる原因が彼の心に或る信仰を生ぜしむるときは彼は之れを告白し又た之れを實行するの權あるものなり』と。此の結論と共に心理上自重の制限は超越せられたり。而して其の學說は碎けて一種の狂言となり了るものなり。然れども有神論は己が信仰は己が想像の產物にあらず、不可知なる原因の正當なる生產なるを記憶して聊か慰むるところあるべし。且つ之れによりて彼は其の信仰を告白し。又た之れを實行するの權をも得たるものなりと。

吾人は此の上無神論に就いて論ずるの要なかるべし。無神論の含意一たび了解せらるゝときは、無神論は忽ち其の跡を絶つべし。無神論は一種の知識上の寄生虫にして有神論の混亂と忘却とによりて繁生するものなり。決して自立して生ずるものにあらざるなり。無神論者を生ずる主要なる根源は有神論中に見る淺薄なる議論と要點の忘却とにありといふべし。此の事實は吾人をして有神論を推薦するに當り、注意しおくべき要點を概括せしむるの必要あらしむるものなり。

(一)吾人が根本的なる實際の信仰は　思索的の演繹といはんよりも、寧ろ生活を定式となしたるものなり。而して此の實際的の信仰の證據は主として之れを生ずる生活の力、信仰と生活との調和、又た信仰と信仰との調和に求めざるべからず。之れに對する悟性の作用は構成するにあらずして寧ろ調和するにあり。悟性は之れを定式となし之れに體系を付するものなり。そは之れを數學的に證明し若しくは之れを演繹することを得ざるべし。嚴密なる論理上の演繹は望むべからず。そは人的狀態に在りては背理のことなり。かく論じ來れば吾人が最も深玄なる信仰の問題は、生活、經驗及び歷史の問題にして獨り學究的考察に止まらざるなり。

(二)凡て萬物に對する機制的無人格的の說明は、全く空妄なることを記せざるべからず。かゝる場合に於ける原因と結果との必然なる論理的同等てふ說明は、進步なるものを不可能とならしめ、說明をして複說とならしむるの弊あるものなり。此の誤謬を免かるゝ唯一の說明は事實を以て睿智の

働きなりとなすにあり。されば世界を說明するの道は、有神論の外皆無なりといはざるべからず。

(三)此の事實を更らに考察するときは、凡て無人格の立場より立論することは自から複說の弊に陷るか、將た又た無限逆行の弊に沈むか、何れにしても思想は無に歸せざるべからず。何となれば充足理由と原因と結果との論理的同等との法則によりて、吾人は吾人が始めたる事實を繰り返して終るところを知らず。又た之れを超脫するの道なきものなるが故なり。自由を有する睿智の存在を信ずるこそ獨り此の矛盾を脫するの道なれ。

(四)以上の困難は論理的なり。形而上學は更に主張して曰く無人格の平面より立論することは凡て不可能なることなり。何となれば凡て悟性の範疇をして、之れを無人格的に解せしむる時は、唯だ內容を有せざる思想の形式となさしむるものなり――此等範疇は生ける經驗の形式として見るとき、始めて之れを領會し得べく之れを抽象的原理とするときは、自から消失するものなり。されば宇宙を思考するの道は有神論若しくは實證論の中、其の一つを擇ばざるべからず。機制的自然說は純然たる迷妄に過ぎざるなり。

(五)凡ての學說は必しも妥當なる知識なりといふこと能はざるべし。凡ての必然說は一つとして誤謬といふ問題に對し自から破碎せざるものなし。そは自說と同じく反對の諸說をも眞理となすものなり。されば其の結果として凡ての知識及び科學を亡ぼさざるべからず。之に代ふべき說は世界の

原由と有限なる知識者の自由を信ずるにあり。此の點は一般に思ひ付かれざるが故に、殊に注意するの要あるものなり。吾人は現在初生なる心を以て凡ての學說を歡待し敢て其學說と知識の問題との關係を究めざるなり。批評家一たび其の說は理性を亡ぼし、凡て思想の條件を破るものなるを摘發するときは、吾人が温良なる、其の說の結果を以て、反て批評家自身の錯亂に歸するものなり、かくして自滅的學說も其の攻擊の力を保存することを得、自家防衞の爲めには常識の後援をかるものなり。知識の問題は眞實なるものにして、偶發的思想の蕪雜なる假定により、決定せらるべきものにあらざるを認識するまでは、以上の如き迷謬は絕ゆることなかるべきなり。

(六)正當なる知識の說は、萬物の世界を思想の範圍內に入れざるべからず。こは唯だ荒唐なる實證論と不敬なる自然說との述ぶる心以外なる事物を拒否し、世界を以て此の中に內在する無上睿智の思想の權化なりと考ふるによりて爲し得べきなり。然れども此の睿智を以て抽象的論理上の機制若しくは範疇と見るべからず。之れを智と力との總和たる生ける意志と考へざるべからざるなり。

(七)吾人は科學と哲學的思索との間に存する分業法を認めざるべからず。前者は秩序の一樣を經驗の中に探り、後者は其の意義と原因とを究むるものなり。心を滿足せしめ經驗を練達せしむるには兩者等しく必要ならざるはなし。而して兩者は決して矛盾するものにあらず。矛盾は蓋し思想混亂の場合に限るものなり。有神論は世界の原由として神の存在を說くを以て足れりとなす。而して其の

原由の作用の樣式に至りては之れを科學の發見に委するものなり。

以上の諸點を適當に承認するときは、無神論の蕪雜なると根柢なきとは自ら明なるべし。而して科學と宗教とは均しく有神論を以て其の共通の根源辯護者となすことを覺るに至るべきなり。

有神論を教理として論ずることは之れを以て足れりとなす。推論上、有神論者は決して己が信仰を恥とするの理由を有せざるなり、此の智力の承認を變じて、生ける實際の確信となすは、是れ生活自身の事なり。理論的推論の重なる價値と稱すべきものは、不明瞭なる思想より生ずる信仰の妨碍物を除去するにあり。生ける確信を得んと欲せば、人各自から努めざるべからず。唯だ最高最善なる事物に奉仕する忠實なる生活こそ此の確信を有するものなれ。有神論的信仰の大部分は、多く外部の知的承認の程度に存するものなり。人類開發の形式よりすれば此點より起らざるべからず。此の智的承認と言語上の傳聞とを變じて眞理の生ける實現となさしむるは蓋し個人の任務なりといふべきなり。此の變遷は時日を要す然かも亦た完全に行はるゝこと極めて稀なり。此の點に於て有神的信仰は理想にして未だ全然實現したる所有と稱すべからざるなり。(終)

有神論

終

大正五年十月五日印刷
大正五年十月八日發行

定價金壹圓八拾錢

譯者　松本益吉
東京市京橋區明石町八番地
基督教興文協會代表者
發行者　エス、エチ、ウエンライト
埼玉縣市太田町五丁目八十七番地
印刷者　村岡平吉
東京市京橋區銀座四丁目一番地
印刷所　福音印刷合資會社東京支店
東京市京橋區明石町八番地
發行所　日本基督教興文協會
發賣所　教文館・警醒社・丸善書店・福音書店
基督教書類會社・岩波書店

不許複製

4

ᴇᴜᴋ
ᴇ/ᴄ

終